
奇跡の歌は南を目指す

鈴村弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の歌は南を目指す

【Nコード】

N7047T

【作者名】

鈴木弥生

【あらすじ】

平民の娘と、貴族の青年の駆け落ち。一見よくある事件に巻き込まれたユーリは、青年の行方を追う若き大公とその仲間達、および苦手な妹イヴェットとともに二人を探す旅に出る。大切な従者とイヴェットが惹かれ合う姿に苦痛を感じながらの道程で、次第に駆け落ち事件の思わぬ真相が明らかになり……。

序章（前書き）

甘い物万歳。

序章

序章

楽しい想像が、次から次へと湧いてくる。

彼女は知らず知らずにやにやと笑い、それに気づいてあわてて口元を抑えた。思わず周囲を見回してしまうが、研究所には幸い他に誰もいなかった。

「本当に素晴らしいわ……」

うっとり甘い溜息すら漏れる。自分は天才じゃなかろうかとも考えて、また唇の端が笑みでとろけた。

もちろん、わかってはいる。たとえ才能に恵まれていたのが事実だとしても、今回の発見には多分に奇跡と類い希な幸運が味方してくれたのだということ。だがそれでも、この二年の間ひたすらこの研究に打ち込んできた自分を、褒めることは決して悪くないと思うのだ。

「奇跡……そうね、『ミリテイ奇跡』とでも名付けましょう」

原産国の言葉ではもつと違う呼び方があるのだが、それよりもずっと馴染みのある光女神神殿言語で新たな名を与えた方が、きっと人々への浸透も早い。

うきうきした気持ちで、彼女はひたすら楽しいことを考える。

ミリテイがうまく故郷で根付けば、今よりずっと豊かになるに違いない。彼女の故郷は国内の北方で、ほとんどの農作物が育たない。だから三年前までは大半の人々が貧しくて、男達が出稼ぎに行くしかなかった。

そこまでつらつらと考えて、ふと脳裏に浮かんだ面影に彼女は微

笑んだ。

燃えるような赤い髪に緑の瞳の、凛々しい立ち姿。その所作は彼女の知るどんな男性よりも優雅で洗練されていて、若い娘達は一様に憧れていたものだった。

「ユーリ様……」

もちろん、彼女もその一人だった。かの人の秘密を知った今では、多少想いの形は変化しているが、感謝と憧憬の念はまったく変わっていない。

これまでの研究は、あの人のためでもあったのだ。

長い栗色の髪はぼさぼさに乱れ、愛らしい顔立ちは目の下の深い隈で幾分損なわれていた。けれど彼女はこの上なく輝かしく柔らかい表情で、さらさらと文字を綴る。黒いインクの痕跡は、美しい曲線を描いて言葉を創り出す。

——甘いもの万歳。

第一章 ユーリ

二代前の国王は、国内外を問わず芸術家を庇護した。実力や名声に関係なく、何かを生み出す力を持った者達は等しく王の助力を請う権利を与えられ、それに見合うだけの結果を出せばさらなるものを求めることができた。

そういった積み重ねが、王都ロワヌを周辺のどの国よりも美しく洗練された街として有名にしている。だがローレンシア王国の辺境に住むユーリには、そんな麗々しさはかえって居心地の悪いものとしか感じられなかった。

「ユーリ様」

馬車の窓が、外から軽く叩かれる。半ば遮られた視界と唐突な音に、ユーリはびくりと座席から半身を起こした。

「じきに閻女神の神殿です」

硝子の向こうから、黒髪と青い瞳の青年が顔を覗かせている。心臓がどくと一度跳ねたのを、ユーリは辛うじて表情にださずにいられた。

エルヴェという名の従者は、果たして主の動揺に気がついたのかどうか。ほとんど変化のない整った顔立ちは、彼の内心を読みとることを困難にしている。

「……そうか」

だからユーリは、短くそれだけ言った。

成人男性のものよりも幾分高い、柔らかな声音が自分の唇から流れ出る。すでに長いこと聞き慣れているにもかかわらず、耳にするたびほっとする。

しかし今はそんな感傷に浸ることはせず、ユーリは窓の向こうをちらりと横目で見やり、小さくうなずきかけた。

エルヴェが目配せでそれに応える。秀麗で聡明そうな彼の顔が元のように窓の端から消えてから、ユーリはほっと息を吐いた。

ロワーヌの大通りからはずれ、馬車は細い路へさしかかっていた。それでも人通りも馬車もまだそれなりに多い。今はまだ、一年のうちで閼女神イーリアが司る時期だから、この先にある女神を祭る神殿へ参拝する者が尽きることはないのだろう。

そういった客達を目当ての露店も大小あわせて道の両脇にひしめいている。売り子達の賑やかな声が、時折車輪と扉を突き抜けてユーリにも届いた。

けれど馬車を止めることも神殿の入り口をくぐることもなく、ユーリは目的地に着くまで半ば目を閉じて座席に凭れていた。

神殿を左手に道を迂回し、聖なる建物を外界から隔てるようにして植えられた樹木の中をさらに進む。木漏れ日の柔らかさと生い茂る葉で暑さの緩和された空気の中で、神童に身を任せているとついつい眠気を誘われる。

こんこん、と再び窓硝子が叩かれて、ユーリはすんでの所で睡魔の誘惑から意識を取り戻すことができた。

外から扉が開かれる。差し出された手を無視して石畳の上に降り立つと、ずっと揺られ続けていた身体はしっかりとした大地に軽い抵抗を覚えた。

「お疲れではございませんか？」

「大丈夫だ。行こう」

歩き出すユーリの背後に、エルヴェがぴったりと付き従う。

ユーリは唇をかんだ。

極力彼の気配を意識しないよう、視線を前にだけ据えて早足で進む。なのに彼は、少しも遅れずに後をついてくるのだ。

「……エルヴェ」

耐えきれず、とうとう「ついてくるな」とユーリは命じようとしたが。

「ユーリデイス・フレア・デ・ジーヌ様でいらっしゃいますか？」

いつの間にか、二人は目指す建物の入り口へたどり着いていた。出迎えのためにでてきたらしい初老の女性が、戸惑いを浮かべた瞳

でまぶしげにユーリとエルヴェを交互に見ている。

ユーリは、ここへきた目的を思い出して居住まいを正した。

「ええ。私がユーリデイス……ジーヌ子爵の長女にして、リアーナをここへ紹介した者です」

ユーリが服装だけでなく魔道具で声まで男性のそれに変えていることについて、応対に出てくれた王立農業開発研究所所長マリアンヌ女史は初めのうちこそ好奇心と困惑を聡明そうな瞳にちらつかせていた。

だが、それらをすぐに理知の力で押さえ込み、何もいわずに二人を応接室へ通してくれたことに、ユーリは感嘆を覚えた。

やはり、知的さを要求される職業に長年従事する女性は、自然にそういった美德を備えるものらしい。

そんな気持ちも手伝って、ユーリは長旅の疲労とここまで呼び出された不愉快さを表に出さないように細心の注意を払い、マリアンヌに丁寧な挨拶と自己紹介を述べた。

「この度は、さぞ驚かれたことと心中お察します。彼女を推薦した私の責任でもあります。本当に申し訳ございません」

「いいえ、そんなことは。どうぞ顔をお上げください。ユーリデイス様のせいなどではございませんわ」

その声の中に、ただのお為ごかしや上辺だけの社交辞令が混じっていないことをユーリは感じ取る。そのことに少しだけ安堵した。

しかし現実是不変ならない。

「所長殿」

ユーリは、微かに頭を上げたが硬い表情のまま切り出した。

「身元引受人が私である以上、彼女を捜し出すこともまた私の役目であり責任であると心得ます。彼女が失踪したことに關して、何か手がかりがあるかもしれませんので、もし許可をいただけるなら彼女の使っていた研究室や、部屋を探してみたいのですが」

マリアンヌの品のいい顔の中に、またしてもかすかな困惑が浮かび小さな皺を刻む。だがユーリとて、むやみに他人の部屋をかき回す趣味があるわけではない。

「……あの子がこんなことをしたのには、きっと訳があるのです」

「ええ、私もそう思います」

うなだれる老婦人に、ユーリはうなずいてもう一言を付け加える。
「彼女のことは、私が誰より知っていますから」

リアーヌという娘は、ユーリにとって友人でありまた教え子でもある。栗色の美しい髪が昔から自慢で、ユーリは密かに自分の艶のない赤毛と引き比べて劣等感を覚えたものだった。

髪のことだけでなく、それはリアーヌの愛らしさに対しても言えることだ。明るくさっぱりした気性の彼女は、成長するに連れて街で評判の娘になった。しっかりしていて頭もいいとくれば、嫁にと所望する声も多かった。

しかし彼女は、平凡な女としての幸せを望まなかった。

ユーリが子爵領内で営む私塾に、彼女は自らやってきた。女の身で学問を身につけようなどという者は珍しく、ユーリも大変驚いたのだったがリアーヌの意志は固かった。

そして嬉しいことに、リアーヌはとても優秀だった。

私塾内でめきめきと実力をつけた彼女は、やがて本人の希望とユーリの推薦で王都の農業開発研究所へ入ることとなったのだ。
それなのに。

リアーヌの消息が知れないという知らせが届いたのは、つい半月前のことだった。その理由をマリアンヌに問いただして、ユーリが知り得たのはとんでもない可能性だった。

——リアーヌはどうやら、駆け落ちしたらしいというのだ。

そして相手と目される男もまた、捨て置けないような身分の高い者だった。ユーリは名前しか知らないが、ロワーヌの近くに領地を持ち先々代の国王から信頼と爵位を勝ち得た貴族、オラニエ男爵の次男らしい。

もちろん、ただの憶測という可能性もまだ消えたわけではない。だがリアーヌと男爵の息子が一緒にいるところを数人に目撃されていたのは本当だし、二人の行方がわからなくなったのもほぼ同時期だという。まったくの無関係とは思えなかった。

「……わかりました」

しばらくユーリの視線を黙って受けていたマリアンヌが、溜息混じりに頷いて立ち上がる。

「彼女はこの敷地内の寮に住んでおりましたの。ご案内いたします」「ありがとうございます」

礼の言葉がひどく硬く重くなってしまったのは、声を変えている道具のせいだけではない。

ユーリはマリアンヌについてドアを抜け、そのあとを影のようにエルヴェが付き従った。

第一章 シャルル（1）

＊＊

オラニエ男爵は、一月前に見たときよりもずっと疲れて、年老いたように思えた。黒い髪と彼の自慢の一つでもある立派な口ひげの中に、いくらか白いものを見つけてシャルルは胸をつかれる思いがした。

労いの言葉をかけると、男爵は弱々しく笑いながら礼を述べる。

「ありがとうございます、大公殿下。もったいないお言葉でございます」

男爵は恭しく頭を下げるが、彼の全身を覆う憂いと苦悩の影は消えなかった。

無理もないことだ。今までずっと素直で純朴な青年で通っていた二番目の息子が、こともあろうに平民の娘と駆け落ちなどという醜聞を引き起こしたのだから。

「まだ何の手がかりもないのですか？」

「ええ……」

男爵は頷き、やつれた顔をうつむけた。政務に加えて周囲からの心ない中傷で、相当参っているのが見て取れた。

これ以上何をどう言えいいのかかわからず、シャルルも口をつぐむ。

クロードというのが、問題の次男だ。シャルルも面識があったが、今回の事件を聞いてもそんな大それたことをするような性格だったとはまったく思えない、おっとりしておとなしい青年だ。駆け落ちを決意したのだとしても、彼からは決して口に出さないだろう。

「相手の女性というのがどういう人物か、わかっているのですか？」

「ええ。王立農業開発研究所の研究員で、リアーナという娘だそうです。二人がいなくなる何日前、研究所の近くで人目を忍ぶよう

にして話をしていたクロードとその娘を、同じ研究所の者が見かけていたと」

「なるほど」

男爵が言うのであれば、そのリアーヌという娘が相手であるというのは確実なのだろう。目撃した研究員だけでなく、他にも証拠や証言を集めてあるに違いない。

ならばその娘の線から辿り、手がかりを探すしかないわけだが。

「リアーヌの身元は？」

「それが、驚いたことになんかなり確かなものだったのです。ジーヌ子爵の上の姫君からの保証を受けておりました」

「え？」

シャルルは目を丸くした。ジーヌ子爵という名前を、彼はここ最近ずいぶん身の回りで耳にしている。

「それはまた。奇妙な縁だね。子爵の上の姫とは、今度領地へ戻ったときぜひお会いしたいと思っていたところですよ」

ジーヌ子爵領は、シャルルの領地の隣にあるのだ。そんなこともあつての興味だったが、子爵の長女はもっと前からその名前と手腕を聞き及んでいた。

「土地を継がない農民の子供達を集めて、学問を身につけさせた上で文官として育てる。もともと農作物の育ちにくい場所だったせいで貧しかった子爵領を、そんな方法で豊かにしている姫君だという話ですね」

「そうです。子爵領の近隣では、彼女の育てた文官達を召し抱えている者も多くおります。読み書きだけでなく礼節も仕込まれていて、大変評判が高いのですが……」

最後をなんと続けたかったのか、その部分は男爵の溜息で消えた。「その姫君……なんと言いましたか。お目にかかった記憶がないのですが」

「ええ、ご存じと思いますが、姉姫のユーリデイス殿は病弱だということ、これまで一度も領地から出られたことがないとか。ご両

親の子爵夫妻と妹姫は、ほとんどをこちらで過ごしていらっしゃいますが」

シャルルは眉値を寄せた。それでは子爵は病弱な娘を一人遠い領地に残して、放置していることにならないだろうか。そういえば、ジーヌ子爵に関してはあまり目立った功績の話を聞いたことがない。「ほとんどを道楽で過ごしている、ただの洒落者ですよ。二番目の姫が社交界に出られる年齢になってからは特に、あちこちの夜会に奥方と娘御を同伴で現れています」

一見淡々とした男爵の解説の中にも、皮肉な色合いが強かった。

「奥方は、若い頃にさんざん貴公子達を翻弄した美姫でしたが、下の娘御のイヴェット姫はどうやらその血を存分に受け継いでいるようです。いつ顔を合わせても、奥方とイヴェット姫の自慢しか口にしません」

「なるほどね」

シャルルは目を伏せて、唇を引き結んだ。聞けば聞くほど、長女姫のユーリデイスが気の毒になる。

「そして、そんな家族と離れて一人、病弱を押してユーリデイス姫は御領地で奮闘されているわけですね」

「そういうことになりました。ですが、領民にとっては今や子爵自身よりユーリデイス姫のほうがよほど身近で頼りになる為政者でしょうね」

自分の領地を顧みない子爵と、実質的な統治者では当然後者の方が慕われるに決まっている。まして有能であり民の生活を安楽なものにしているとすればなおさらだ。

だが、さしあたってそれはシャルル達には何の足しにもならない情報だ。

「ジーヌ子爵領に行ってみることにします」

唐突ともいえるようなシャルルの宣言に、男爵ははっと顔を上げた。

「彼女からリーヌの話聞けば、何かの手がかりくらいはつかめ

るかもしれません」

希望的観測だと自分でも思ったが、何もしないよりはましなはずだ。

「どのみち私の領地へも行かなければならなかったのだから、ちょうどいい。ここでこうしていても仕方がないですしね」

「殿下」

遮った声の思わぬ陰しさに、シャルルは続きを飲み込む。

「それはなりません。このたびのことは我が家の不祥事、我が身内の不始末です。殿下ほどの高貴な方が関わられては」

「……他の者に示しがつかない、とでも？」

言いつのろうとする男爵を、今度はシャルルが制する。

彼の言いたいことはわかっている。痛いほどに。

理論的な正論を並べ立てる言葉とは裏腹に、男爵の顔には不安と懸念が溢れていたから。

けれどだからこそ、シャルルは退こうとは思えなかった。

「ならば、こうしましょう」

ゆったりと腕を組み、シャルルは男爵を見返した。

「昨今の砂糖の異様な高騰、男爵もご存じですね？」

いきなりの話題転換に、男爵は榛色の目を瞬いた。

「陛下も宰相も、頭と心を痛めておいででしてね。誰かが現地調査へ赴くべきだという意見もちらほらと出てきているのですよ。何か一つの価格が上昇すれば連鎖的に広がっていくというのが恐ろしいですからね」

「ええ……」

「だから、私が探りに行ってきます」
一瞬の間があった。

「は？」

「ですから、調査のため旅に出るのです」

さっさと立ち上がり、シャルルは早口で続ける。

「原材料の産地は南のバラティエ伯爵領ですから、長い旅になるで

しょう。その間に立ち寄った先で、もしかしたらご子息の消息を聞き及ぶかもしれませんね」

「で、殿下！」

シャルルの考えをようやく悟って、男爵は声を上げた。しかしもちろん、シャルルは聞くつもりはない。

これは、絶対に譲れない一線だ。

「ということで、これから出立の支度にかかるので失礼いたします。あまりお気を落とされないよう。それでは」

一気に言い切って、シャルルは身を翻した。

扉を閉める瞬間、追いつがろうとした姿勢のままの男爵と視線が絡み合う。

困惑と、焦燥と、不安。

そして。

そのすべてをしっかりと受け止めて、シャルルは小さくうなずいた。

扉が、無機質な音を立てる。中と外が隔てられる。

廊下を早足で進みながら、シャルルは直前に目の当たりにした男爵の表情を胸の内で反芻していた。

苦渋で染め上げられた、疲れ切った顔。

榛色の瞳を憂いにけぶらせて、シャルルは唇を退き結ぶ。そうして辿り着いた扉の前で、彼はうつとうしげに額にかかる金の髪を後ろへなでつけた。

「終わったよ、行こう」

戸を開けながら中へ声をかけると、中で待っていた二人が同時に振り返った。

第一章 シャルル（2）

「早かったな」

すらりと隙のない身のこなして腰を上げたのは、黒い髪の高身の男だった。彼に頷きかけて、シャルルはもう一人の青年が持ってきた外套を肩に羽織る。

「急いでここを出ないと、男爵の気が変わるかもしれないからね」

「何やらかしたんだ？」

「失礼な。ちよつと公用で旅に出ると押し切ってきただけだよ」

話しながら、シャルルは再び廊下へ出る。二人も後ろから間を置かずについてきた。

「フレイ、それに当たって君を頼りにすることがあるかもしれない」

その後の言葉を続けようとして、シャルルは一瞬ためらった。しかしそれは隣に並ぶ友人でもある男への無用な気遣いだと考え直す。「オーランシュ領は、もともと君の生家のものだったのだからね」果たしてフレイは、やはり何の屈託も見せずに軽く目を見開いただけだった。そのことに安堵して、シャルルは彼の返答を待つ。

「そりゃまあかまわないが、俺があそこを出たのは十五の時だぞ？十四年も前だ」

大きな歩幅を窮屈そうに縮めながら、フレイは不思議そうに首をかしげる。シャルルは軽く手を振って、横に並ぶ彼の疑念を払ってやった。

「領地自体ではなく、お隣のジーヌ子爵の一家に関することを聞きたいんだ。交流があったのだろうか？」

「ああ、まあな」

フレイの黒い瞳の中に、柔らかな光が宿った。少年の頃に離れたきり一度も戻らないまま他者の手に渡った故郷には、やはり温かい思い出があるらしい。

彼の生家、オーランシュ公爵家が消滅したのはつい二年前のこと

だ。主不在になった領地の後継者が定まるまではそう時間はかからなかったのだが、正式に新たな領主が決定したのは今年の冬で、それに伴い様々なものが変化した。

たとえば、シャルルの名前もその一つだ。

シャルル・グィネヴィア・デ・オーランシュ。大公となりまだ半年しか経っていない事実には、彼の中で未だ戸惑いと多少の違和感があるのは否めない。

「シャルル様、馬車を呼んで参ります」

優しい声が、柔らかくシャルルとフレイの歩を止めさせる。いつの間にか、彼らは玄関のホールまで来ていた。

「なるべく急ぎますね」

「ありがとう、ミシエール」

自分でも思いきり蕩けた声が出たなと感じたが、シャルルはかまわず傍らの従者に満面の笑みを向けた。

「ここで待っているから、転ばないように気をつけるんだよ」

「……シャルル様、いくら何でも転びません」

控えめな反論は、困ったような柔らかい表情とともに寄越される。抜けるような白い肌とそれを縁取る水色の髪、そしておっとりとした穏やかな光をたたえた紫の双眸。すでにもう二年そばに置いているはずの従者なのに、今でもシャルルはミシエールの美貌に目を奪われることがしばしばだ。

しかしそんな内心は表に出さず、シャルルはいたずらっぽく片目をつぶって見せた。

「まあ、とにかく行っておいで」

「はい」

ぺこりと頭を下げてから、ミシエールはきびすを返して外へ出て行く。細い後ろ姿を見送って、シャルルは小さく嘆息した。

何であんなに綺麗な人が、女性ではないのだろうか。

世の中は実に不条理で不可思議だ。

第一章 シャルル（2）（後書き）

シャルルはどうやら女好きのようです。

第二章 手がかりにはほど遠い

研究所では同じような分野を学ぶ者は、一つの大きな部屋に机と研究のための資料や道具を宛がわれ、学究に努めることになっているのだとリアーナは説明した。ユーリのために特別に他の研究員を人払いした部屋の中、一カ所だけ奇妙な空間があった。

並ぶ机も棚も、書物や訳のわからない細々したものなどで満たされていて、中には整理整頓されていない箇所すらある。そんな雑多な状態が普通らしい室内にあって、リアーナの仕事場の机の上は、完全に片付けられていた。

単なる言葉の表現ではなく、一切何も置かれていないのだ。

ユーリが目で問いかけると、リアーナは憂い顔で首を振った。

「あの日の朝、私が見たときはこうなっておりました。おそらく寮の私室も一緒に片付けていったのでしょね」

先ほどもでくまなく探索していた、リアーナに宛がわれていたという寮の部屋も同じ状態だった。生活の痕跡も研究の軌跡も、まったく残さずに彼女は失踪したということだろうか。

「彼女の研究資料などは、どれくらいあったのですか？」

「かなりのものだったはずです。この二年間というものの、ほぼ一日中あの娘は研究室で過ごしていましたから」

「休みの日も、ですか？」

「ええ、私の覚えている限りでは。年頃の若い娘なのに、もっと楽しみがあってもいいのではないかと思ったことが何度ありましたわ」

ユーリの覚えている限りでも、リアーナは真面目で熱心な生徒だった。学ぶこと自体が好きだったのだろう。しょっちゅう本を手放さずにいて、わからないところがあればユーリや私塾のために雇われた学者達に質問していた。

「どうして……」

リアーヌの机に触れる。丈夫な木で作られたその表面は傷だらけで、所々にインクの染みもある。かなり使い込まれていることが見て取れた。

本当に彼女は、心血を注いでここにいたに違いない。なのに。

「どうして、駆け落ちなんか」

ユーリの奥歯が、ぎりりといやな音を立てた。

悔しかった。裏切りにも等しいリアーヌの突然の不祥事も、彼女を誤らせた男の存在も。

——口惜しく、憎らしかった。

「絶対に探し出す」

自分でもはっとするくらい、その言葉は苦渋に満ちて唸りのようだった。

「見つけ出して、問いただしてやる。事と次第によっては、その男ただではおかない」

「ユーリ様」

静かな声が、宥めるように彼女を呼んだ。ユーリはようやく目を見開いて顔をこわばらせるマリアンヌに気づいたが、言葉を収めたとしても激しく滾る感情まではとても鎮められるものではなかった。

「……申し訳ありません。取り乱しました」

それでも、ユーリはマリアンヌに何とか謝罪はした。この善良な老婦人に、これ以上無用の心労をかけたくはなかった。

「所長殿にもご迷惑をおかけしているのですから、リアーヌは必ず見つけて連れ戻します。本当に、申し訳ございません」

「いいえ、よいのです。どうか頭をお上げくださいませ」

やんわりとしたマリアンヌの声音は、むしろユーリをいたわる響きを持っている。心の広い女性なのだと、ユーリは感嘆するのと同じ時にいたたまれなくなった。

こんな素晴らしい人を心配させ、つらい思いをさせてまで、リアーヌが選んだという男は価値がある者なのだろうか。

「ユーリデイス様ほどではございませんが、私もあの娘を多少は理

解しているつもりです。ですから、これだけは信じておりますのよ。リアーナは決して、その場の感情や思いつきで行動する娘ではございませんわ」

「……ええ」

この研究所への推薦をもちかけたとき、リアーナはつぶらな茶色の瞳をくるくるさせて驚き、直後には言葉通り跳び上がって喜んだ。ユーリへの感謝を何度も何度も繰り返し、必ず努力を怠らずにがんばると約束した。

約束して、くれたのに。

もう何度目かもわからない溜息が、唇から落ちる。このままここにいてももう手がかりはなさそうだ。

「では、所長殿。私たちはこれで失礼いたします」

「申し訳ございません。何のお手伝いもできずに」

恐縮している所長に、ユーリは優しい言葉をかけて慰める。リアーナの行動の裏にどんなことがあったとしても、この人が原因であることだけは絶対にならないだろうとユーリは思う。

リアーナを先頭に、三人は部屋を出ようと扉へ向かう。これからどうすればいいのか考えて、ユーリの心は重かった。

ここでのリアーナの生活や研究分野を探れば、手がかりが得られると思っていたのに。仕事の方面からそれが不可能となれば、あとは直接オラニエ男爵を訪ねるしかない。

一面識もない上、お互いにとって決して愉快ではない訪問だ。果たして男爵はユーリを相手にして話も聞いてくれるような人物なのだろうかということも不安だが、もっとユーリの気を滅入らせることが別にある。

それは――。

「ユーリ様！」

沈んでいく一方だった彼女の思考を、唐突に従者が現実へ引き戻した。

「どうした？」

「こんなものが。机の引き出しの裏に隠してありました」

駆け寄ってきたエルヴェが差し出したのは、小さな紙片だった。何か走り書きしてある。

受け取るとき微かにぶつかった指が震え、ユーリはすぐにうつむいた。不規則に乱れる鼓動を意識しないよう、急いで紙片の上に意識を集中する。

しかしそこに記されていた短い言葉は、彼女の動揺すら簡単に吹き飛ばしてしまった。

「……リアーナの字だな」

「そう思われます。見覚えがあるような気がしますので」

「でも……どういう意味でしょうね？」

一緒に紙片を覗き込んでいたマリアンヌに、ユーリは何と答えることもできなかった。

——甘いもの万歳。

跳ねるような、流れるような美しい筆跡で、意味不明な言葉がしっかりとそこに書き付けられていた。

第二章 王道との遭遇

＊＊

ロワーヌの目抜き通りは賑わっていた。建ち並ぶ店は初夏の彩りも鮮やかで、気の利いた建物の窓辺には様々な花の鉢植えが飾られていて、ゆつくりと散策するだけでも気持ち浮き立つ。

「闇の神殿が近いだけあって、この時期この辺りは人通りが多いね」
迷惑にならない程度にのんびりした足取りで、道の両側に目をやりながらシャルルは隣を歩くフレイに話しかけた。

「その分犯罪も増えるけどな。……ミシエール、足下気をつけろよ」
フレイは腕を伸ばして、小走りに彼らを追いかけていたミシエールを引き寄せる。微かに頬を上気させてミシエールはフレイを見上げたが、可憐な唇からはためらいがちな苦情が寄越された。

「僕、そんなに何度も転びません」

「……人波で流されて迷子になりかけた奴が何言ってるんだよ」

それはまさについ先ほどの出来事だったので、ミシエールは言葉に詰まってさらに赤くなった。恥じらうように目を伏せて、小さく唇をかんでいる。

シャルルはミシエールに見えない角度で、悩ましい溜息をつく。
こんなにいちいち挙動がかわいらしい人が、なぜ女性ではないのだろうか。というか、彼は確か二つ年上だったはずなのに、シャルルよりもずっと幼く見える。

「そ、そんなことより、シャルル様」

何とか話題を変えようとして、ミシエールが隣へ移動してくる。
フレイと彼に挟まれる格好で、シャルルは軽く眉を上げた。

「どうしたの、ミシエール？」

「いえ……砂糖のことなんですが」

シャルルは、目を細める。間近い位置の美貌を愛でるのをやめて、

フレイに合図をし道の端に移動した。

「さっき入ってみた店でも、お菓子がほとんどなかったね。予想していた以上にひどかった」

「ええ」

雑踏に紛れるように、自然に声は潜められる。

「もちろん、砂糖だけがなくなっただけでは、すぐには影響は出ないでしょう。身分の高い方々は、お茶の時間の嗜好品がなくなって不自由を感じられるでしょうが」

「そうだね」

逆に言えば、それだけの話だ。表面的には。

「でも、やはり気になります。去年はそれほど悪天候ではなかったはずだし、原材料がほとんど採れなかったなんてことはないと思うんです」

砂糖の材料は、南でしか育たないフォウという植物だ。茎の部分に甘味が作られるのを煮詰め、精製して粉末にする。その過程がなかなか手間がかかり、不純物の混じっていない上質なものとなると庶民はもちろん、高い身分の者ですら減多に食べられない。

「パンの値段が、かなり上がっていました」

ミシエールは深刻な表情で、考え考え言葉を続ける。

「もうすぐ聖マイヨン祭だから、国内での砂糖の需要は今とても高まっているはずです。でも毎年と同じ規模で行うとしたら、費用はいつもよりずっとかかることになる。かといって取りやめることはできないから、折り合いをつけながらやるしかない。そうすると……」

「採算をとるために、他のところでも値を上げることになるね」

最後をシャルルが引き取り、ミシエールはうなずいた。

聖マイヨン祭は、闇の神殿が行う聖人の祭りだ。一年のうち闇女神イーリアの司る季節に行われる行事の中で、最も国民の関心が高い。身分違いの恋に悩む若者達に手をさしのべ成就させたという聖マイヨンの逸話に倣い、この時期に合わせて結婚式を挙げる恋人達

が多いのが理由の一つだ。

だが最も大きな要因は、聖マイヨンの加護を得て恋を実らせようとする者が、祭典の開かれる七日間の間に想い人へ贈り物をしようとして一斉に動き出すからだ。

聖マイヨン祭は、闇の神殿が行う聖人の祭りだ。一年のうち闇女神イーリアの司る季節に行われる行事の中で、最も国民の関心が高い。身分違いの恋に悩む若者達に手をさしのべ成就させたという聖マイヨンの逸話に倣い、この時期に合わせて結婚式を挙げる恋人達が多いのが理由の一つだ。

だが最も大きな要因は、聖マイヨンの加護を得て恋を实らせようとする者が、祭典の開かれる七日間の間に想い人へ贈り物をしようとして一斉に動き出すからだ。

その中で最も人気のある贈り物が、ふんだんに砂糖を使った焼き菓子である。もともと砂糖は聖マイヨンが菓として広めたものであり、それにあやかっってそんな習慣ができたのだ。

「神殿からも、国庫の備蓄分を出してほしいと要請があるかもしれないね。もちろんある程度なら聞き入れることは可能だけれど」

「つまり、このままにしておいたら砂糖の備蓄がなくなるってことだろ？」

ぼんやりと家壁にもたれかかっていたフレイが、肩をすくめてミシェールの頭をぼんぼんと軽く叩いた。

「兵士には死活問題だぜ。士気にも関わる」

砂糖の高い栄養価が知られるようになったのはつい最近だが、軍では非常食として遠征時に大量の砂糖を必要とする。有り難いことにこの何年か周辺諸国との関係は至って良好で、兵士達を働かせなければならぬような事態はしばらくないだろうが、兵糧として蓄えておくに越したことはない。

「そういうことだね」

一見すれば、調味料の一つが手に入りにくくなったということにすぎない。しかし放置しておけば各方面に影響が出るのは厳然たる

事実なのだ。それがどんな影響を及ぼすのか、今のところはシャルルにも予想できない。

だから、些細な事件でしかないうちに解決してしまいたいと思うのだ。

今この国を治めている幼い王と、彼を支える忠実な宰相の憂いを払うためにも。それが叶うだけで、シャルルにとっては万の価値があるのだから。

「シャルル様」

手を取られて、彼の黙考は優しく破られる。ミシエールが傍らに寄り添って、真っ直ぐに彼を見つめていた。

「僕は、いつでも覚悟はできています。もう二年も経っているのだから、心が乱されることはありません」

「ミシエール」

彼がほのめかしているのが何のことかわかって、シャルルはたまらず身を乗り出す。けれどミシエールは静かに微笑んで首を振った。「いいんです。シャルル様の願いはわかってるつもりです。だから、そのために僕を使うことを躊躇ったりすることはありません」しつとりと、ぬくもりが伝わってくる。心まで温めようとするかのように、ミシエールはシャルルの右手をなおも深く包み込む。

「ありがとう。だけど、君のことを『使う』つもりはないよ」

「え？」

見開かれた紫の瞳はやはりとても澄んでいて、かつての日を知るシャルルは胸を突かれずにはいられない。

初めて出会ったときの彼ならば、きっとこんなことは言えなかった。

「もし君の力が必要なときは、ちゃんと『お願い』するよ」

水色の髪を撫でてやる。絹糸のようななめらかな手触りだ。

子供ではないとまた抗議がくるかと思いきや、ミシエールははにかんだ笑みを口元に刻み、あまつさえ目元までほんのり赤く染めてしまう。

自分でまいた種とはいえ、至近距離でそんな表情をされてシャルルはひどく狼狽した。

「きゃああっ！」

まさに絹を引き裂くような悲鳴が聞こえてきたのは、彼らのいる場所からほど近い路地裏からだった。

「何だろう？」

「ちょっと見てくる」

フレイが素早く身を翻し、路地へ飛び込んでいく。シャルルも迷わず追いかけてようとして、後ろからミシエールに袖を引かれた。

「危ないです」

「大丈夫だよ。フレイの腕は確かだし、それに――」

一生懸命右腕の袖口をつかんでくる繊細な指を、シャルルは逆の手でそっと握り込んだ。

「君も、私を守るだろう？」

紫の瞳が大きく見開かれ、次いでなめらかな白磁の頬が面はゆるやかな表情を浮かべ鮮やかな朱に染まった。力の緩んだミシエールの手を握ったままそっと外し、シャルルは彼を促して駆け出した。

思ったよりも悲鳴の発生源は遠かったようで、彼らが目指す黒衣の騎士を見つけたときにはすべてが片付いていた。

「よう、来たのか」

気楽に言っただけで剣を鞘に戻したフレイは、足下に転がっている数人の男を避けながら二人を迎えた。

「何があったんだい？」

「よくある話だ。チンピラが自分らより弱そうな奴を獲物にして、たちの悪いやんちゃしたってだけだ」

シャルルは改めて、呻いて転がっている男達とその後ろでうずくまっている小さな人影に目をやった。

人影は、少女だった。それも明らかに身分の高そうな。

簡素ではあるが一目で絹とわかる素材のドレスを身につけて、綺麗に整えて背に流した長い褐色の巻き毛には所々宝石のついたピン

が飾られている。こんな姿でこんなすえた匂いの暗い裏道などを歩いていれば、どうなるかはあまりにも明らかだ。

昔はよく、世間知らずで無鉄砲な貴族の娘達が何を思ったか単身市井に降りて、身近な者を巻き込んだあげく何らかの事件に巻き込まれるという事態がよくあったらしい。ゆえにとうとう時の王が自ら先頭に立って、そういった軽はずみな行動の危険性を懇々と教育した結果、今では見事そんな事態は報告されなくなっている。

だというのに、未だに世の中にはこんなに危機管理の甘い良家の子女が存在するのかと、シャルルは呆れるよりむしろ感嘆していた。まあそれはさておくとして、とりあえず助けたものは責任を持って最後まで面倒を見なければならぬだろう。

「大丈夫ですか、お嬢さん？」

可能な限り優しく声をかけてやったのに、少女の痩せた肩は大きく震えた。よほど怖かったのだろう。自業自得だから同情はしないが。

「もう安心してください。か弱き姫君に狼藉を働いた悪人は、ここにいる騎士が退治しましたから」

口にしてから、我ながら馬鹿なことを言ってしまったな、と思う。後ろから吹き出す音が聞こえたのはきつとフレイだろう。大変きまりが悪かった。

「あの……お怪我はありませんか？」

その場の空気を取りなすように、ミシエールが割って入る。まだ震えている少女の傍らに膝をついて、柔らかに話しかける。穏やかで心地よい彼の声は、怯えきった少女をようやく落ち着かせる効果があったものか、次第に黄色いドレスに包まれた腕が震えを収めていく。

「お一人でいらしたのですか？ 誰か従者をお連れでしたら、探して参りますが」

「……いいえ」

嗚咽の混じった小さな返答が、顔を隠す腕の中からくぐもって寄

越される。

「誰に頼んでも聞いてくれないから、一人で来たの……」

その言葉にシャルルは唇の両端を下げる。今では貴族の姫君達が好む古い古い物語にしか出てこない、手垢がついたような恋愛話の再現そのものではないか。これでは次に来る言葉もだいたい予想がつくというものだ。

「どうしても、聖マイヨン祭の贈り物がしたくて……私」

そして見事に、シャルルの考えたとおりの展開になった。

恋で暴走する高貴な身分の娘。その結果悪漢に襲われて通りすがりのお人好しに助けられる。

何という、期待を裏切らない娘なのだ。悪い意味で。

つい溜息をつきそうになったのを我慢したのは、かろうじて残っていた理性が慌てて礼節を覚えてくれたおかげだ。

それでもうんざりした気持ちには心に積もり、シャルルは後ろで黙々と後始末をしていたフレイを振り返る。彼の騎士はもっと己に正直で、笑いをかみ殺したような珍妙な顔つきで首を横に振って見せた。

「では、お嬢さん」

これはもう、さっさと家に送り返してやるに限る。この分だとまた同じことを繰り返しそうだが、そこまでは面倒見きれない。見るつもりも義理もない。

「よろしければ、私達でお屋敷までお送りいたしましょう。あんな恐ろしい目に遭ったあとですから、お一人では不安でしょう？」

できればこれを教訓にして、周囲へ迷惑をかけないように学習してほしいものだ。

なかなかひどい本音を巧妙に隠しつつ見守るシャルルの前で、少女は恐る恐るといった様子でようやく顔を上げた。

「あ……ありがとうございます。助けてくださって……」

少女は小さく礼を述べた。露わになった小作りの顔立ちに、シャルルは多少感心した。

今はまだ幼さが目立つが、将来かなりの美人になるだろうという非常に整った面差しだった。つんとかわいらしく上向いた鼻と小さな赤い唇、大きな緑色の双眸が印象的だ。

だが、少女自身がそのことについて知り尽くしているという雰囲気が見て取れた。周りの親しい者たちから、美貌のためにちやほやされ甘やかされて育ったのだろう。

というようなことをシャルルは感じたのだが、もちろん表にそれを出すことはなく、無言の笑みで口を開きかけたのだが。

「アントアーヌ卿？」

彼の思惑と今後の予定を見事に変更してしまったきっかけは、ほかならぬこの少女だった。

少女が真っ先にとめたのは、氣遣わしげに彼女を見ていたミシエールでも社交辞令でにこやかに振る舞っていたシャルルでもなく、彼らの背後で手持ちぶさたにしていた青年だったのだ。

アントアーヌ卿、すなわち名指しされたフレイの方はと見てみれば、「うげっ」とか変な声を上げて思い切り顔を引きつらせている。視線はやはり、少女の上に釘付けだ。

「……イヴェット姫」

気のせいではなく、声すら強ばっていた。

そんなフレイの様子にまったく頓着せず、イヴェットという名前らしい少女ははしゃいで歓声を上げていた。

第二章 王道との遭遇（後書き）

なかなか性格の悪いらしいシャルル。しかし、なんで姫君の読む恋愛ものなんか読んでいたのかは謎。

第三章 妹

王都にある子爵家の屋敷に戻り、ユーリは男装も解かないままでぐったりと私室のソファアークにくずおれた。エルヴェはかいがいしく外套を外し靴を脱がせてくれるが、礼を言うのもやっとなかった。

「私に一言もなく、所長にも迷惑をかけて……」

力ないつぶやきだけが唇からこぼれる。目の前のテーブルの上に放り出したばかりのリアーナの走り書きを、ユーリは腹立ち紛れにぐしゃりと握りつぶし、捨てようとしたが寸前で思いとどまった。

「故郷で待っている家族が、どれだけ迷惑を被るか、それすら考えずに……」

こんなものでも、あの娘が唯一残していたものには違いない。そう自分に言い聞かせ、上着のポケットにそれをねじ込んでみたものの、かえって気が滅入るばかりだった。

「ユーリ様」

たまりかねたのか、お茶を淹れてくれたエルヴェが柔らかく言葉を挟んでくるが、次々形となる無念は彼女自身にも止められない。

「なぜだ？」

拳を握る。今まで一度も美しくのびたことのない爪は、彼女の手のひらを傷つけることはなかったけれど、それでも苦い痛みが心に突き刺さる。

「それらすべてを捨ててまで、得ることに価値があるものなのか？」

あんなに……あんなに一生懸命にやってきたこれまでの人生と秤にかけるような、そんな価値のあることなのか？」

リアーナが行方知れずだという知らせを受けて、ユーリがまず尋ねたのはその理由だった。時折リアーナとは手紙をやりとりしていたが、直前にきたものの中にそんなことを匂わせるような内容はいっさい書かれていなかった。

真っ先に考えたのは、何か事件に巻き込まれたという可能性。し

かしマリアンヌにいくら手紙をやっても齒切れの悪い返信しかよこされず、業を煮やしたユーリは自ら王都まで足を延ばし。

その結果が、これだ。

「信じられない」

「ユーリ様」

「……リアーヌは優秀だった。お前も知っているだろう？」

「ええ」

エルヴェの声はあくまで静かで、ユーリの激高すら納めてしまう。耳に心地よく流れる彼の言葉は、いつだって彼女の慰めだ。

「信じられないのは、私も同じです。ユーリ様」

疲れきってあげた視線の先に、彼の青い目が誠実な光をたたえている。

ユーリはいたたまれなくなって、ふいとうつむいた。

「悪夢のようだ。彼女が……リアーヌが」

『リアーヌは、駆け落ちしたのです』

ついにそう告げられたとき、ユーリは激しい怒りのあまり生まれて初めて気を失いそうになったのだ。何かの冗談だと最初に考え、詳しい前後の経過も伝え聞くに至り、混乱と屈辱と裏切られたという思いが彼女を苛み、最後に残ったのは虚脱だった。

それでも最後の希望をかけて、ここまで来てみたけれど。

結果は、この通りだ。

泣くことも笑うことも、立ち上がることもすらもうできない。ユーリは膝の上に両腕をつき、掌に顔を埋めた。

「ユーリ様」

「……何だ？」

「これから、どうなさるおつもりだったのですか？」
これから。

今は頭を使うことはユーリにとって億劫だった。マリアンヌにはあ

あ言ったが、リアーヌ搜索に取りかかる気力すらわからない。

自分達に理不尽と不条理をぶつけていった娘のために、何をする価値があるのかとすら思ってしまう。

だがエルヴェの方は、彼女とは見解を異にしているらしかった。

「研究員の身分で、どうして貴族と知り合うきっかけがあったのでしょうか」

しばらくの沈黙の後、彼は言った。

「リアーヌの研究している分野に興味を持っていたか、あるいは造詣が深いような方だったのならば、話は分かるのですが」

「……そうだな」

のろのろとユーリは顔を上げる。

指摘されれば確におかしい。しかしもしもそんな事実があったなら、マリアンヌは必ず教えてくれたはずだ。もちろん、彼女が知らないだけかもしれないが。

「そして何より気になるのは、リアーヌの私物がまったく残されていないことです」

「え？」

「彼女は研究者です。真面目に仕事をしてきたのならば、集めた資料は必ず研究所なり部屋なりにあるはずです」

「……そうか」

ユーリは奥歯をかみしめる。いくら頭に血が上っていたとはいえ、そんな当たり前のことにさえ気が回らなかったとは。

「突然行方をくらました人間が、そんなものをすべて持っていくわけがない。仮にリアーヌが研究に未練を残してそんな所行に及んだのだとしても、それなら絶対痕跡が残っているはずだな」

「ええ。彼女は二年以上あそこで研究に明け暮れていたのですから、研究資料は膨大な数に上っていたでしょう。独力で持ち運べるはずがない。相手の貴族が馬車などを用意したのだとしても、それならば逆にこちらにはありがたい。手がかりが探しやすくなります」

ユーリはエルヴェを見た。青い目が、励ますように見つめ返して

くれている。

泣きたくなった。

公私ともに、この目が傍らにあってくれたから。

いつだってユーリは、立ち上がったのだ。

口元が自然に綻び緩むのを、彼女は感じていた。肩から力が抜けていく。どれだけ自分が張りつめて余裕がなかったのか、思い知らされた。

ため息をついて、ユーリは従者から視線をはずす。やるべきことと方針が見えてきたのだから、じっとしているわけにはいかない。まずはどこから手を着けるべきか。

「失礼いたします」

彼女の思考は、家令のためらいがちで礼儀正しい呼びかけとノックの音で中断される。

「ユーリディス様、お客様がお見えでございます」

「私にか？」

まったく心当たりがなく、ユーリは眉をひそめる。

公的には、ジーヌ子爵家の長女は病弱のため領地からでられないということになっているのだ。だから十八になるまでユーリは一度も王都へ出てきたことはなく、社交界へ出たのは十五歳の時の数回きりだ。それも中央ではなく、近隣に領地を持つ貴族達との間でのごくごく小さな集まりだった。

当然、彼女をわざわざ訪ねてくるような知り合いなど一人もいない。彼女の顔すら、ほとんど知られていないのだから。

「名前は？」

エルヴェを伴い廊下へ出ながら、ユーリは老いた家令に尋ねてみる。

「はい。アントアーヌ卿とおっしゃいます」

やはり知らない名前のようなのだ。なのに、何か引っかかる。

アントアーヌ。女性めいた響きのその名前。

「エルヴェ！」

しかし記憶を掘り起こそうとしていた頭は、甲高い少女の声で真っ白になった。

おそるおそる顔を上げて、直後後悔する。ふわふわとまばゆく揺れる明るい巻き毛が鮮やかすぎて。

「お帰りなさい。早かったのね」

「はい」

勢いよく駆け寄った美しい少女を、エルヴェは直立不動で向き直って迎えた。長身の彼を見上げて顔中に笑みを浮かべているのは、ユーリの妹だ。

「まだそんな旅の衣装のままなの？　せっかくロワーヌに来たのだから、もっといいものを作ればいいのに」

「長い滞在ではございませんから。それに、従者の私には衣装など」「そんなことないわ。エルヴェは素敵だもの。それに剣の腕だっていいのだから、お父様に頼んで騎士の訓練を受けさせることだって……」

言い募る少女にエルヴェが返したのは、優しいが断固とした拒絶の笑みだった。

「私は今の境遇に満足しておりますし、平民の身分でそんなにしていただいては逆に恐縮いたします」

「そんなの……」

二人のやりとりをみていられず、ユーリは視線をはずす。

エルヴェと話しているときの妹は、昔から変わらずとても楽しそうで、美しい。

大きな丸い緑の目はきらきらと輝き、とろけるような甘さでエルヴェを捕らえている。少し鼻にかかった高い声は柔らかく、母がいつも言うような『殿方に好かれるような話し方』とはきつとこういう口調なのだろう。ユーリの直接的で断定的な話し方とはまったく違う、相手の反応を常に待つような受け身の言葉ばかりを選ぶ。

妹は昔から、そういうそぶりが上手なのだ。だから父も母もその他の人々も、妹ばかりをかわいがる。

自分とは違って、美しく愛らしいから。

「失礼いたします、ユーリデイス様」

彼女のほぞをかむ思いを中断したのは、またもや年老いた家令だった。

のろのろと視線を巡らせて、はっとする。家令の後ろには、三人の見知らぬ青年が手持ちぶさたに控えていた。

「イヴェット様をお送りしてくださった方々でございます」

その説明では状況がよくわからなかったが、想像はついた。妹はどうやら、また誰にも告げずに街へ出たらしい。

「イヴェット」

魔道具を通しているとは言え、ユーリの声は自分でも驚くほどの険の強いものとなった。

「お前はまた、無断で外へ出たのか？」

イヴェットはびくりと肩を震わせたが、それも一瞬のことだった。すぐに姉に向き直り、腰に両手を当てて胸を反らす。

「そうよ。もう子供じゃないもの、一人でお出かけくらいできるわ」

「その格好でか？」

必要以上にきつい調子になっていると、自覚しないわけではなかった。けれどユーリの言葉は、畳みかけるように強くなっていく。

「そんな上等な服で、しかも装飾品もはずさずにこのこ出かけていったのか？　いくらロワヌの治安がいいといっても、貴族の娘が供も連れずに出歩けるという意味ではないぞ？　この間もそれで父上や母上にあれだけ叱られていたくせに、お前は学習能力がないのか？」

「あ、あの時は、なにもなかったじゃない！」

「たまたまだ。本当にそれくらい安全なら、警備隊なんて全員失業している。……あのとき『は』ということは、今回は何かあったのだな？」

「う……」

絶句した妹は、救いを求めるようにエルヴェを見上げる。かつと

頭が熱くなるのを感じ、ユーリは強く拳を握った。

それでも収まらない衝動が、言葉となって口をつこうとする寸前。「いや、さすがに全員解雇はないよ。治安維持以外に結構仕事が多いから」

おっとりした知らない声が、穏やかな口調で姉妹のやりとりに割って入ってきた。同時にそちらを振り返った二人は、家令の後ろで優しく微笑む金髪の青年を目の当たりにする。

「差し支えがなければ、そろそろ挨拶をしたいのだけれど？　あなたが……ジーヌ子爵の上の姫君？」

青年の榛色の瞳には、物珍しげな色も嘲りも見取れなかったけれど。

ユーリはひどく赤面し、唇を噛んで顔を背けた。

第三章 大公

ユーリデイス・フレア・デ・ジーヌ姫が声まで変えて男性の装いをしている理由を、シャルルはフレイからあらかじめ聞かされていた。実の妹であるイヴェットから説明されるより、それはずっと同情と労りに溢れたものだったろう。

「ジーヌ子爵夫人って人は、結婚前は相当有名な美女だったんだそうだ」

王都の子爵邸の応接間で、イヴェットが着替えをすませて取り次ぎの準備が終わるまでの間に、フレイはそんな風に話してくれた。

「俺も昔何度か会っているけど、確かにまあ美人だったな。あんまり好きな感じの人ではなかったけど」

「君は女性の好みにはうるさいからね」

茶化してやると、フレイはちらりとシャルルを横目でにらんでくる。

「だからかもしれないが、長女の姫があんまり自分に似ていないってことで、ずいぶんつらく当たっていた。遊びに行くとたいい彼女は隅の方で泣いてるんだ。かわいそうだったから会う度慰めたり、一緒に話したりしたっけな」

「幼なじみなんだね」

「そうだな。俺がベルモンド家に養子にいつて、それからずっと会ってない。でも、いっそ男の姿をしていれば気が楽だって、あのころから言っていたな」

「なるほど」

ここへ来る道々、シャルルはイヴェットからいろいろと子爵家の事情を聞き込んだのだが、姉姫に対してのイヴェットの評価は実に辛辣だった。身内でも何でもない相手に対してそこまで赤裸々に話すのはいかがと思うほどで、水を向けたのが自分とはいえシャルルは非常に居心地の悪い思いをした。

ああいうのを、『天然』というのだろうか。無邪気に天真爛漫に振る舞い、無防備な姿を見せるのが美德であり愛らしさだと勘違いしているようだ。どうやらフレイの話も総合して考えてみるに、イヴェットにそういった振る舞いを推奨したのは母親だろう。

まあ、それにほいほい引っかかる馬鹿な男が、未だに多いのも悲しい現実なのだが。

「イヴェット姫とは？」

「あの時確か二つだから、たぶん両親にでも聞いたんだろう。実際顔を合わせたのは三ヶ月前だ」

「ああ……もしかして、私の爵位拝領の時の？」

「当たり前」

がっくりしているフレイに、シャルルは気の毒そうな苦笑を向けた。

その現場には居合わせなかったものの、ジーヌ子爵夫妻の猛攻がそれはもうひどかったらしい。

美しい次女姫を地位ある男性に嫁がせ、さらなる繁栄と虚栄を手に入れる。いかにも俗物らしいわかりやすさだった。

「そう、思い出した。私のところへは、最初の挨拶以外近づかなかったな」

「さすがに気後れしたんじゃないのか？　もしくは……」

そこでフレイは、意味ありげにむっとり黙り込む。何かと思い視線を辿ると、部屋の美術品に見入っている銀髪的青年にゆき当たった。

「ああ」

うつとりとした笑みを浮かべる横顔を見て、シャルルも思い当たることがあった。

「そういえばあの時、彼は毒味役で私のそばから離れなかったね」
フレイのむっとり顔がますますしかめられて、シャルルの笑いを誘った。

そんなやりとりを気にしたものか、ミシエールがふと視線を向け

てくる。

どこか焦点の定まらない紫の瞳は先ほどもまでの恍惚に未だとろけており、見る者がはっとするほど現実感がない。もの言いたげにかすかに開かれた唇はふっくらと柔らかそうで、ともすれば指を伸ばしたくなる。

ただでさえ容姿が際だって整っているのに、そんなふうに見つめられて平静を保っていられる者は少ないだろう。

「何かございましたか？」

そう尋ねてくる声も、おっとりとして優しい。

どうしてこの人は男なのだろう、本当に。

「いいや。何でもないよ」

ミシエールを従者にしてから何度目になるのかわからない遺憾の意をかみしめながら、シャルルはごくあっさりと彼の質問を受け流した。

「それでユーリディス姫は、今では完全に男性を装っているんだね」

「ああ。この間ジーヌ領でいろいろ聞いたけど、中にはユーリが女だって知らない奴もいたくらいだ」

「それはまた」

「そして恐ろしく有能らしい。誰一人として反対意見を口にしなかった」

長いこと子爵不在でありながらあの地が一つの問題も起こさず、それどころか今では知る人ぞ知る場所となっているのは、ひとえに彼女の尽力なのだろう。オラニエ男爵も言っていた。

「文官として養成されて職を見つけた若いやつが、故郷に仕送りなんかもしているようで、結果的に貧富の差がある程度緩和されてる。おかげで治安もいい。そこそこに裕福でもあるようだった」

それを十八の少女が発案して切り盛りしているというのだから、空恐ろしい話だ。

「だけどなあ」

まだ迎えの者はこない。フレイは退屈そうに、ソファアに深々と身

を預けた。

「昔からあそこは農作物のできがよくないんだよ。そっちの方は未だに改善されてなかった」

「ふむ」

「何も手を打っていないわけじゃないだろうけど、気候の問題はでないからな」

だからこそ、ユーリディス姫はそれに代わる産業を模索して、結果導き出されたのが文官の養成と派遣なのだろう。シャルルは何か言おうと口を開きかけたが、それは中断された。

「失礼いたします」

家令が控えめに扉をたたく。

「イヴェット様のご用意が整いました。大変お待たせして、誠に失礼を申し上げます」

恐縮する家令に、シャルルは愛想のいい笑みを見せてやる。

「いえ、押しかけたのはこちらですから。時に、今こちらには長女の姫君もご滞在だとか」

「は……」

家令の表情がわずかに動いた。さすがに心のすべてを表すことはなかったけれど、シャルルはそこからユーリディスという少女が使用人にとって有り難い存在なのだろうと見当をつけた。

老いた家令は、見知らぬ訪問者がどんな意図を以て子爵家の姉姫に近づこうとしているのか、しょぼしょぼと落ちくぼんだ瞼の裏から控えめに探ろうとしていた。そこにあったのは悪意ある好奇心ではなく、親しいものへ向けるような情だ。

シャルルは目を睜り、ゆっくりと笑みを深める。ほとんどこちらへやってこない令嬢であるにもかかわらず、彼女は慕われているのだ。一度も会ったこともない姫のことにもかかわらず、胸の内が温かくなるのを覚える。

「参りましょう。紹介も頼みます」

心からの敬意を込めて一礼し、彼は名乗った。

今の彼の名前を。

「私は、シャルル・グィネヴィア・デ・オーランシュ。ユーリデイス姫のお噂はかねがねうかがっておりました」

気の毒に、老家令は大きく目を見開いて、失神しそうな様子だった。見かねてミシエールが駆け寄ったが、間近でのぞき込まれてさらに老人は狼狽える。

「し……失礼いたしました」

ようやく彼が落ち着きを取り戻し職務を思い出したのは、しかしその驚きっぷりからすれば賞賛に値するほど短い時間ののちだった。「こちらでございます。どうぞ……」

三人はまだ少しふらついている家令について廊下を進み、そしてその先で口論をするジーヌ家の姉妹に出会ったのだった。

第四章 榛色

＊

シャルル・グイネヴィア・デ・オーランシュの名前を聞いて、ユーリはまず何かの冗談かと思った。

それよりも、金髪の青年の後ろに控えていた長身の男の方が、むしろ彼女の意識を惹きつけた。

最後に会ったのは、ずいぶんと昔だったけれど。忘れたことは一度もなかった。

あの頃よりずっと大きくたくましくなった人の、あの頃と同じ優しくしていたずらっぽい光を浮かべた黒い瞳が、思い出と重なり合う。

「……フレイ兄様」

彼の本来の名前がアントアーヌということをつい失念していた。女性の名前みたいだからと、彼はいやがって親しい人には洗礼名のフレイと呼ばせていたのだった。

自分のことを誰もが蔑んでいたあの日々の中、唯一まっすぐにユーリを見てくれた人だ。

「元氣そうだな」

昔から長身だったが、目の前にいる彼はさらに背が伸びていて、うんと見上げなければ視線も合わせられない。

鼻の奥がつんと痺れた。不思議な気持ちで胸と喉が締め付けられて、言葉が出てこない。どんな顔をしているのか戸惑って、ユーリは会話の胆著を求めて記憶の中からフレイに関する情報を探した。

ベルモンド家に養子にあって、騎士の叙勲を受けた後、確か彼は養父の供として他国を回っていたはずだ。そして二年前の養父の死をきっかけにローレンシアに戻り、仕官したと聞いている。

その主は。

ユーリは改めて、フレイを従わせていた金髪の青年におずおずと

視線を移動させた。

シャルルの元の名前は、二年前まではシャルル・グウィネヴィア・ロワド・ローレンシアといったことを、ユーリは当然知っていた。国名を負う者——つまり目の前にいるこの青年は、先年退位して大公となった先代の国王だ。

ここにいたってユーリは、自分達のとんでもない非礼にようやく思い至った。妹の不始末の世話をさせたばかりか、口喧嘩の現場まで晒してしまうなど。

「も、申し訳ございません」

ついいつもの調子で話してみて、ざっと頭から足下まで血が落ちる。心なしか、目の前が真っ暗で何も見えない。

自分は今略装の上、男のなりをしているのだ。大公を前にして、とても許されることではない。

「わ……私は」

声も男のもので、今度こそユーリは足下が崩れ落ちる心地がした。ごまかそうにも、真っ白になった頭では適当な口実がまったく思い浮かばない。

口の中が干上がって、掌がじっとり湿っていた。

どうしよう、どうすれば。

狼狽えるユーリの視界に、そのときふと影が落ちた。

「畏れながら大公殿下」

どんなときも冷静さを失わない、落ち着いた声音。

「ユーリデイス様は外出先から戻ったばかりで、お姿も整えられておりません。この場を失礼してもよろしいでしょうか？」

ユーリの姿を大公の視界から隠すように立ちはだかって、エルヴェは身分の差にも臆することなく凜としてそこにいた。

「もちろんかまわないよ。失礼をいたしました、ユーリデイス姫」

「……いえ」

大きな背中と守ってくれた人の存在が、ようやく落ち着きを取り戻させてくれる。エルヴェの後ろに隠れたままで、ユーリは震える

指を喉元にのばした。

リボンのついた黒いチョーカーの留め金は、おぼつかない手でも容易にはずすことができた。首の辺りだけずっと温度が下がったように、ユーリは強くチョーカーを握りしめる。

「……大変、失礼をいたしました……」

そうしてようやく出た本来の自分の声は情けないほど掠れて、とてもシャルルにまで聞こえたとは思えないくらいに小さく弱々しい。「妹が、多大なるご迷惑をおかけ申し上げまして、お、お詫びの言葉もございません。……父にもよく相談し、後日改めて、謝罪とお……礼にうかがいたく……」

言葉だけは出てくるのに、いちいち喉で引っかかりひどく不明瞭になる。

いつの間にか、肩を縮めてうつむいている自分に気がついた。自分の高い人に対して、これでは比例に当たると頭ではわかっていて、頭を上げるようにという必死な叫びが自分の中で聞こえているのに、身体が思うように動いてくれない。

「ユーリデイス姫」

混乱するユーリの頬の上で、ふわりと風が踊った。

「大丈夫ですか？」

思いの外近いところで、もの柔らかな大公の声はいたわるように降りてくる。

「突然お邪魔をしてしまったのはこちらです。そんなに固くならな
いで」

自分の今の格好を、確かに彼は見ているはずなのに。魔道具をつけて声を変えていることも、ユーリは露呈してしまっているのに。

先ほどまでとは違う気持ちで、胸がいっぱいになった。取り繕うための同情でも、上辺だけの気遣いでもなく、大公殿下はユーリに言葉をかけてくれているのだとわかる。

そうでなければずっと身分も下の自分のようなおかしな女の前に、シャルルが膝などをつくわけがないのだから。

「イヴェット姫とお目にかかったのは本当に偶然だったのですが、実はそのことがなくてもいずれあなたを訪ねるつもりでおりました」
「……え？」

「教えていただきたいことがありまして。正直、こちらに来ておいでと聞いて何という僥倖と喜んでいたところだったのです」

ふわふわと柔らかそうな金色の髪、優しげな榛色の瞳が、真っ直ぐにユーリを見つめている。

こんな目で自分を見てくれたのは、三人目だ。

真っ白になっていた頭が、正常な働きを取り戻す。喉はからからだったが、もうおかしななどもりはせずすみそうだ。

この榛色は、不思議と心を穏やかにしてくれる。

ユーリは深く呼吸して、口を開いた。

「私でお役に立てるのであれば。何なりとお尋ねくださいませ、殿下」

自分の女としての声をしっかりと聞いたのは、ずいぶん久しぶりだった。

第四章 榛色（後書き）

フラグが立ちました。それにしても、リボン型のチョーカーで変声って某コ○ンじゃねーかと今気づきました。――〇

第四章 姉妹

赤い髪は短く切られ、当然化粧などしていない顔は女性のおでやかさなど微塵も感じられはしなかった。顔立ちも、たとえば妹のイヴェットと比較すれば格段に地味で、醜いとまではいかないもののお世辞にも美人とは言えない。

しかしシャルルは、ユーリデイス姫の緑の目が浮かべていた感情の揺らめきのほうがずっと気になっていた。

黒いチョーカーを握りしめて、従者の影に隠れるようにして必死の形相で立っていた少女。顔色が悪かったのは、激しい動揺が瞳の中にあっただのは、果たしてシャルルの身分に驚いていたせいだけだったろうか。

「殿下、お茶のおかわりをお注ぎいたします」

「ん？」

ふと顔を上げると、すっかりめかし込んだイヴェットがポットを手につこりとそこにいた。年齢は十六と言っていたが、あどけない仕草がずっと幼く見せている。

「ああ、ありがとう」

「お姉様はお支度に時間がかかっておりますの。大公殿下をお待たせするなんて大変な無礼とは存じておりますが、どうぞお許しくださいませ。姉は普段女らしい姿なんてしないので、きつとどうしていいかわからないんですわ」

別に不愉快に思っているわけではなかったので、シャルルは当たり障りのない返事を返した。イヴェットはまた無邪気な笑みを見せて、隣のテーブルのフレイとミシエールのところへもお茶を淹れ直しに行く。

淑女としての作法は、どうやら十分にしつけられている少女のようだ。

「きゃっ！」

とシャルルが胸の内では表した直後、イヴェットは小さく悲鳴を上げる。何事かと見やると、どうやらほんの少しミシエールの服にお茶のしぶきがかかってしまったようだ。

「ごめんなさい。火傷はなさいませんでしたか？」

「いえ、お気遣いなく。ありがとうございます」

ふきんを自ら手にして、ミシエールは謝るイヴェットに対してむしろ恐縮していた。お互いにぺこぺこ頭を下げあう二人を、フレイが笑いをかみ殺しながらなだめている。

シャルルは、少しだけイヴェットに対する評価を改めた。

感情だけで後先考えず突っ走り、周りに迷惑をかけまくるという、一途さとはき違った浅慮は正直鼻についたが、根は悪い少女ではないのだ。身分としてはずっと下のミシエールに対して、きちんと頭を下げられるのだから。

「あら？」

ようやく謝罪合戦が終了したとき、イヴェットはきよとんとつぶやいてまじまじとミシエールの顔を見つめた。

「あなた、もしかして」

「え？」

大きな緑の目にのぞき込まれて、ミシエールは戸惑ってたゆとうような眼差しでシャルルとフレイを交互に振り返る。それを受けて、フレイは軽くミシエールの腕を引いてイヴェットの視線から遠ざけた。

「あ、ごめんなさい」

自分の振る舞いの無礼にようやく気づいて、イヴェットはあわてて下を向く。しかしきらきら輝く瞳からは、幼い好奇心が消えていない。

「……違っていたらごめんなさい。ミシエール・ブラン画伯ではなくて？」

イヴェットの目に満ちる感情に、憧憬と幸運が加わる。ミシエールはというと、真っ赤になって小さくこくりとうなずくのが精一杯

だったようだ。とうとうフレイの後ろに隠れてしまっている。

「やっぱり！ 一度遠くからお姿を拝見しましたの。なんて素敵なんでしょう、こんな偶然で画伯とお近づきになれるなんて」

ミシエールは数年前から故郷で絵を描いて生計を立てていたが、王都で彼の名前が売れ出したのはここ最近のことだ。作品数は少ないが、徐々に愛好家も増えており新作を待たれているという。

「どうやら、この少女もその一人だったようだ。」

「イヴェット姫、ミシエールが困ってるから……」

フレイがやんわりと制しにかかるが、そんなことでは彼女の興奮を抑えることはできなかった。

「オラニエ男爵家のアントワネット様が絵を描いていただいたと聞いて、いつか私も肖像画をお願いしたいと思っておりましたのよ」
まくし立てるイヴェットの口から男爵の名前を聞いて、シャルルはふと温かい気持ちになった。

アントワネットは、男爵の長男の妻だ。昨年嫁いだばかりだが、夫と義父に誠実に尽くす姿は社交界でも評判が高い。

そう、男爵には彼女がついていてくれるのだ。いくらかでも、彼の心は慰められているに違いない。

シャルルが和んでいる間に、ますますイヴェットの話しぶりには熱がこもっている。

「画伯はあまり人物画をお描きにならないと伺っておりますけれど、私風景画も大好きですわ。お父様をお願いして、一枚買ってもらいましたのよ」

「……ありがとうございます……」

素晴らしい才能があるくせにそれを褒められるのを極度に恥ずかしがる青年は、フレイの影で縮こまってかわいそうなくらいいたたまれない様子だ。

さすがにこれは、助けに入った方がいいだろうか。

シャルルが腰を浮かせようとしたときに、ノックが厳然とその場に割って入る。

「失礼いたします」

声をかけながら扉を開き、素晴らしく優雅な所作で一礼したのは、先ほどユーリディス姫のそばにいた黒髪の青年だ。名前は確か、エルヴェと呼ばれていた。

「……大変、お待たせいたしました……」

飾り気のない、流行などをまったく気にしていない野暮ったいドレス。短く切った髪を隠すためにどうやらかつらを用いたらしく、不自然に頭が大きい。

偽物の髪 of 帳に隠れて、緑の瞳が見えない。

「ひどい格好。そんな姿で、大公殿下の前になんてよく出られたわね」

辛辣な言葉は、乱暴にポットを置く音と一緒にユーリディス姫を突き刺した。

褪せたドレスに包まれた肩が、びくびくと震えている。

「でも、お姉様に最新流行なんて似合わないものね。それで正解なんだわ」

肩を怒らせて姉の横をすり抜けざまに、イヴェットはとどめの一言でさらに彼女を傷つける。

その直後に扉が閉まり少女の姿が視界から消えていなければ、シャルルは迷わずもっとひどい皮肉をイヴェットにぶつけていただろう。

「……妹が、お見苦しいところを……」

やはり顔は上げないままだったが、それでも懸命にユーリディス姫は震える声を絞り出す。

この場からいなくなった少女のことは頭から追い出すことにして、シャルルは目の前で萎縮している人の前に静かに立った。

「でん、か……?」

「改めてご挨拶を」

恐らくかなり人見知りであるだろう姫君を、怖がらせないように細心の注意を払って。

「お目にかかれて光栄です、ユーリデイス姫」
そつと掬い上げた細い指先を、彼は恭しく押し頂いた。

第五章 エルヴェ

魔術という不思議の力がある。

もとは闇と光の神殿に仕える巫女にのみ許された力だったのだが、それを欲した王侯貴族が巫女を妻として迎えることを繰り返した時代があった。

やがて神殿がそれを禁じ、国をも揺るがす大きな争いが起きたため、今では在職中であつたり力の強い巫女を娶ることは許されていない。しかしかつて世俗に流れ出した奇跡の力は、ユーリ達の代になつてもいくらか血の中に残っているわけだ。

オラニエ男爵が、すでに息子クロードの失踪当時から搜索を続けているにもかかわらず何の痕跡も見つからないのは、クロードがその力を使って姿をくらましているせいではないかと、二日前の会見でシャルルは言っていた。

「ユーリ様」

男物の旅装にチョーカー、腰にはいつもは持ち歩かない剣。必要なものはすべて背囊と袋に詰めた。

そんな姿で厩に行くと、エルヴェもすっかり支度を調べて馬に鞍の用意をしていた。

「エルヴェ」

「おはようございます。すでにお支度はできております」

「そうか」

昨日急に決まった旅立ちだったのに、彼の準備も完璧のようだった。やはりこの従者はとても手際よく、優秀だ。

だから、離すことができない。

「お姉様！ エルヴェ！」

馬にまたがろうとして、ユーリは動きを止めた。

「私も行くわ！」

言葉だけは勇ましく、朝露の宝石で着飾る草を無遠慮に踏み分け

て走ってきた小柄な人影を、ユーリは振り向きざま思いきりにらみつけた。

「お前は馬鹿か？」

美しく纏めた巻き毛と、豪華な乗馬服。そしてそんな姿に不似合いな、大きすぎる行李。

「馬鹿って何よ！」

そんなユーリを果敢にも真っ赤な顔でにらみ返して、イヴェットはズリ落ちそうな行李を抱え直す。

「お姉様達、南へ行くのでしょうか？　だったら一緒に連れて行ってくれたっていいじゃない！」

「何をしに行く？」

「それは……」

イヴェットは急に口ごもる。そしてなぜか、ちらちらとエルヴェを横目で窺った。

何を憚ることがあるのかは知らないし知ったことではないので、ユーリはここぞとばかりに畳みかける。

「いつも移動といえば馬車で、しかもその間中召使いに世話をしてもらえばかりだったお前が、こんな旅で耐えられるわけがないだろう？　第一、満足に馬にも乗れないくせに」

「な、並足なら平気よ！」

「私達は確実に走らせる」

今度こそ二の句が継げず、イヴェットは悔しそうに唇を噛んだ。これだけ言えばついてこようとは思わないだろうと、そのときユーリは思ったのだ。

でも。

馬に向き直ろうとして、たまたま視界に入ってしまったのだ。

ずっと黙って控えていたエルヴェが、微かに秀麗な表を曇らせて妹を見つめているのを。

瞬時に頭に血が上った。

「お前は本当に考えなしだな」

どんなに持ち主が激高してしようと決して揺らがない作り物の男声が、それゆえよりいっそう厳しい響きで言葉にまといつく。

「何を考えたのか知らないが、思いつきと感情だけでよくもまあ平気で周りを振り回せるものだ。理性で考えるということをしてない。そしてお前や母上のような女は、そんな愚かしい行動をとつてもすべて『一途』という便利な一言で片付けられて、ちやほやされるものな」

妹のように、美しくて一挙手一投足が危なっかしくて、人に世話を焼かせずにおかないような女は。

それでいて無意識のうちの媚びた無防備さで、異性に取り入るのがうまい女は。

どんなに周りにとって迷惑でうつとうしい存在であろうとも、愛されるのだ。

自分と違って。

「ユーリ様」

「行くぞ、エルヴェ」

うなだれている妹を見ないようにして、ユーリは馬の背に跳び上がる。振り返りもせずには拍車を入れ、敷地を出るまで一目散に馬を駆けさせた。

後ろから聞こえてくるもう一つの馬の足音に、身体がばらばらになるかと思うほど安堵した。

同時に、胸も痛んだけれど。

前だけを見据えていた視界が、不意にぼやけた。

それをユーリは、向かい風のせいで涙が出てきたのだと思うことにした。

まだ朝靄のかかる時間帯で、街の通りには早くから開いている何軒かの店をのぞいては、まったく人の気配がない。馬の速度を落とし、ユーリは石畳の音を聞きながらようやく頭を切り換えることができた。

ここからはもう、あんなことで悩んでいる暇はない。

王都の南門が開くまでには、まだ十分時間があつた。約束していた刻限よりもずっと早く着いてしまつて、ユーリとエルヴェは門の脇にある井戸のそばで改めて旅の荷物の確認をすることにした。

水もある、簡易食料もある、防寒着もある、その他細々としたものも、ちゃんと入っている。

旅は身軽であることが第一だ。今回は目的地までがかなり遠いのだから、なおさらのことである。必要最低限のものだけをそろえたら、背囊と肩から提げられる袋一つで事足りた。

——行李一つ丸ごと持つてくるなんて、何を考えているのだろう。「ユーリ様、お加減が優れないのですか？」

「え？」

ふいと目を向けると、いつでも忠実な従者の心配顔が傍らにあつた。心の裏側まで見透かされそうな青い瞳から、ユーリは眉根を寄せて視線を逸らした。

「……ひどい姉だと思っているか？」

「は？」

「行李の荷物を半分減らさせてでも、わがままを聞いてやるべきだとお前は思ったか？」

自分でも何を言い出すのかとひやりとしたが、口をついて出た言葉はもう取り返せない。

エルヴェに見えない位置で、指先を握り込む。どうするつもりなのだろう。自分は。

エルヴェが、是と答えたりしたら。

自分は。

「……言い方は確かに辛辣だったかもしれませんが、ユーリ様の判断は間違っておりません」

静かに寄越されたのは、そんな返答。

沸き上がったのは安堵が半分と、それから。

泣いてしまう、と思った。

「おはようございます」

明るくはきはきとした声は、頭の上から降ってきた。

「ずいぶんお早いんですね。お待ちせしました」

靄の晴れてきた朝の空気を割って、まだ少しまどろみを残す朝日をその身に纏って。

柔らかく空気に踊る金の髪の毛の軌跡と柔らかなシャルルの笑顔を、ユリーはしばし惚けたように見上げて、それから慌てて挨拶と会釈を返した。

第五章 出立

調べさせた結果、やはりクロードは魔術で自分たちの足跡を消していた。『隠行』と呼ばれる術だ。

通常、一つの術を破るには施術者以上の魔力が必要になる。クロードはどうやら父親よりも魔力が強かったようで、男爵が独自に捜査をしている限りはこの先当分見つからないこととなっていただろう。

幸いシャルルのそばには、恐らくたいていの術者ならば容易に凌駕できる力の持ち主がいるわけだが……。

「シャルル」

考え込んでいた彼の隣に、前を走っていたフレイが馬の速度を落として並んだ。

「ここで少し休もう。井戸がある」

「ああ」

彼はそのまま馬を下がらせ、後続のユーリ達にも同じことを伝えるに行く。シャルルはそれを確認して、自分も馬の足を遅くした。

男の姿をしているとはいえ、ユーリは女性だ。正直馬での道行きには不安があったが、彼女はなかなかの乗り手だった。現に今も、彼女は息一つ乱していない。

出立前に互いに持ち物の確認をしたときも、その用意の良さに感心した。あれだけ少ない荷物なのに、食料も水も、地図までが用意してあったのだ。

一人で領地を切り盛りしているだけあって、今までシャルルが出会ってきた貴婦人や令嬢達とはかなり違う。彼女が男であれば、きっとよい跡継ぎとして素直に子爵達も喜んでいたはずだ。

日が高くなる時間帯ということもあり、井戸のそばは混雑していた。少人数の旅人ばかりだったのが唯一の救いだ。もしこれで行商隊などがいたりしたらなかなか目的を達せない。

「大丈夫ですか？」

馬から下りて外套の覆いを外したユーリに、シャルルは声をかける。彼女は真っ直ぐシャルルを見上げ、頷きかけた。

「もう少し速い移動速度でも、差し支えありません。彼女達は歩きとは言え、ずいぶん前に出発しているのですから、急がなければ追いつけません」

「そうですか」

話す言葉は男の声、背筋は真っ直ぐに伸びて緑の瞳も少しも物怖じしない。姿のよい凛々しい佇まいに、近くにいた女性達が見とれていた。

美しさという尺度で測れば、彼女は決してその範疇には入らない。けれど内から感じられる聡明さと堂々とした態度が、人目を惹きつけずにはおかないのだ。

惜しい、とシャルルは思った。

顔の造作というほんの一部分にしか過ぎない要素のために、彼女は今まで他のもっと素晴らしい資質を否定されてきたのだ。

「それよりも……その、シャルル様」

遠慮がちに、彼女はシャルルの名前を呼ぶ。敬称では耳目を集めやすいからと、旅の間は名前で呼ぶように彼が提案したのだ。

「ミシエール殿は、大丈夫なのですか？」

「ああ……」

つい、苦笑せずにはいられなかった。辺りを見回すと、手頃な大きさの石にぐったりと腰掛けて、フレイの介抱を受けているミシエールの姿があった。

「申し訳ない。あまり長距離の移動になれていないもので。普段どちらかというと、座ってする作業が多いから」

「ご病気というわけでは」

「いえ、違います。体力がないだけです」

シャルルは軽く否定したが、ユーリはなおも心配そうにミシエールを見ていた。

「やはり、今まで通りの予定で進みましょう。出過ぎたことを申しました」

「ユーリ？」

「一緒に行動する人に無理がないようにしなければ、どこかでしわ寄せが来ます」

シャルルは一瞬目を瞞ったが、すぐにうなずいて微笑んだ。

「ありがとう」

「いえ……」

ユーリはふいと顔を背けたが、赤い髪の毛に隠れた頬がほんのり染まっているのを愛らしいと思った。

「ユーリ様」

エルヴェがやってきて、水の入った革袋をユーリに差し出した。途端に彼女が少し緊張したのを、シャルルは見逃さなかった。

「次に補給ができるとしたら、三十クエントは先になります。次の街で泊まった方がよろしいかと」

「……そうだな。この先にあるのは――」

「ティタンという小さな宿場町です」

地図も見ないで、エルヴェはすらすらと答える。長い間彼はユーリの公私における片腕だったというが、それが納得できた。

けれど。

「わかった。――シャルル様、そのような予定でよろしいでしょうか？」

「ええ、結構です」

シャルルの答えを聞いてエルヴェは無言のまま会釈し、フレイ達の方へ歩いて行った。残されたユーリの顔に視線を止め、思わずシャルルは何か言葉をかけたくなる。

緑の瞳は、揺らぐ心をどう表していいかわからず激しくたゆたっている。彼女が今にも泣くのではないかと思ったが、結局二つの宝石は瞼の裏へ厳然と隠される。

「……彼は、とても優秀ですね」

だからシャルルは、それだけしか言うことができなかった。

「ええ……いつも私を助けてくれています」

魔法で変えられた声からは、彼女の本心を窺うことはできない。

第六章 宿屋

宿場の食事には慣れていた。どちらかというと領地の城より街中で食事をとることの多いユーリには、むしろこういった庶民の料理の方がなじみがあり、口に合う。

「うん……やっぱり砂糖が入ってないね」

隣に座っていたシャルルが、店の者に聞こえない声で呟いた。

「フフトが採れないのでしたね」

匙を置いて、ユーリは目の前の皿の中身に視線を注いだ。本来この煮物料理には砂糖が欠かせないのだが、植物の汁か何かでかろうじて甘みをつけただけのようだった。当然、味はあまりよくない。

「こうなると、生産が南だけで行われているというのが痛いね。早急に対策を立てておくべきだった」

元国王は真剣に憂いているようだった。ふと既視感を覚えて、ユーリは彼を見やる。

そう、確か、もっと以前に似たようなことを言っていた誰かがいた。

——だからユーリ様、砂糖は絶対に利益になるんです。

熱心に、当時は夢物語とつい諫めてしまったのだが。

——気候の条件は正反対です。だけど、甘味は弱いけど甘さを持つ植物の汁は採取できるんです。つまり、私達の住んでいる土地でも十分甘くなるような植物を見つければいいんですよ！

そう、そのために、彼女は勉強を続けて。

——なかったら私が作ります！ 王都ではそのための研究機関があるって聞きました。そこへ入って、私が絶対に……！

「……リアーヌは、ジーヌ子爵領のような寒冷なところでも、砂糖の原材料が作れないかということを研究していました」

ぼろりと零れた追憶のかけらに、同じテーブルに着いていた四人が一斉に振り返った。

「ご存じかどうか、ジーヌ子爵領はあまり農業に向いていません。それで、領地では物ではなく人の力で暮らしを支えていこうという方針をとっているのですが……」

「ええ、あのあたりは雪が多いらしいですからね」

どこか申し訳なさそうに、シャルルが相づちを打つ。そういえば彼は、隣の地を治めるべくして大公になった人なのだ。しかしいろいろな事情で今日までそれが実現していないことを、ユーリも知っていた。

「俺の父の代では、まだ領内の鉱山が生きてたからな」
場を取りなすように、フレイが口を挟む。

「けど兄の時にどうにもなくなっちゃって、結構大変だったんだよな。だから俺も養子に出された」

「フレイ様……」

氣遣わしげに低い位置から見上げるミシエールに、フレイは屈託なく微笑んでいた。

「どうせあのままあそこにいたって、家督も継げないし一生宙ぶらりんだったんだから逆に幸運だったさ。まあ……出てくときさんざん泣かれたけどな」

と、彼が自分の方に視線を寄越したので、ユーリは瞬時に真っ赤になった。

「いくつの時の話ですか！」

確かに寂しくて大泣きして、フレイを困らせたのは事実だけれど。フレイは声を上げて笑い、その嬉しそうな表情のままでここにこ

とユーリを眺めている。

「だけど、ちゃんと立派にやってて安心した。よくがんばったな」
そうして、彼は本当の兄のように。

優しくユーリの赤い髪を撫でてくれる。

抗議することもできずかといって振り払うのは惜しくて、ユーリはただただ赤いまままで固まった。

「フレイ、さすがにそれは礼儀上どうかと思うけど？」

彼の主は苦笑しながら諫めていたが、フレイは肩をすくめただけだった。

「……気にしていません。大丈夫です、シャルル様」

ユーリも慌てて言葉を添えて、改めて年上の幼なじみをしっかりと見つめた。

この人は本当に、あの頃よりずっと立派になって胸がときどきするけれど、あの頃と何一つ変わっていない。

気さくで何でも話しやすい、「兄様」のままだ。

「ユーリ様」

ほのぼのとした気分を、エルヴェが控えめにだがきっぱりと中断した。

「馬の様子を見えます。出立時の食料の手配も済ませて参りますので、ご心配なさらずお休みください」

「あ……ああ。頼む」

エルヴェはシャルル達にも一礼し、無駄のない動作で食道を横切って外へ出て行く。あっけなく閉められてしまった出入り口の扉の音で、せつかく和んでいた心が冷たく剥がれ落ちていくようだ。

エルヴェは優しいし、忠実だ。どんなときでも。
ただ、それだけだ。

胸が痛い。

「僕も支度に行ってきますね」

向かい側で、そんな声と椅子の動く音がする。

「ありがとう。馬の方はフレイに任せればいいよ。危ないからね」

「……もう何度もやっているから、大丈夫です」

従者というより手のかかる弟にでも言い聞かせるような口調のシャルルと、そんな主にも柔らかな困惑で応えているミシエール。

ミシエール・ブランの名前だけならユーリも耳にしたことはあったが、作品は見たことがないしそもそも描き手自身がこんなに夢のように綺麗な人だとは思ってもよらなかった。

ユーリが今まで美しいと思ったのは母と妹、そしてリアーナの三人だが、ミシエールの美貌は彼女達のそれとは質が違う。彼女達が美を己の糧や武器として自覚していたのに対して、彼は恐らくただ自分に備わっている一要素という認識しかしていないだろう。

男女の差違といってしまうえばそれまでだが、ユーリにはそんな姿勢は好ましく思えた。

首の後ろで銀髪を束ねる黒いリボンが、ミシエールの背中で跳ねながら遠ざかっていくのをユーリは何となく見送っていたが、ふと疑問にも思った。

今でこそ高名な画家となっているが、ミシエールはただの市井の一画家に過ぎない。

それがなぜ、シャルルの従者などをしているのだろう。

第六章 宿屋（後書き）

シャルルサイドのキャラとユーリが絡むのが楽しかったです。気づけば逆ハーですね。

第六章 過去

本当は、ミシエールはもっと画家として作品の創作に打ち込むべきなのだ。

シャルルにも痛いほどわかっている。それでも彼を手放せないのは、つまらない感傷と自分の弱さのせいだということも。

「ありがとう、もういいよ」

足を揉みほぐしてくれていたミシエールに、シャルルは声をかけた。顔を上げて、ミシエールは微笑み片付けを始める。

「こんなことまでさせて申し訳ないね。君の手は、本当はもっと別なことのための物なのに」

虚空を滑る指先を捕まえて、そっと包む。この手が奇跡のように動いて様々な世界を紙や画布の上に創り出していく様を、シャルルは何度も見てきている。

「シャルル様は、パトロンまでしてくださってるじゃないですか」

そして優しい芸術家は、こともなげにシャルルの心苦しさを打ち消してくれる。

「僕は元々身寄りが無いし、ロアーヌのように賑やかで常にいろいろなものが新しいところで暮らせるなんて、とてもいい刺激になります。それに……」

穏やかな紫に、憂いがかかる。シャルルがどきりとするのと同時に、弱い力で手が握り返された。

「あの方のお墓にも、すぐに行けますから」

変わらずに、ミシエールは笑みを浮かべていたけれど。

シャルルはたまらず、細い身体をしっかりと抱きしめた。

「シャルル様……？」

戸惑った声が耳元で聞こえたが、抱擁を解くことはせず黙って背中を撫でる。

「早く片付けて、一緒に行こうね」

きつく閉ざした瞼の裏に、面影が浮かぶ。

黒い髪に黒い瞳。フレイとよく似ているが、比べものにならないくらい虚無と孤独を背負い続けていた青年。

「彼の生まれて育ったところだ。君に見てもらえれば、喜ぶと思う」
「……はい」

温もりが包み込んでくれて、喉の奥が苦しくなった。それは痛みへと変わり目の奥へ這い上ってきて、形となって溢れ出ようとするのでシャルルは懸命に飲み込まなければならなかった。

彼を亡くして一番辛かったのは、腕の中にいるこの人のはずなのだ。

だから、自分が先に泣くわけにはいかない。

フェオドール・セイン・デ・オーランシュ。

オーランシュ領を治めていた公爵家の、最後の一人だ。二年前に病死したと公的には発表されており、統治者不在になったところをシャルルがあちこちに願い出て手に入れたのだ。

フェオドールとシャルルの母親同士は、従姉妹に当たっていた。オーランシュの血筋では他にふさわしい後継者はおらず、オーランシュ領は退位する国王にふさわしい土地でもあった。

王都から遠く、出入りする人の数も少ない。不審な動きがあればすぐに露見する。

対して労力を割くこともなく、容易に監視できるというわけだ。

そうしてシャルルはオーランシュ大公となったのだが、彼が又従兄弟の所領に固執したのはミシエールやフレイのためでもあった。

騎士としての身分はあっても、故郷を持たない年上の友人と。

——フェオドールの最後の日々を、ともに過ごしてくれたミシエール。

隣の部屋ですでに眠っているであろうミシエールのことを考えて、寝台に横たわったままシャルルは溜息をついた。

ローレンシアの辺境で静かに絵を描いていたミシエールの運命をかき乱したのは、フェオドルだった。無理矢理王都へ連れ出して、従者として仕立て上げて。それにもかかわらずミシエールは、一心に突然主となった青年に仕えていた。

再び溜息が漏れる。フェオドルの死の直後、ミシエールがどれだけ嘆いていたかをシャルルは間近で見ていたから知っている。

だから、本当は。

軽く唸って、シャルルは寝返りを打った。真っ暗な天井が、気を抜けば重くのしかかってきそうだった。

だから本当は、ミシエールを巻き込みたくなかったのだ。

——僕は、いつでも覚悟はできています。もう二年も経っているのだから、心が乱されることはありません。

そんなわけではない。まだ（・・）二年しか経っていないのだから。

——いいんです。シャルル様の願いはわかっているつもりです。だから、そのために僕を使うことを躊躇ったりすることはありません。いつでも、描けます（・・）。

ミシエールの、力。魔術に長けたクロードの小細工を見抜ける、今シャルルの手元にある最も有効な手段。

——もし君の力が必要なときは、ちゃんと『お願い』するよ。

皮肉な笑みが唇を歪める。結局自分は、何もかもをわかった上で彼に頼るしかなかったではないか。

今更綺麗事を並べて、どうなるというのだ。

がたん、と大きな音が、闇に塗りつぶされた窓を通して部屋に飛び込んでくる。

シャルルは勢いよく身体を起こし、傍らに置いた剣に手を伸ばす。
「シャルル様！」

扉越しに、くぐもったミシェールの声が聞こえる。急いでそれを開けて、シャルルは彼に頷きかけた。

「裏手の方のようだね。まずユーリ達の安否を確認しよう」

「はい」

付き従うミシェールの表情が、廊下に備え付けられたろうそくの明かりで微かに照らし出されている。

張り詰めてはいるが、臆していない。

しばしそれを見つめて、シャルルは視線を前方に戻した。

第六章 過去（後書き）

ミシエルとフェオドールの話はこちらにあります。←

<http://erusu.blog16.fc2.com/blog-category-18.html>

第七章 騒動

「で？ いちおう言い訳は聞こうか」

魔道具だけのためではない、地を這うような低い声でユーリがま
ず発言した。

外で馬の世話と準備をしていたフレイとエルヴェはまだ旅装のま
まだったが、他の者はすでに寝支度を整えていた。そんなどこち
ぐはぐさが漂うシャルルの部屋の中心で悄然とうなだれているのは、
庶民の娘が着るような簡素な麻のドレスを着たイヴェットだった。

出立までずっとおとなしく部屋にこもっていたので安心していた
のだが、まさかこんなことを企てようとは。

イヴェットの足下には、野菜か何かが入っていたらしい大きな袋
が転がっている。中に入っていたのは、彼女が一番大事にしている
ドレスと装飾品だった。水も食料も一切入っておらず、これでよく
半日ここまで保ったものだとユーリはどうとう呆れを通り越して感
心した。聞けば、たまたま通りかかった親切な農夫がここまで乗せ
てくれたのだという。

しかし、どんな理由であれついてこられて邪魔なのは間違いない。

「……話したくない」

ふてくされた妹は、やややつれた感のある顔をつんと背けた。た
った半日で、深窓の姫として大事にされてきた少女はすっかり薄汚
れて、くたびれきっている。ここまでしてなぜ、ついてこようとし
ているのだろうか。

ふっと頭をよぎった『答え』を、ユーリは意図的に無視する。

「では帰れ」

「話したって帰れっていうじゃない！」

「夜中に怒鳴るな。馬鹿かお前は？」

イヴェットは真っ赤な顔で、それ以上の続きを飲み込む。目には
涙がいっぱいたまっていたが、そんなものでユーリは絆されなかつ

た。

「ご迷惑をおかけいたしました」

妹から視線を背けて、ユーリはまずシャルル達に深く頭を下げた。
「こんな夜分にお騒がせして、申し訳ございませんでした。愚妹は明日になったら、私が責任を持って王都へ送り返します」

「と、いつでも……」

好意から部屋を貸してくれたシャルルは、依然としてくつろいだ様子で寝台の上で腕を組む。

「一人で返すわけにもいかないでしょう。馬車を用立てるにしても、信頼できる者に頼まなければ」

「……ええ」

王都からそう離れてはいないとはいっても、貴族の娘一人で出歩いて安全ということではない。第一、イヴェットは一人では馬にも乗れない典型的な箱入りだ。

そうすると、今この場にいる一行の誰かをつけるか、近隣で馬車を持つような誰かにイヴェットを任せるしかないのだが、ユーリには王都周辺の知り合いは一人もない。

両親とつきあいのある貴族や商人などはひよつとしたらいるかもしれないが、父母の交友関係など何一つ知らないユーリにはすぐに調べようもない。

となれば、残る方法は一つしかない。

ユーリは、仏頂面のまま気づかれないようさりげなくエルヴェを窺った。彼の表情はやはり微塵の隙もなく、今何を感じ、何を考えているのかさっぱりわからない。

ここにいる中で、ユーリが信頼できこんな面倒なことを頼めるような相手は彼しかない。

でも。

目をイヴェットに移す。あるいは、この妹はそれすら見越して、こうしてここまでのこのことやってきたのではないか。

ぎり、と口の中で奥歯が鳴った。

狡猾で姑息で、無邪気を装って人を踏みにじり、そしてほしいものはいともたやすく手に入れる。自分で何をしなくとも、生まれつき備わった美貌に釣られて周りが勝手に便宜を図ってくれる。

いつだって、そうだった。妹は。

何も持たない自分が必死で手に入れた宝物を、遠くから微笑むだけで奪っていく。

「わかりました。では……エルヴェ」

「はい」

忠実な青年は、ユーリに向き直り指示を待つ。イヴェットの大きな円い目が、きよときよと忙しく周囲を巡る。

ユーリは、同じ色の瞳で強く妹を睨みつけた。

「明朝は予定通り、お前はシャルル様達とともにここを出立しろ」
「え？」

「ユーリ？」

エルヴェは珍しく驚いた色を相貌に浮かべ、脇にいたフレイが問いかけるように彼女を呼ぶ。

ユーリは迷わず、フレイに顔を向けた。エルヴェのどんな表情の変化も、今は見たくなかったから。

「これは私の妹です。身内の愚かな行動の後始末は、私がつけます」
「つまり、君が妹御を王都まで送ると？」

「はい」

それならば妙な慈悲も湧かず迅速に目的を果たせるだろうし、王都で使用者達にすぐ指示を出すこともできる。諸々を終えてすぐに馬を走らせ続ければ、先行するシャルル達に追いつくにもそう時間はかからないはずだ。

「いやよ！」

イヴェットが、耳障りな金切り声を上げる。

「私、絶対帰らない！ 何回だって抜け出してやるんだから！」

「聞き分けのないことを言うな」

「だって、だって！」

とうとう、イヴェットの両目は激しく潤んだ。得意の泣き落としかと、ユーリはうんざりする。

「あ、あの……」

だが意外なことに、訪れようとした安っぽい愁嘆場は思わぬところで制止をかけられる。

「あの、ユーリ様……」

おずおずと遠慮がちに消え入りそうな声で割って入ってきたのは、ミシエール・ブランだった。

第七章 挑発

「ぼ、僕でよろしければ、イヴェット様をお送りして参ります」

唐突に彼らしからぬことを言い出したミシエールに、シャルルすら驚かされた。

「あなたが？」

当然、ユーリの反応はもっとあからさまに不信感をにじませている。ミシエールは一瞬怯んだが、撤回する気はないようだ。

「フレイ様もエルヴェ様も、護衛役の方々です。僕が一番、いなくとも困らないから……」

シャルルは身の回りの世話をしてもらっているからけっこう困るのだが、シャルルもようやく気がついた。

ミシエールの行動の意味に。

ユーリがいなければ、リアーナは探せないのだ。

「……なあ、ユーリ」

同じくそれを察知したらしいフレイが、微妙な空気の中に割って入る。

「ここで追い返しても、同じことになると思うんだ」

「……そんなことはさせません」

「いや、だって実質二回目だろう。俺達が見つけたときと併せて」
「……」

黙り込んだユーリに見えない位置で、フレイが目配せを送ってくる。同じく気づかれないよう、シャルルは小さくうなづくに留めた。

「だから、いっそ連れて行ってやればいいと思うんだよ」

「なっ、正気ですかフレイ様！」

「アントアーヌ卿！」

抗議の声を上げる姉と、とびあがらんばかりにはしゃぐ妹。

対照的な姉妹を二人とも、フレイは軽く手を上げるだけで押し留める。

「どちらにしても先を急がなきゃならないのは事実だし、またこんなことがあったら足止め喰らうだろ？ それに……もっとひどい事態も予想しないとな」

ユーリはぐつと詰まった顔になる。イヴェットの方はといえば、自分のことを言われているのににこにこどこ吹く風だ。自分に有利なように事が運んでいるので、他のことはどうでもいいのだろう。……けれど、わかりません」

それでもなお、ユーリは食い下がる。

「どうしてそこまでして、お前はついてくる？ 目的は何だ？ それを達成すれば帰るといふなら、聞いてやる」

びしびしと厳しい調子の姉に、イヴェットの笑みがすっと消えた。……お姉様には言いたくないわ。絶対馬鹿にするもの」

「お前が馬鹿だからだろう。馬鹿を馬鹿と言って何が悪い？」

「まあまあ」

またしても険悪になりそうだったところに、フレイが割って入った。

この姉妹だけで話させていては、いつまでも堂々巡りだ。シャルルは思いきって、心当たりをぶちまけてみることにする。

「ユーリ。私達がイヴェット姫と会ったとき、彼女がちょっとしたこと口にしていてね」

ユーリはまだ強ばった顔のまままで振り返り、イヴェットは表情を引きつらせる。

——当たり前だろう。この反応は。

「ほら、今砂糖が高騰していて、貴族といえど簡単に入手できないだろう？ 南の原産地近くでは状況は違うのだろうけれど」

「……そのことなら、存じておりますが」

何を言い出すのかと訝しみながらも、ユーリはただ先を促してくれる。

不意に、彼女を元気づけたくなった。

その思いが微笑みとなって溢れたのを、シャルルは自覚していな

かったけれど。

「そして、もうすぐ聖マイヨン祭だよね？」

「聖マイヨン祭……。——っ！」

ほんの少し目元を赤らめたユーリの顔つきが、瞬時に鋭く変化する。

「……イヴェット」

抑えつけた唸るような声が、シャルルですらぎくりとする響きでイヴェットを貫く。無邪気な少女は峻烈すぎる姉の怒りに、小さく悲鳴を上げて後ずさる。

「お前はそんなことのために、私達の邪魔をしたのか!!」

——あとで聞いたところによると、そのときの怒号で他の泊まり客どころか、外をたまたま通りすがった者ですら驚いて跳び上がったという。

結局怒り狂うユーリととうとう泣き出したイヴェットの言い争いは、四人の男を以てしても小一時間治めることはできなかった。

妥協案が成立した。

砂糖を必要な分だけ入手したらすぐに、イヴェットは王都へ戻る。その旨をしたためた手紙はあらかじめ、子爵の下へイヴェット直筆で書いて届けさせる。

人捜しの旅であることを考慮して、イヴェットは勝手な行動をとらないように自分を慎み、ユーリの監視の下に置かれる。

そういった条件で、ようやく姉妹は納得してくれた。というより、エルヴェの最後の一言で、イヴェットは嘘のようにすんなり聞き分けがよくなったのだ。

わかりやすい少女だ。

疲労感が倍増したシャルルは、かえって目が冴えてしまって寝台の中で何度も寝返りを打っていた。

どれくらいそうしていたかわからなくなったころ、あきらめて彼

は起き上がる。同じ部屋の寝台で、フレイは気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「やれやれ……」

呟いて、シャルルは寝台から降りた。上着を羽織り、そのまま宿から外へ出る。

空には中途半端な月がかかり、姉妹喧嘩に驚いて集まってきていた野次馬もすでにいない。実に平和でいい夜だった。

「シャルル様？」

湿って重い空気を割って歩いていると、呼び止められる。揺れるカンテラの明かりを連れてやってきたのは、ユーリの従者だった。

そういえば、フレイとミシエール、そして彼とで交代で夜間の見張りをしていたのだと思い出す。

「やあ」

「何かございましたか？」

生真面目な青年は、開口一番で尋ねてくる。苦笑して首を振り、シャルルは改めてこの青年を観察した。

背も高く、たいそう目元の涼しげな面差しだった。何かあればまず主を立て、守り仕えていることから誠実な人柄であることも窺える。

しかし。

「ユーリには、どのくらい仕えているんだい？」

本来なら、こんな詮索めいたことはシャルルの好みではない。訊かずにいられなかったのは、脳裏にちらつく光景があったからだ。

イヴェットを見るエルヴェから、思い詰めた顔で目を背けるユーリの姿。

「もう五年になります。師事していた頃を入れればもっと長いです」
「君もユーリの塾の出身なのだね」

青年の鉄面皮が、カンテラの灯の中で幾分柔らかくなる。

「ユーリ様が見いだしてくださらなかったら、今の私はありません。大切な主であり、恩人なのです」

「そう」

シャルルがつい口を滑らせたのは、やはり腹立たしかったからだ。「その恩人に対して、ずいぶんひどい仕打ちだね」

普段の彼なら、こんな直接的な言い方はしなかったろう。

知り合って間もない相手に、こんなに深入りすることも。

「申し訳ございませんが……愚輩にて、仰る意味がわかりません」

「わからない？　だったら教えてあげる必要もないわけだ」

踵を返し、シャルルは苛立ちを足下の草にぶつけ、蹴り上げる。

「君がそうして泰然としていることが彼女達のどちらに対しても残酷なのだと、まさか気づいてすらいなかったとはね」

エルヴェは、何も言い返さなかった。

シャルルも何を聞く気にもならず、さっさと宿の扉の中へ飛び込んだ。

第八章 髪

気が重い。

朝起きて、隣の寝台で眠る妹を見てまずユーリが思ったのは、その一言だった。

溜息をついて、ユーリは無造作に身支度を調える。男物の服は支度が楽だ。コルセットも必要ないし、ドレスより遙かに短い時間で必要なものを身につけられる。時々やむを得ずドレスを着るとき、なんて手間がかかって効率が悪いのだろうとユーリはその都度感じるのだ。

髪を梳かし、チョーカーをつける。やや歪んでいるように見える古い鏡は、なるべく見ないようにする。どうせいつ見ても、自分の顔はこのままだ。

そうして用意をすべて調べてから、ユーリはもう一度嘆息した。ここからの『作業』が一番手がかかる。

「イヴェット」

寝台の上の、未だに身動きすらせずだらしなく伸びた塊に声をかける。塊はもぞもぞと動いたが、期待していた覚醒をする様子はない。

「……起きろ」

ユーリは容赦なく、寝台を蹴り飛ばした。

「っ！ 何するのよ！」

「さっさとしないと置いていく。ついてきたいなら起きて服を着ろ」抗議する妹に一方的に言いつけて、ユーリは服を放ってやる。昨日、この宿の女将に無理を言って譲ってもらった古着だ。大きさが合わないのはとりあえず我慢して、次の街に着いたらちよいどいいのを買ってやることになっている。

「……一人で着るの？」

先ほどまでの剣幕はどこへやら、むくれてはいるもののイヴェッ

トは不安そうに古びた麻のドレスを見ている。

「昨日私が着てきたのじゃ駄目？」

「あれでも立派すぎるくらいだ。おかしな輩に絡まれたくなければ我慢しろ」

――でなければ、帰れ。

言外にそう告げてやると、イヴェットは渋々寝台から降り、寝間着を脱ぎ始めた。それを尻目にユーリは部屋の片付けと荷物の確認にかかったが、途端にふらりと意識が揺れた。

何だろう、そういえば少し熱っぽいようだ。

身体は鍛えていたつもりだが、風邪でも引いたのだろうか。

いや、風邪ならばまだいいのだが、いやな可能性がもう一つある。不快な気持ち腹にわだかまり、ユーリは奥歯を食いしばった。

「……できたわ」

ぶつきらばうな妹の声で、ユーリは顔を上げる。

「下へ行こう。他の方を待たせては悪い」

心なしか重い身体に舌打ちしながら、さっさと部屋を出る。階下の食堂では、すでにシャルル達四人が待っていた。

「おはよう」

「遅くなりまして申し訳ございません。おはようございます」

会釈するユーリの隣で、イヴェットは質素なドレスながらも貴婦人の礼をとる。

「昨夜は失礼をいたしました。お許しくださいませ」

とろりと甘い声音と、小首をかしげる仕草。

苛立ちの発作が沸き上がるが、シャルルは鷹揚に微笑んだだけだった。

「すんだことは仕方がないよ、さあ席について」

彼の言葉を合図のように、エルヴェが椅子を二つ引く。当然のようにイヴェットはそこに座り、にっこりと背後のエルヴェに笑みを見せる。

母がいつも言っていて、自身でもしているのと同じ仕草だ。

無邪氣に無防備に、そして明るく。時折無謀なことをして見せよ。普段の貴婦人然とした仕草とそれとは裏腹の無鉄砲な行動の差に、殿方というものは心奪われるのだからと。その裏に意中の男への好意があるのならなおさらだと。

——虫酸が走る。

運ばれてきた皿にさっさと手をつけ始めたユーリだが、食事周りの様子はますます彼女の不快感を増幅させた。

「イヴェット、塩はこちらに」

「ありがとうございます。殿下……あ、いけない」

「ええ、どうぞ名前でお呼びください」

「はい、シャルル様」

受け取った塩を使い終えたイヴェットは、それを戻そうとして手をコップにぶつけてしまふ。零れはしなかったが、ほんの少しテーブルの上が濡れる。

「大丈夫か？」

「ええ、申し訳ありません。今ハンカチを……」

「いいって、これ使えば」

フレイは自分の持っていた布で、さっさと水滴をぬぐう。彼の表情と眼差しに、ユーリは気持ちちが沈んだ。

手にかかる本当の妹を見るような、優しい目。かつて彼は、こんな風に自分のことを見てくれていた。

あの頃の自分よりずっと、イヴェットは見目が良いけれど。

「ユーリ様？」

知らずに匙を止めていたユーリを、密やかに呼ぶ声がある。

「お加減でもお悪いのですか？」

濡れたように美しい、紫色。

大公の従者を務めているだけあって、ミシエールはたいそう細やかに気が回るようだ。

心遣いが嬉しくて、ユーリは少しだけ表情を和らげる。

「大丈夫です。今日の移動に支障が出ることはありませんから」

「いえ、そうではなくて……」

ミシエールはふるふると首を振り、忙しく視線をさまよわせている。言葉を探しているらしい。

小動物めいた愛らしさに、ユーリはつい目を細めた。

「ええと……ご気分がお悪かったら、すぐに仰ってくださいね」

「ええ、ありがとう」

おかげでほんの僅かだが、気持ちが紛れた。

妹を取り囲む青年達を見ないように、ユーリはほとんど出がらしのお茶を一口飲んだ。

水と食料を用意し、あらかじめ決めていた街道を一行は進んだ。

イヴェットは、ユーリの馬の前に乗ることになった。しかしもとも二人で乗るのが得意でない上、イヴェットがしょっちゅう身体を動かしてもぞもぞするので、次第にユーリの苛立ちは募る。

「イヴェット、動くな」

「だって、揺れるから痛いよ」

確かに、乗馬に慣れていなければ腿の内側や尻が痛くなる。ユーリも初めのうちはずいぶん擦り傷を作って苦しんだものだ。

だから、連れてきたくなかったのに。

「イヴェット様」

横に馬影が並び、はっとする。エルヴェが隣に馬を寄せている。

「大丈夫ですか？」

「ええ。平気よ。がんばれるわ」

ユーリの位置からは見えないが、イヴェットが今どれほど嬉しそうな顔をしているかが手に取るようにわかった。

手綱を握る手に、力がこもる。馬がそれを敏感に感じ取って、歩調が乱れる。

「ユーリ様、そろそろ休みましょう。道の様子も見なければ」

「……」

エルヴェを見ないまま、ユーリはうなづく。手綱を引くと、感じていた振動が少しずつ弱くなる。

エルヴェはそれを確かめて、前に行くシャルル達にも連絡に行った。

彼と二言三言話していたシャルルが、振り返る。その視線すら痛くて、わざと気づかないふりをする。

こんなことで煩っている場合では、ないのに。

「ユーリ様！」

突然、強い口調で誰かがユーリを呼ぶ。

途切れた煩悶の隙間から、ユーリは正しくそれを見つけ出した。

「待ってください！」

一度並足にした馬を、短い距離だけ駆けさせる。忠実な愛馬はよく命令を聞き、ユーリが目指した木の枝の真下をうまく走り抜けてくれた。

「どうしました？」

シャルルが馬を寄せてくる。彼の前に、ユーリは手にしたものを差し出した。

「これは……」

「見覚えがあります。勘違いかもしれませんが」

長い一房の髪。栗色の。

明らかに、偶然枝に引っかかって抜けたものではなかった。人差し指ほどの太さがあり、リボンで纏められているのだから。

それに。

「どうやら、魔術が施されているね」

髪に触れたシャルルが呟く。ユーリにも、微かながら超常の力の残り香を感じ取れていた。

「調べてみよう。フレイ、次の街まで半刻ほどだね」

「ああ」

フレイが答え、彼の前で鞍に掴まっていたミシエールも、張り詰めた表情で唇を弾き結んでいる。心なしに顔色が悪いようだ。そう

いえば、ユーリの名を叫んだのはミシェールの声だったような気がする。彼が注意してくれなければ、気づかなかっただろう。

ユーリは、手にした髪を握りしめる。

この髪色。そして、魔術。

明らかに意図的に残していったものだ。

「リアーヌ……」

美しい長い髪を、とても大切にしていた娘。

また、目眩がした。

目が熱を持ち、ひりひりと乾く。

全身にのしかかる怠さを、ユーリは溜息で紛らわせた。

第八章 まるで、陳腐な物語のような

やはり、魔術での小細工が施してある。

シャルルは自衛のためにと、戦いの心得の他に魔術での身の守り方も学んできてはいたが、リアーヌのものとおぼしき髪の毛にかけられている術は、どうやら彼では解くことはできないようだった。かけたのは、クロードだろう。

魔術も物的な力と同じで、備わった魔力の大小でできることが制限される。術を解いたり防いだりするためには、相手の魔力よりも大きな力が必要となるのだ。

「まあ、仕方がないか」

血筋から考えれば、クロードとシャルルの魔力はほぼ同程度だ。

ほとんど差がないのであればあとは知識で補い対抗することもできるのだが、残念ながらシャルルにはそれも不可能だ。

となればユーリとイヴェット、フレイが頼みの綱だ。もしも彼らでも無理ならば――。

「シャルル様、お水をどうぞ」

水筒を手に、イヴェットが傍らに立っていた。髪の毛を大事に懷にしまい、シャルルは幼い姫君に微笑みかける。

「ありがとう、君はいいの？」

「先ほど頂戴しました。ご心配いただき恐縮ですわ」

水筒を抱えたまま、イヴェットはシャルルの隣に座る。

そろそろ日が高くなる時分だった。木陰にいるシャルルでも、日なたのうだるような熱気が陽炎となって見えてしまいうんざりする。今日は暑くなりそうだ。

しかし、収穫は確か（・・）に（・・）あった。クロードの『隠行』を辿る行程だが、身を隠しながらあちこちを迂回しつつ進む彼らよりも、自分達は余計な寄り道をしなくてすむ分速く進むことができる。

うまくすれば、計算通り（・・・）に追いつけるはずだ。

「シャルル様……」

考え事をするシャルルを、イヴェットが静かに呼ばわった。

「ごめんなさい、わがままを言ってしまった」

今更言わずもがなのことを、この娘は実に殊勝な顔つきで口にする。

そう思うのなら、初めからしなければいいのではないだろうか。

「そこまでして、砂糖がほしいの？」

「ええ」

きっぱりと、イヴェットは答える。

理由が恋ならば、何をしてもいいという法則でもあるのだろうか。他人のこととはいえ、いったいこの少女のどこに惚れたのかと、エルヴェの好みを疑いたくなったシャルルである。

感情ばかりで突き進むイヴェットより、状況をよく判断して最適な行動をとる姉姫の方がどれほど得がたい存在だろう。

「あ、エルヴェ」

つらつら考えていたら、本当にエルヴェがこちらへやってくる。

イヴェットを探していたのだろうか。

シャルルが彼女と一緒にいるとみると、いつもすましかえっている青年の無表情に、ほんの少し亀裂が入ったようだった。それで僅かに溜飲を下げたシャルルは、完璧な社交辞令の笑みで彼を迎えることができた。

「イヴェット様、そろそろ出発のお支度を。シャルル様も、フレイ殿が探していらっしゃいました」

「そう、ではね」

立ち上がって歩き出した彼の耳に、甘ったるい少女の声が纏わりつく。

「ねえエルヴェ、今度はあなたの馬に乗りたいわ。お姉様ったら乱暴なんですもの」

「いけません。未婚の姫君が、みだりに男に近づいたりなさっては」

「大丈夫よ。だって、今の私達は貴族ってことを隠しているでしよ
う？」

「そういう問題ではございません」

諫めるエルヴェの声音も、ユーリに対するのとはずいぶん違う。

「……趣味の悪い」

二人に聞こえないところで、シャルルは吐き捨てた。

ただ話をするだけであんな調子ならば、もっと前に思い切ればよ
かったのだ。

そうすれば――。

そこでシャルルは、ひたりと足を止める。

地図を見ながらフレイとなにやら話し込んでいる、ユーリの姿を
認めたから。

日よけもせずに白い肌を惜しげもなく太陽に晒して、ユーリは熱
心に地図を辿っている。緑の瞳は真剣そのもので、強い意志を感じ
させる。

けれどきつとそれは、目的以外のものを見たくないからだろうと
もシャルルには思えるのだ。

しばらく彼女達の様子を窺って、シャルルは静かにその場をあと
にする。

今は一日のうちで一番暑くなる時間帯で、他の旅人達は各々適当
な休憩場所に引っ込んで陽光の驚異をやり過ごしているのだろう。
宿場の多く集まるこの場所の井戸周りには、シャルル達以外の人影
はほとんど見られない。

だから、目当ての人物はすぐに見つかった。膝に髪を置いて一心
不乱に木炭を持つ手を動かしているミシエールに、シャルルは静か
に近づいた。

「ミシエール」

「あ、シャルル様」

素描の手を止めて、ミシエールは彼を振り仰ぐ。心なしか疲労の
見える美貌にそっと手を宛がって、シャルルは心配そうに紫の双眸

を覗き込んだ。

「大丈夫かい？ 無理はしないようにね」

「平気です。それより、気になることが」

言葉とは裏腹に気怠げな様子で、ミシエールは紙の上に視線を戻す。

「何者かが、僕達をつけてきているようなんです」

シャルルの目が、すっと細められる。

「フレイは何て？」

「ただの追いはぎとか、そういう人達かもしれないからしばらく気づかないふりをしておけと。エルヴェ様もこのことは知っています」
「そうか」

子爵家の姉妹にも、教えておくべきだろうか。

少し考え、イヴェットには伏せておいた方がよからうとシャルルは結論を出す。あの娘には、あえて無視して泳がせるなどという器用なまねはできそうにない。

ユーリならばそこその自衛はできるのだから、いざというときでも大丈夫だろう。

「姫様達は、僕が」

シャルルの考えを聴く察して、ミシエールは彼の手に触れてくる。気遣うように。

「シャルル様は大切な方です。どうか、常に安全なところにいるようになさってください」

胸が痛む。その言葉に。

唇を引き結ぶミシエールを、シャルルは軽く抱きしめてやる。

「心配してくれてありがとう。でも、信じているから大丈夫だよ」

とんとん、と背中を軽く叩いてやれば、震える溜息が耳元で聞こえた。

「君達は必ず、私を守ってくれる。いつだってそう信じているからね」

「……はい」

あやすようにしばらくそうしていると、ようやくミシエールの心配は収まったようだった。恥ずかしげにはにかむ表情を堪能し、シヤルルはふと赤い髪 of 少女に思いを馳せる。

彼女は本当の意味で、信頼できる者を得ているのだろうか。

第九章 痛み

「わかったよ、ユーリ」

髪の毛を手には、シャルルがミシエールを伴い宿のユーリの部屋を訪れたのは、夕食がすんでしばらく経ってからのことだった。

今日の街は比較的大きく、金に糸目さえつけなければ泊まれるよい宿もあったので、イヴェットがうるさく騒ぐこともなく平和な夜だった。

「わかった、とは？」

あらかじめ約束がしてあったので、ユーリは旅装も解かずチョーカーもつけたまま彼らを迎えた。

シャルルはしっかりと扉を閉めると、髪の毛をテーブルの上に置く。その表情が何か奥歯に物が挟まったようだったので、ユーリは訝しく思った。

「この髪にかけられていた術だよ。クロードは、魔力はそれほどではなくても技術的にはなかなかのものだったようだ」

苦笑混じりに、シャルルは肩をすくめる。

「どのような魔術が？」

「君への伝言が託されていた。術の解説に当たって少し聞いてしまったけれど、やむを得なかったと思って許してもらえるとありがたい」

ユーリはうなずいて、髪の毛を手を取った。

あのかきは咄嗟に手にとって、リアーナのものと同じ色だったのもあり彼女の髪だと断言してしまったけれど、冷静になってみればごくありふれた髪色だ。曰くありげに束ねられ、魔術まで施されているとはいっても、よくよく手にとって観察してみなければわからない。ユーリ自身、ミシエールが注意してくれていなければ見逃していたことだろう。

それにしても、わざとリアーナが残していったにせよ、何のため

にこんなことをしたのかわからない。

「おかしいな細工がしてあったのを解除したから、魔力を流し込んでやればいいよ」

「……はい」

促されて、ユーリは栗色の一房に意識を集中した。あまり魔術は得意ではないけれど、シャルルの言うとおりの力を流し込むやいなや、意味のある言葉の連なりが掌から伝わってきた。

『ユーリ様』

リアーナの、声となって。

覚えているよりもつややかで、大人びているように思える。彼女自身の言葉を、この髪は封じていたのだ。

『このような形で信頼を裏切ることになり、慚愧の念でいっぱいです。けれど、私は自分を抑えることができませんでした』

声は真摯な調子で、ユーリには言い訳としか思えないことを述べていく。

『私は南へ参ります。あの地ならば、きっと何かが見つかるはずですよ。甘くて優しい夢を、探して参ります』

握り込んだ指の、伸び始めた爪が掌を抉る。拳がぶるぶると震えた。

『そしていつの日か、きっと帰ろうと思います。私の大切な故郷に、十分に育った奇跡を連れて。今は私一人で生み育てなければならぬけれど、きっとそれが故郷の地を甘く潤してくれることを、信じています』

うつむいて、拳を睨みつけたままユーリはじっと聞いていた。声はそれきり途絶えて、部屋の中に重苦しい沈黙がわだかまる。

何が何だかわからない。しかも、今のリアーナの言葉は、まるで

「まさか……クロードは」

シャルルが、唸るように呟く。

下腹の辺りがじくじくと蠢き、血の気がどんどん引いていく。

「駆け落ちした理由は……」

考えたくない。信じたくない。

でも、今聞いた事実から推測できるのは。

「……リアーナという女性は、身ごもっているのだろうか」

ユーリは、自分の頭から音を立てて血が落ちるのを聞いたと思った。

ぐらぐらと目に見える世界が揺らいでいる。気持ちが悪い。身体の平衡を保ってられない。

下腹が、痛い。

「見つければ子供は捨てられるか、それとも――」

シャルルは言葉を濁したが、ユーリにもわかつている。身分違いの過ちの果てに誕生した命は、この世に現れた瞬間に孤児とされるか、もっとひどいときは。

――殺される。

それを恐れて、リアーナは逃げたのだ。

「何てこと……!」

体中が熱い。気持ちの悪い汗が、背中や腕や至る所から噴き出てくる。

頭が、ずきずきする。

「なんでそんな、馬鹿なことを!」

男に狂って駆け落ちを執行する時点でも愚かなのに、子供などできれはどうなるか、わかりきっていて何の手段も講じなかったというのか。

吐き気がする。目の前が真っ暗だ。

「ユーリ？」

驚いた様子のシャルルの声すら、遠い。

恋のために盲目となった女とは、こんなにも愚かで軽はずみで、救いようのない存在なのだろうか。

——自分も、そうなのだろうか。

どんなに嫌悪しても上辺だけ取り繕っても、女という生き物の業からは逃れられないのだろうか。

身体の内側から下腹を殴られたような痛みが、ユーリの最後の気力すら打ち砕く。

「ユーリ！」

床にうずくまり、血相を変えたシャルルに応えることもできずに、ユーリはきつく目を閉じる。

自分はやはり、女なのだ。

それなのに女としての価値を持たない、出来損ないなのだ。
この痛みは常に、ユーリを襲うたびに嘲笑うのだ。

第九章 険悪

ユーリの介抱を頼んだ宿の女将が、エプロンで手を拭きながら戻ってきた。まだ誰もいない食堂に集まっていたシャルル達は、一斉に彼女に視線を集中させ、無言で問いかける。

「可哀想に、いつも重いみたいだね」

溜息混じりの女将の言葉は主にイヴェットに向けられていたが、少女は困ったようにシャルル達を振り返る。どう答えたものか、さすがにシャルルも迷った。

「まあ聞いてみたところ、最初の二日間くらいがひどくて、あとは動けるようになるそうだよ。あんた達、男だからいまいちぴんと来ないかもしれないけど、苦しいのは間違いないんだからいたわっておあげ」

「ご親切痛み入ります」

そつなく女将に頭を下げたのは、エルヴェだった。

「どうぞ、ユーリ様をお願いいたします」

「わかったよ。あんた達の食事もうすぐできるから、部屋でゆっくりしているといいよ」

親切な女は、ふくよかな身体を揺すって台所へ戻っていった。

「女は大変だよなあ」

まず第一声を発したのは、フレイ。その方面に疎いミシエールは、可哀想なくらい真っ赤になってしまう。

「ま、仕方ないから補給でもして準備だけ済ませておこうぜ。結構距離は縮まってるんだろ？」

「は、はい」

宥めるようにミシエールの銀髪をかき回しながら、フレイは言う。ミシエールはおろおろとされるがままになっていたが、質問にはしっかりとうなずいた。

「なぜですか？」

和みかけた空気を、鋭く切り裂いたのは。

背筋を伸ばし真っ直ぐ青い目でシャルル達を見据えている、エルヴェだった。

「なぜ、そんなことがわかるのですか？」

シャルルは、心の中だけで舌打ちする。しかも悪いことに、ごまかすより先にフレイが動揺を顔に出してしまった。

そしてエルヴェは、それを見逃すような青年ではない。

「あの髪を見つけたのも、ずいぶんできすぎていると思いました。気づいたのは確か、あなたでしたね？」

話を振られて、ミシエールがぎくりと震える。

「ただでさえ栗色で、紛れやすい色彩です。なのに枝の影に隠れていたほんの一房を、とても正確に見つけ出した。ずいぶん目がよいんですね？」

「……」

イヴェットが不安そうにしているのに、エルヴェは糾弾をやめない。

「そもそも、初めからおかしいと思っていた。なぜあなたほどの方が、わざわざご自身で出向かれる必要があるのです？ 大切な問題には違いないが、部下に任せられないほどのこととは思われない」シャルルは目を細める。

今はまだ、反論しない方がいい。

「何を企んでいらっしゃるのです？」

小細工一切なしで、エルヴェは切り込んでくる。

「あの方を何かに巻き込もうというのなら、私は容赦はしません」意志の強い眼差し。

彼の言葉は、心底からのものには違いないだろう。

「そこまで思うのなら、どうして君は止めなかったんだい？」

わざと挑発するように言ってしまったのは、やはり腹立たしさをごまかせなかったからだ。

「ユーリ様のご意志だからです」

そしてこの青年は、自分の言葉の愚かしさにまったく気づかないそぶり、堂々と言い放つ。

「あの方の望みのままに在ることが、私の役目です」

――役目。

身を乗り出しそうになった自分を、シャルルは辛うじて抑え込む。たったそれだけの言葉で、たったそれだけの理由で、エルヴェは今まで彼女のそばに居続けたのか。

彼女を、傷つけて。

「エルヴェ、やめて」

幾分青ざめて震えているイヴェットが諫めなかったら、シャルルは次に何を口走っていたか自分でもわからない。

「申し訳ございません、シャルル様。お許しください。エルヴェは……姉を大切に思っていて……それで」

最後の一言をとてもしげに言葉にしたイヴェットは、つぶらな緑の目に怯えを浮かべていた。

彼女の恐れは、見当がつく。

オーランシュ大公からの、愛しい男への罰則だ。

溜息をついて、シャルルは立ち上がる。

「もういいよ。イヴェット、姉上についてあげるといい。君しか頼めない」

そのまま出入り口へ向かい、外へ出る。外はもう真っ暗で、酒場らしき辺りからの微かな喧噪と明かりだけが闇に抗っているばかりだ。

「一人で出歩くなよ」

ぽん、と頭を軽く叩かれる。追ってきてくれた友人をやや見上げる体勢で、シャルルは笑った。

「何か飲むなら奢るよ」

「いいよ。うっかり使い物にならなくなったら困る」

「それもそうか」

どちらともなく歩き出して、しかし宿からは離れることなく道の

端で止まる。ちょうど宿の建物全体を見渡せるところで、シャルルは二階の辺りに目を凝らした。

そろそろ眠っている客もいる時刻だ。ユーリの部屋はこちらの並びだったはずだが、暗い窓の中で今彼女が何を思い、どうしているのかまでは窺えない。

「なあ、シャルル」

口を開いたのは、フレイが先だった。

「ユーリを引き取ることはできねえのか？」

「引き取るって？」

目を丸くするシャルルを、フレイは思案げな面持ちで振り返る。

「なんか、ほっとけなくてさ。この騒ぎが終わったら、あいつはまたジーヌ領へ引っ込んで、今までの暮らしに戻るんだろう。……あのすかした野郎も一緒に」

思い切り顔をしかめたフレイに、ついシャルルは苦笑する。

「役目だそうだからね。なかなか頭の固い性格のようだ」

「まったくだな」

しかし、その可能性を考えるとユーリが気の毒になった。

親に疎まれ常に妹と比べられて貶められて、そんな境遇を嘆くよりも先に、彼女は努力してきたのだろう。そうして築き上げた功績は間違いない彼女自身のものであり、誇ってしかるべき価値だ。

でも。それでも。

「彼女さえ望むなら、秘書として来てくれたら嬉しいのだけどね」
するりと、そんな言葉が飛び出す。

フレイも目を丸くしていたが、シャルル本人のほうがずっと驚きは大きかった。

知り合って間もない少女を。

よく考えてみれば、互いのことを話したことすらない相手を。

どうして、ここまで気にかけているのか。

ここが暗がりでもよかったと、心底思った。耳朵が熱い。何を言っているかわからない。

「そういえば、ミシエールだけ残ってきて大丈夫だったか？」

そうして、フレイが実は気遣いのできる性格であることにも、シヤルルは感謝した。

「そうだね……エルヴェにいじめられてないかな」

イヴェットと一緒に居合わせてくれたら、大事はないだろうけれど。

「戻ろうか」

「ああ」

頷きあって、一步を踏み出そうとしたときに。

少女の悲鳴が、甲高く夜闇を引き裂いて響き渡った。

第九章 険悪（後書き）

たった！ たった！ フラグが立った！

実は生理痛がひどくて、あまり腹が立ったので小説に取り込んでみたのです。

第十章 襲撃

痛い。

腹の中から食い破られているようだ。

身体が燃えているのかと思うほど熱いのに、寒気がして毛布から出られない。

歯を食いしばってそれらに耐えながら、ユーリは朦朧とする意識の中をふわふわ漂っていた。

いつもこうなのだ。

この身体は、いつも何十日かの周期でおかしくなる。

健康的な女の証だと、いつか診てもらった医者は言っていたけれど、それはユーリにとって屈辱でしかない事実だ。

こんな自分が、女という生き物として及第だと保証されたとして何になるだろう。

「う……っ！」

また鈍痛が襲ってきて、ユーリは歯を食いしぼる。足の間からだらだらと何かが流れる感触があつて、ぞっとした。

汚い。

いつの間にか身体の中で蓄えられていた、穢らわしいものが溢れ出ている。

忌まわしくて忌まわしくて、ユーリは枕に顔を埋めた。

健康な女としての価値など、いらない。

こんなにも汚らしい存在なのだ何度も思い知らされるくらいなら、女でなくなればいい。

そもそも自分など、誰も女としての価値を見出してくれないのだから。

美しくもなく、愛らしくもなく、そのために嘲笑される自分など。痛い。

涙が、こみ上げる。

さらに枕に顔を押しつけ、息苦しさも耐えて嗚咽を噛み殺す。
どのくらいの間、そうしていただろうか。

突然意識が晴れて、ユーリはそろそろと寝返りを打った。部屋はすでに真っ暗で、夜の深さがどれほどのものなのかはわからない。
まだ下腹はひどくずきずき痛んだが、横になっていたためか少しよくなったようだ。

溜息をついて、ユーリは目を閉じる。

迷惑をかけてしまった。

シャルル達だって、先を急ぎたいのだろうに。楽になったらすぐに謝って、出発しなければ。

「痛……っ」

油断していると、また痛みが襲ってくる。横向きになり身体を丸め、かすれた自分の声にさらに眉根を寄せる。

女の声だ。今は魔道具を外しているから。

イヴェットのように高く柔らかい甘いものではなく、低くてくぐもって抑揚にも乏しい自分の声。母はよく、無理にでも高い声を作ってみると叱り飛ばしてきたものだ。

けれどそうしたら、今度はそちらにばかり意識が傾いてしまい、表情がぎこちなくなる。ただでさえにこやかな方ではないのに顔がさらに強ばって、結局逆効果だった。

あのとき一緒に午後のお茶の席にいた、若い貴公子の失笑は今でも忘れない。

同時に、そうして自分を取り繕ってまで、『よい女』を演じることに意味があるのかと疑問に思ってしまった。一度生じた気持ちはしこりとなり、ユーリは答えを探すことを選んでしまった。

そのためには、女である自分を意識したくなかったのだ。

髪を切り、男の服を着て、声も変えて。

初めてそんな自分を見たとき、奇跡かと思った。

間違いなく自分のはずなのに、自分ではない。

鏡の中にいたのは醜い少女ではなく、やや自信なさげに虚像を見

つめるただの少年だった。

顔立ちはもちろん美貌とは言えないが、醜くもない。気弱そうで、寂しげなだけだった。

魔道具のもたらす男としての声は、もっとユーリを幸福にしてくれる。

愛らしさも何も必要としない、必要とされない自分の声。だから心に浮かんだことを、何の屈託もなく伝えることができる。

ユーリは追想から抜け出して、重い腕を伸ばし枕元を探った。チヨーカーの感触は、寝台の横にある粗末なテーブルの上で見つかった。

そのことに安堵して、ぐったりと手が落ちる。痛みと熱で蝕まれて、些細な動作でもひどい疲労感があった。

エルヴェはどうしているだろう。

忠実な従者のことを思うと、胸が痛んだ。

彼はユーリがこんな状態になるとき、そばへは来ない。それを望んだのはユーリだから。

彼に、こんな自分を見られたくなかったから。

空虚な想いがのしかかってきて、腹の痛みとともに心を襲う。

エルヴェには、女としての自分を見てほしくない。どうしたって見劣りする自分は、きっと幻滅されてしまうから。

だから、エルヴェは、妹を。

再び目の底からこみ上げるものを飲み下そうとして、脳裏に浮かんだのはまったく違う人の姿だった。

榛色の瞳。

出会ってからずっと、優しい色を陰らせることがなかった。

あの人は、女のなりをした自分を見るときでも、決して変わらなかった。

フレイから先に、ユーリの話聞いていたためでもあったかもしれない。

それでも。

——嬉しかった。

痛みの合間のまどろみに、ユーリは再び落ちようとしていく。
しかし。

甲高く夜を貫く少女の悲鳴が、安らかな小休止を打ち破った。

「何……？」

起き上がろうとしたが、うまく力が入らない。

鈍った頭が一拍遅れて動き出し、今聞こえたものの意味を教えてください。

悲鳴。

あの声は、聞き覚えがある。

「イヴェット……？」

そうだ。間違いなく、妹の声だった。

しかもあの様子では、ただ転んだとかではなさそうだ。

いやな感覚が、今度は心臓の辺りから沸き上がる。何があったのだろう。いったい何が。

エルヴェは。

シャルル達は。

「いやあつ！ エルヴェ！ エルヴェ！」

混乱に追い打ちをかけるように、イヴェットがエルヴェの名前を叫ぶ。

先ほどまでとは違う意味で、ひどい寒気が襲ってくる。

エルヴェに何があったのだろう。大きな物音、知らない人の怒鳴り声、断続的に上がる妹の泣き声。

何が。

誰が。

——どうして。

爆発のような音が間近で起こり、ユーリはびくりと寝台の上で飛び上がる。

ほの明るい蝋燭の光が、部屋の中まで入ってこられずにもがいている。揺らめく火の動きにつられてゆらゆらと蠢くのが人間の影で

あると、ユーリが気づくより先にそれは動いた。

「こいつか」

くぐもった声。布か何かで口元を覆っているらしい。

ユーリが声を出すことを恐れたのか、男は即座に動いた。

悲鳴など、喉で凍り付いてしまっているというのに。

「声を立てるな。傷はつけない」

ユーリの首に手をかけて、闖入者は低く囁く。

どうせ自分の顔は見えないのだろうと思っても、怯えた表情などしたくなくて、ユーリは必死で相手を睨みあげる。

「この件から手を引け」

短く、鋭く。

男の声が不明瞭に要求する。

「おとなしく王都へ戻れば、あの二人にも危害は加えない。意味はわかるな？」

あの、二人。

さっきから、いったいこの男は何を言わんとしているのだろう。誰のことを。

「いいな、おとなしく北へ戻れ」

喉にかかる手が、苛立ちのためか力を増す。

全身を蝕む気だるさと痛みも忘れて、ユーリは声を上げそうになる。

「ミシエール！」

外から飛び込んできた、声は。

焦りをにじませ、ひどく緊迫した響きで。

「うわあっ！」

驚愕の悲鳴は、まさにユーリを脅しつけていた相手のものだった。

「ユーリ！ 大丈夫か！」

どやどやと、数人の気配が転がり込んでくる。

燭台を手にした幼なじみと、蝋燭の火で幻想的なまでに美しいミシエールの横顔と。

「怪我はありませんか？ 来るのが遅れて申し訳ない」
半ばユーリを抱き込むようにして、覗き込んでくる優しい眼差し。
榛色の。

果たして、せめて頷きかけることができたかどうか。
ユーリの意識は、そこで暗闇に落ちた。

第十章 襲撃（後書き）

生理痛はいやですね。

第十章 秘密（1）

だんだん血の気が戻ってきたユーリの寝顔を確認して、シャルルはほっと安堵の溜息をついた。

「僕にはこのくらいで精一杯です……」

ユーリに覆い被さるようにしていたミシエールが、申し訳なさそうに振り返る。大技を続けて使ったためか、抑えたランプの明かりの中でもそうとわかるほどやつれている。

「ありがとう。ミシエール」

シャルルは、心から労いの言葉をかけた。

「さあ、我々は出よう」

イヴェットだけを残し、シャルルは他の者を促してユーリの部屋を出る。廊下には一階からの喧噪がわだかまっているが、少し落ち着きを取り戻したようだ。

「説明していただけますか？」

シャルルの部屋に入るなり、切り出したのはエルヴェだった。

当然来るものと予想していた問いかけだったが、シャルルは思わず隣を窺った。

張り詰めた表情の、ミシエールを。

「先ほど、あの侵入者を拘束したのは、見間違いでなければあなただった。ミシエール殿」

ミシエールが、ぎゅつと拳を握る。咄嗟のこととはいえ、自分の行動の軽率さをシャルルは後悔する。

ユーリの部屋に飛び込んで、真っ先に目に入ってきた光景。

少女の首を絞める、男。苦しげなユーリ。

確かに、彼女は自分を見たか、思ったのだ。

助けを求めて。

「シャルル様が叫んだ直後にミシエール殿、あなたは大きく手を振り下ろしましたね。その瞬間に、あの男は立っていた位置から大き

く吹き飛んだ。誰も手を触れるどころか、あの男のそばにすらいなかったのに」

ぽきぽきと小枝を折るような調子で、エルヴェはあのときの状況を言葉で再現していく。やたらと細かい指摘が多いのは、不審の表れか。

「そんな馬鹿げた現象を、幸いというべきか私は見たことがあります」

「ああ、もういいよ」

陰湿な物言いにうんざりして、シャルルは手を上げて続きを遮った。

「話してあげるよ。他言無用の条件付きでね」

「わかりました」

腕を組んで、エルヴェは壁に背を預ける。シャルルは、もう一度ミシエールに視線を転じた。

彼は、緊張してはいたが怯えてはいなかった。それどころか、励ますように小さく微笑んですらくれる。

彼の手を、シャルルはそっと押し頂いた。

「オーランシュ公爵家の……少し前まで君たちの隣の領地を治めていた一族のことを、どれくらい知っている？」

エルヴェは軽く眉を上げたが、突然の話題にも余計な口は差し挟まずに答えた。

「あまり多くはありません。子爵家より長く続いた血筋であることと、過ぎた野心で一度断絶しかけたこと、それを免れたと思ったら最後の後継者が爵位を継いでまもなく事故死したこと。そして……」

エルヴェの顔つきが変わる。何かを見出した青い瞳が真っ直ぐ捕らえたのは、ミシエール。

「そうだ、聞いたことがありました。オーランシュ公爵家は諜報に秀でていたと。それを支えていたのが、密かにそのために作り上げられた一族だと」

「そうだよ」

決定的な一言を告げる、シャルルの手の方が震えている。当事者であるミシエールは、強くそれを握り返してくれているというのに。「その一族の名前は、確か」

「……『ブラン』です」

とてもとても静かに。

ミシエールは、エルヴェの視線を受け止めて、背筋を伸ばして立っている。

第十章 秘密（1）（後書き）

長くなったので二つに分けます。

第十章 秘密(2)

「未来のことは、僕では三日先までしかわからない。そしてほんの少しでも直接知っている人のことでなければ、僕はその人の時に触れることができません。幸いにも、僕はクロード様を存じておりました」

「……なるほど」

さしものエルヴェも、何を言い返すこともできないようだ。

シャルルは言葉の途切れた隙を逃さず、ミシエールを自分の後ろにかばう。

「今日はこのくらいにしておいてもらえないかな？ 先刻のことで、私も彼らも疲れているからね。君も休みたまえ」

「……承知いたしました」

もっと粘るかと思いきや、エルヴェはあっさりと引き下がる。拍子抜けしつつも安心し、シャルルは自ら彼のために扉を開けてやった。

「ああ、最後にもう一つだけ」

外へ出る直前、エルヴェは思い出したように足を止める。

「なぜ大公であるあなたが、貴族が絡んでいるとはいえ今回の騒ぎに介入したのか、それを私は知りたい」

並んで立つと、憎らしいことに彼の方が若干背が高い。

見上げるのがいやで、シャルルはわざと視線を合わせない。

「君になど教えたくないよ」

けれど飛び出した言葉は、ただの子供じみた意地からのものではない。

「それを聞きたいのなら、君も一つ対価を払うべきだ。イヴェットとユーリ、どちらに誠意を見せるのか決めたまえ」

「……何のことです？」

「とぼける気かい？ それとも、本当にわからないほど君は頭が悪

いのか？」

エルヴェの気配が、揺らぐのを感じた。起こらせたようだと思ったものの、シャルルの気は済まない。

それに、そもそも軽々しく明かすわけにはいかない理由がある。

「やはり夜が明けるまで、交代で周りを見張ろう。さっきの男の仲間がまた襲ってくるかもしれない」

一方的に話を切り上げ、シャルルはエルヴェから距離をとる。

「時間になったら起こすから、早く休みたまえ」

背を向けて椅子に腰を下ろしたシャルルに、もうエルヴェは何も言おうとはしなかった。

扉が閉まった音が合図であったかのように、シャルルの身体から緊張が抜けていく。

「お前も寝ておけよ。日が昇るまでそれほど間がないしな」

友人の騎士が、ぽんと肩を叩いて部屋を出て行く。

そして、寝台へと促してくれたミシエールの手を、シャルルは強く握りしめた。

「……すまない」

「どうして謝ったりなさるのですか？」

彼の手はいつもと変わらず温かく、滑らかで触れるたびにほつとする。

だから、なおさら申し訳なくて。

「辛かっただろう？」

彼と彼の一族、そしてオーランシュ公爵家との関わりは、まだそれほど遠い過去ではない。

彼の運命が一変したあの日は、決して楽しい気持ちで回想できるものではないはずだ。

「僕は平気ですよ」

なのにミシエールは、あくまでも否定する。

微笑んで。

「あのころの出来事は、大事な日々です。悲しいことが多いけれど、

それでもあれがなければ今の僕はいないから」

シャルルを寝台に座らせて、ミシエールは膝をつく。靴を脱がせてくれる彼の、水色の髪を思わずシャルルは撫でていた。

「君は強いね」

「シャルル様やフレイ様が、一緒にいてくださるからです」

紫の瞳に、迷いも強がりも見られない。

「……シャルル様は、ユーリ様を大切に思っていらっしゃるのですね」

だからつい、油断していた。

「なっ……！」

真っ直ぐに指摘されて、シャルルは一気に頬を染める。

何とかごまかそうとして、無駄だとすぐに気づいた。

赤くなった顔やあからさまに動揺している表情を、他の何かのせいでできるほど部屋は暗くなかったし、何よりミシエールはすぐ目の前にいるのだ。

「そんなに慌てることですか？」

「……いきなりだったからだよ」

辛うじて、それだけ言えた。

けれど、やはりそれは事実なのだと、思いの外すんなり認めることができた。

一人でがんばって、気丈に生きてきただろうあの少女。

控えるべきところはわきまえていて、それでいて意見はきちんと正確に述べる。

そして、弱みを見せることに慣れていない。

「シャルル様」

不意の真摯な呼びかけに、どきりとする。ミシエールはシャルルの手にすがり、膝をついたまま彼を見上げている。

懇願を、いっばいに瞳に満たして。

「僕の自己満足なんだと、わかっています。それでもお願いします、どうか――ユーリ様を解放して差し上げてください」

震える唇が、訴える。

「……あの方を見ていると、フェオドル様を思い出す」
シャルルは手を伸ばし、想いのすべてを込めてミシエールを抱きしめた。

幕間 一（1）

イヴェットは姉の看病を離れて、宿から出た。

結局あの騒ぎのあと、怖かったのと興奮とでまったく眠れなかった。きつとそのせいで今朝の自分はひどい顔をしているだろうと考えると、気が滅入った。

宿の狭い中庭に出る。あるのは粗末な小屋と洗濯物、そしてイヴェットは今まで一度も目にしたことのないがらくたや何かの道具などくらいだった。だが、それでも一応の規則性を以て、隅の方に積み上げられたり寄せられたりしている。

そんな雑然とした場所でも、肺腑にしみいつてくる朝の空気は冷たく爽やかで、張り詰めていた気持ちがようやくよくほどけていくようだった。

深呼吸をして、イヴェットは昨夜の騒ぎを思い出す。

本当に突然の出来事だった。宿の出入り口が大きく叩きつけられた瞬間、数人の男がばらばらと飛び込んできたのだ。

すぐさま動いたのは、エルヴェだった。剣を抜き放ち、男達に立ち向かった。

しっかりと、イヴェットの腕をつかんで。

かばってくれた背中と、温もりの確かさが蘇ってきて、イヴェットは頬を染めた。

初めて、だった。

彼があんなに強くあんなに確かに、自分に触れてくれたのは。

「エルヴェ……」

名前を口にするたび、甘い痛みで胸が締め付けられる。どきどきして、空も飛べそうな気持ちになる。

最初は姉の従者としか見ていなかったのに、いつの間にこんなにも彼のことで心がいっぱいになってしまったのだろう。

だから。

彼が何かにつけ、姉の名前を口にするのが、口惜しくて。

イヴェットは、深窓で大事に育てられた少女だ。ほしいものは、望めば両親が何でも与えてくれた。だから今まで、得られなくて悔しいという思いをしたことがなかった。

たった一つをのぞいては。

「あら？」

話し声を聞き留めて、イヴェットは顔を上げる。

朝の清涼さは、じわじわと太陽の自己主張で退けられつつある。

知らないうちに汗ばんでいた額からそっと前髪をのけて、彼女は近づいてくる声を何とはなしに探った。

心臓が、口から飛び出しそうになる。話しているのが誰なのか、わかってしまったから。

「やだ、エルヴェだわ」

こんなところにいるのを見つかったら、どうしていいかわからない。こんな不安定な気持ちで彼の前に出たら、何をしでかすか自分でもわからなかった。

辺りを見回して、隠れ場所を探す。幸いがらくたの後ろに隙間ができていて、イヴェットは迷わずそこに飛び込んだ。

近づいてくる。声と、気配が。

抑揚に乏しいが、低く心地のいい声音は間違いなくエルヴェのものだ。話をしている相手は、誰なのだろう。

「では、私はここで」

隠れているイヴェットの頭の上から、エルヴェのそんな言葉が降ってくる。

「ああ、あとでな」

もう一人の声も、男のものだった。去って行く足音は一つ。男はこの場にとどまったようだ。

イヴェットは困ってしまった。別に悪いことをしているわけではないが、このままここから出て行くのも気まずい。

どういう理由かは知らないが、まだぐずぐずと去らずにいる男が

誰なのか、遅まきながらようやくわかったから。

「……で、何やってんだ、イヴェット？」

「きゃあっ！」

今度こそ、イヴェットは跳び上がった。その拍子に身体ががらくたにぶつかり、彼女を隠してくれていたそれらは派手な音を立てて地面に転がる。

土煙と、はた迷惑な音が静まったあとには。

「まだかくれごっこをする年なのか？」

揶揄する口調で彼女を見下ろす黒髪の騎士が、笑いを噛み殺した表情で立っていた。

幕間 一（1）（後書き）

イヴェット視点。なるべくやらないようにしようと思ってたんですが……。

幕間 一（2）

「……ごめんなさい。あの、エルヴェが来たから、つい……」

真っ赤になって言い訳するのを聞いているのかいないのか、フレイは黙ってイヴェットを見ている。

異性に見つめられることには慣れっこだったが、この人の目は何かが違う。

気詰まりで、とうとうイヴェットは口をつぐむ。

「戻らないのか？」

「え？」

なのに今度は彼の方から話しかけられて、イヴェットは戸惑った。この人は、何か違う。

今まで出会ってきた男性達のように、積極的に言葉をかけてきたりしない。

その理由が、彼女にはわからない。

「そういえば、ユーリは起きたのか？」

彼女よりも、姉の方を気にかけるなどと。

「……まだですわ」

いらだった気持ちが口調に出て、イヴェットは少し驚いた。けれど改めてやる気にもなれず、勢いよく立ち上がる。

「病気ではないのですもの、終わればよくなりますわ」

実を言うと、イヴェットもいつもかなり辛い思いをする。けれどその分、対処法もよく知っている。

だからこそ大丈夫だとフレイに答えたのに、彼は不快感に眉根を寄せ、こともあろうにイヴェットを睨みつけてきたのだ。

「それが、苦しんでいる身内を放っておく言い訳になるのか？」

鋭く切りつけられ、イヴェットは唇を噛む。

そんな風な言い方をしたら、まるで自分が薄情者のようではないか。

腹が立つ。

どうしてこの人は、こんな意地悪を言うのだろう。

「お前がそうやって、ユーリを嫌うのは何でだ？ ユーリが何かしたのか？ そうだとしたらそれはいつで、何をされた？」

矢継ぎ早の容赦ない詰問に、とうとうイヴェットは涙ぐむ。しかしフレイは、まったく動じずに腕を組んで彼女の答えを待っているようだ。

どう答えたとしても、この人はきっと自分をなじるに違いないと思えたけれど。

「お、お姉様と私の関係なんて、フレイ様には関係ないはずですよ！」

彼の態度も言葉も、何もかもが理解できない。イヴェットは思わず声を荒げていた。

「だいたいほとんど離れて暮らしているのに、何があるわけでもないじゃないですか！」

「そうだろう？」

喚くイヴェットに返されたのは、確認めいたそんな一言だけで。今度は驚きと戸惑いで絶句する彼女に、フレイは静かに続ける。

「お前とあいつとの間に、直接何かがあるわけがないんだ。第一お前の両親は、お前とユーリを完全に差別していたからな。一緒に過ごしたことは、ほとんどないんじゃないのか？」

「そんなことは――」

反証を探して、イヴェットは必死で自分の思い出を探った。

だが、記憶を過去へ飛ばすほどに、イヴェットの困惑は深まるばかりだった。

両親は、愛情を以て自分を育ててくれた。父と母と一緒に、いろいろなところへ行っていていろいろなものを見聞きした。とても楽しい思い出がたくさんある。

なのに。

その中のどこにも、ユーリの姿が見当たらない。

「よく知らない相手を、好いたり嫌ったりできるわけなんかないんだ。そんな感情があるとすれば、他から植え付けられてそう思い込んでいるだけじゃないのか？」

他、とは。

友人もほとんどおらず、一日をほぼ屋敷の中で過ごすイヴェットにとって、思い当たる相手は。

「お父様と、お母様……？」

信じられないし、信じたくないけれど、他に思い当たる相手など一人もいないのだ。

「まあ、お前にも一つだけ、お前自身の理由があるんだろうけどな」茫然と立ち尽くしたままの彼女の横を、フレイが歩き過ぎていく。「でもそれは、お前とユーリで腹割って話し合えば解決することじゃないのか？ 決めるのはどちらでないにしても」

理由。

イヴェット自身の。

ユーリに、わだかまりを持ってしまう理由。

唇をかみしめて、イヴェットはうつむいた。

ほしいものは、望めば両親が何でも与えてくれた。だから今まで、得られなくて悔しいという思いをしたことがなかった。

たった一つをのぞいては。

あの青い瞳が柔らかく溶けて、いっぱい親愛を称えて微笑む様。イヴェットがずっと焦がれてやまない宝物は、常に姉が独占していたのだ。

幕間 二(1)

いきなり剣の稽古に誘われて何事かと思ったが、フレイはなかなかの使い手だった。

齒ごたえのある訓練結果に満足し、エルヴェは宿の部屋へ戻っていく。中庭を過ぎて裏口から中へ入ったとき、外で何か大きな物音がしたようだったが無視した。

今は、ユーリの方が心配だった。

「おや」

裏口からは、宿の台所を横切らなければ二階への階段へ行き着けない。靴の泥を入り口で落としていると、女将がエルヴェに声をかけてきた。

「ありがとよ。気を遣ってくれて。あのお嬢さんの具合はどうだい？」

「ああ……」

大丈夫と答えようとして、躊躇う。

判断を下すための情報を、エルヴェは何一つ持ち合わせていないからだ。

ユーリは、だいたい一月に一度の割合で今のような状態になる。そういうとき、彼女は決してエルヴェをそばに近づけようとししないのだ。

見苦しく伏せる様を従者に見せないようにしようという主としての配慮なのだろうと、エルヴェは勝手に思っている。

「問題ありません」

しかし結局、エルヴェはそう答えるしかなかった。

不用意なことを言って、もしこの人の良さそうな女が看病に乗り出せば、ユーリの心をどんな形であれ乱すに違いないからだ。

何か言いたげな女将に軽く頭を下げ、エルヴェはそのまま反対側の扉へ向かう。そこを出れば食堂で、さらに食堂を突っ切ったところ

ろに二階への階段がある。

身体を洗ったあと、街へ出て足りないものを買そろえるつもりだった。ユーリが元気になったとき、すぐにでも出発できるように「わっ」

考え事をしていたエルヴェの肩に、軽い衝撃がぶつかってくる。同時に起きた小さな悲鳴に、彼はよろめきつつも振り返った。

「ごめんなさい」

壁に背中をつけるようにして、ミシエールがエルヴェを見上げていた。ぶつかった反動が体格差のせいでエルヴェより大きかったのか、壁まで跳ね飛ばされたらしい。

「あの、お怪我はありませんか？」

なのに、華奢な青年はそんなことを尋ねてくる。あの程度のことです、どこを痛めるわけもないのに。

「ええ、何ともありません」

「よかった。すみませんでした、ぼうっとしていて」

そうして、何の屈託もなくふわりと微笑む。一緒に旅をしているとはいえ、ほとんど気心のわからない自分に対し、なぜここまであけすけなのか。

知らず知らず、エルヴェの表情は険しくなる。

ミシエール・ブラン。自分と同じく平民でありながら、王族貴族にしか持ち得ないはずの不思議の力を身に宿す青年。

「……聞いたことがある」

二年前、最後のオーランシュ公爵が身罷ったとき、不穏な噂があった。

「フェオドル・オーランシュは、王家の転覆を謀ったのだと」大きく。

ミシエールは、肩を震わせる。

それが何より自分の知っている事実が真実である証左だと、エルヴェはさらに言葉を継ぐ。

「シャルル殿下の急な御退位は、そのためなのだ」

「つ——！」

ミシエールの紫の瞳が、零れんばかりに見開かれた。

いかにも純真そうで、優しげな美貌。たいていの者はこの青年に無垢や清廉さを見出すに違いない。

だが、自分は違う。

「その頃公爵には、従者がいたと聞いている。——お前だな、ミシエール・ブラン」

かつて公爵家が幾度も歴史の中で繰り返したのと同じように、彼もまた策謀のためにその力を用いたに違いない。

幕間 二(1) (後書き)

そんな場面転換法で大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない。

幕間 二(2)

ミシエールは、壁に背を預けたまま青ざめている。わななく唇は、反論を紡ぎ出すこともできないようだ。

それでもなお念を入れて、エルヴェはゆっくりと彼の上に覆い被さった。

「何を企んでいる？」

逃げられないよう、張り詰めた表情の横に両手をつく。逸らされようとした視線は、先に回り込み間近で絡め取ってやる。

「追い落とそうとした相手の、懷にまで深く入り込んで。主が亡くとも、その穢れた望みを全うする気か？」

「ち、ちが……」

「では何だ？ ああ、まさか主家を違えて長らえようとしても？ だとしたらとんだ下種だな」

もはやミシエールは蒼白を通り越して、完全に血の気を失っている。それでもエルヴェは、やめてやろうという気になれなかった。

「だが正直なところ、お前が何をしようと誰が死のうと、私には関係ない。こちらに干渉しない限りはな」

力を失い、震えるミシエールの襟首を、ぐいとかんで引き寄せらる。のけぞった顔が大きく振られ、ミシエールは呻く。

「何をしようと何を考えようと勝手だ。しかし、ユーリ様を巻き込むことだけはするな。あの方に何かあったら……決して赦さない」

言うだけ言うと、エルヴェは腕を払う勢いで細い身体を放り出す。派手に床の上に転がったミシエールは、痛みのせいか起き上がろうとしない。

冷たい一瞥だけをその上に投げつけ、エルヴェは足早に部屋に戻っていった。

朝食の時間にエルヴェが食堂へ降りていくと、シャルル達が先にテーブルに着いていた。イヴェットの姿が見えないが、ユーリを診てくれているのだろうか。

そしてもう一人、ミシエールもいない。

「遅くなりました」

短く詫びて、エルヴェはシャルルとフレイから一つずつ椅子を隔てて腰を下ろす。三人もいないときすがにがらんとして、ほとんど知らないに等しい間柄という自分たちの関係がいやでも際だった。

「ミシエールは、具合が悪くてね」

特に尋ねもしないのに、シャルルがいきなりそう切り出した。

「可哀想に、昨日もずっと絵を描いていてくれていてね。無理はしなくていいと言ったのに」

その言葉の間に、女将が料理を運んできてくれる。硬くて少し曲がった食器といびつな皿、料理自体も決して豪華とは言えなかったが味はいい。

「――彼は、描くことで識^しるんだよ」

女将が離れてから、小声でシャルルは言った。

「恐らく彼の力はこのにいる私達の中で一番強いけれど、それを使うとかなり消耗するんだよ。実感が湧かないかもしれないけれど、気にかけてくれるとありがたいな」

口調は柔らかだったけれど、言葉の中に多量の皮肉が混じっている。従者がどんな目に遭ったか、大公は承知しているらしい。

しかしエルヴェは食器を留めず、彼らに視線も向けない。

「優しい人なんだよ。危なっかしいくらいにね」

そう続けたシャルルに、エルヴェは若干呆れた。彼は、あの青年が何をしようとしたのか知らないのだろうか。その上で従者にしたとでもいうのだろうか。

だが、その方が納得できるのも事実だった。

「主のために力を尽くすのは、従者としての当然の役目です」

釘を刺したくて、エルヴェは前を見たまま口を開く。

「何があっても主に従い、その意向を叶えるため全力を注ぐ、その当たり前ができなくて何が従者たりえましょうか。当たり前を遂行しているだけの者を、主が氣遣ったりする必要などありません」
がちやんと大きな音がした。横目で窺うと、フレイがものすごい目つきでエルヴェを睨みつけていた。

「君は、そう考えるの？」

シャルルはあくまでも静かに、そう訊いてくる。

「はい」

食事に戻りながら、エルヴェは迷わずうなずいた。

「そしてもし、従者が主に背いたり逆らったりしたときに肅正するのが、主たる方の役目でしょう」

皿が空になる。エルヴェはようやく、シャルルに目を向けた。

どんな顔をしているかと思いきや、柔和な顔がほとんど変化していないのを目の当たりにしてエルヴェは鼻白む。

「彼は大事な従者だよ。過去に何があるうと、関係ない」

向けられる笑みに、はっとする。大公は何もかも知っていて、その上であの青年をそばに置いているのだ。

そう、悟った。

「背いた従者を正すのが、主の役目と君は言ったね？」

微笑みはあくまで優しく、けれど突きつけられる言葉は鋭い。

指先一つ、動かせなくなるほど。

気圧されている自分を自覚して、頭に血が上った。

「なら間違った主を正しい方向へ導くのは、従者の役目じゃないのかな？」

けれどどういうわけか唐突に、シャルルはすいと視線を逸らす。腹立たしい威圧感が消えた安堵に溜息をつきそうになるのを、エルヴェは意地でこらえた。

「彼は、贖罪のつもりなのかもしれないね」

先ほどまでが嘘のように、向けられる横顔は寂しげだった。

「そんな気持ちで、道具のようにそばにいてほしいわけではないの

にね」

シャルルは立ち上がる。食事には、ほとんど手をつけていない。

「……エルヴェ」

そばをすり抜けざまに、大公は囁いた。

「彼女も、同じじゃないのかな？」

一瞬の、間。

エルヴェが振り返ったときには、もうシャルルは階段を昇りかけていた。

幕間 二（2）（後書き）

なんか思いの外長くなったので、まだ幕間続きます。
――〇

幕間 二(3)

父親の子爵やその夫人と違い、ユーリは貴族の傲慢さをまったく持っていなかった。

子爵家の姫が自分に声をかけ、親しく勉強を教えてくれるということにまずエルヴェは驚いた。彼女が男のなりをして男のように振る舞っていることは、その衝撃の前には些細でどうでもよかった。彼女がいなければ、今の自分はない。たくさんの知識と教養と、信頼を向けてくれたユーリはエルヴェにとって絶対無二だった。

——もう一人の姫が、現れるまでは。

日はかなり高くなってきたが、ユーリはまだ昏々と眠っているのだという。

「お目覚めになる様子は……」

「ないわ。でも、心配はいらないって。そういう魔術をかけたらしいわ」

出てきたイヴェットは妙に元気がなくて、それもまた気にかかる。

「エルヴェ……」

常の彼女らしくなく、うつむいてドレスをいじっている。何か不安なことが、あるのだろうか。

「ねえ、正直に答えてほしいの」

しばらくそうして無言でいたあと、彼女は思いきったように顔を上げる。

胸を、力一杯殴りつけられた気がした。

大きくつぶらな緑の瞳は、潤んだまま見開かれてエルヴェを飲み込んでしまいそうだ。

初めて見る。こんなイヴェットは。

「決してごまかさないでね。約束して」

その必死な面持ちを、うつすらと朱が染めていく。幼さの残る愛らしい顔立ちが、その色で劇的に変化する。

一人の、女に。

「約束して、エルヴェ」

迫る声音すら、艶を帯びていて。

何かに操られたように、エルヴェはこくりと頷いていた。

「エルヴェ……お姉様が、大事？」

尋ねるイヴェットは、震えていた。

「答えて」

「——ええ。大切です」

間違はなくそれは真実だったから、エルヴェは肯定を返す。

イヴェットの眼差しが、悲哀の色を見せた。

「……何よりも、大事？」

「はい」

「ほんとに？」

「はい」

「じゃあ、じゃあ……」

喘ぐように息を吸い、イヴェットはよろめいた。反射的に手をさしのべようとした自分を、彼は押し留める。

彼女は、壁を伝って一人で己を支えていた。

「じゃあ……愛している？」

不明瞭な息づかいのせいで、他の言葉がそう聞こえたのだと、最初は思った。

「お姉様のこと、女性として愛している？」

しかし、顔を上げてほとんど挑むようにエルヴェを射抜くイヴェットの目が、幻聴ではない現実を容赦なく彼に突きつける。

エルヴェは、黙って彼女を見つめ返した。

出会った頃と比べて、ずいぶん大人びた。無邪気に慕ってくるのを愛らしいと思い、そして、今は。

「……ユーリ様が、私の唯一です」

短くそれだけを告げて、エルヴェはきびすを返す。呼び止める声は、ない。

「……嘘つき」

けれど背中に投げつけられる声は、弱い心を未練へと変えてしま
いそう。

「ごまかさないでと、言ったじゃない」

心が抗い得るうちに、エルヴェは足早にその場を去った。

幕間 二(4)

雨が降っている。

昼前までは晴れていたのが嘘のように、いびつな窓ガラスは激しい水滴の拳でがたと鳴っている。風が強くなったり弱くなったりする度、音の大きさが変わって時折驚かされる。

明日もこの調子なら、出発は無理だろう。いや、最悪近くの川が増水したりすれば、もっと予定が遅れるかもしれない。

エルヴェはすっかり詰め終わった荷物を部屋の隅に置いて、乱暴に寝台の上に身体を投げた。

雨のせいで、部屋が暗い。じめじめとして、気が滅入る。

いったいいつになったら止むのかと、しばらくそうしていたあとエルヴェは寝台から降りて窓辺へ移動する。

そしてふと目に留めた光景は、見過ごせないものだった。

エルヴェの部屋は、宿の入り口のほぼ真上にある。当然表の様子がよく見えるのだが、宿の横手に植えられている大きな広葉樹の下に、特徴のある水色の髪がぽつんと目を惹いたのだ。

ひどい雨なのに、数歩の距離に宿の扉があるはずなのに、ミシエールはなぜか木の根元にうずくまったままだ。何をしているのだろうと思い覗き込もうとしても、部屋の中からはよくわからない。

少し考えたあと、エルヴェは身を翻して部屋を飛び出した。

外へ出てみると、雨の強さと勢いが実感できる。臉をすがめて外套を頭からかぶり、エルヴェは問題の木へ駆ける。ミシエールは、やはりうずくまったままだった。

「何をしている？」

雨に負けないよう、かなり大きな声で言ったはずなのに、水色の髪はぴくりとも動かない。

聞こえなかったのかと、エルヴェはやや身をかがめて細い肩に手をかけた。

息を、止めてしまう。

触れた服の布地にはぐっしりと水が染みて、凍るような冷たさだった。掌から、紛れもない震えが伝わってくる。

考えるより先に、身体が動いていた。

「っ、エルヴェさん……？」

「お前は馬鹿か？」

苛立ちのまま怒鳴りつけ、エルヴェはミシエールを抱き上げて宿へ飛び込む。すれ違った女将と他の客が啞然としていたが、気にせず用件だけを告げる。

「風呂の用意をお願いする」

女将がかくかくとおかしな動きでうなずいたのを確認し、彼は二階へ一気に駆け上がった。

「エルヴェさん、あの……」

何事か言いつのろうとするのを無視して、彼はミシエールの部屋を探す。確か、彼の部屋から見て向かいの左側、二つ目だったはずだ。

「ここで間違いないか？」

「え？ あ、はい」

戸惑いの混じる肯定を聞いてから、扉を開ける。中へ入って、すぐにミシエールを床に下ろし、エルヴェは扉を閉めざまに尋ねた。

「身体を拭く布は？」

「……あります、けど……」

しつとりと全身を濡らして、ミシエールは寒そうに肩を縮めていた。水色の髪が頬に張り付いているのを、エルヴェは無意識にかき上げてやる。

「……ありがとうございました」

見下ろす彼の視線から逃げるように、ミシエールは目を伏せた。したたる水滴が長い睫毛に落ちて、どきりとさせられる。

泣いているように、見えて。

「……敵意を持つ者を、近づけさせないようにする術があるんです」

そのままうつむいて、彼は唐突に話し始める。

「ユーリ様もお加減がよくないし、少しでも皆様が休息できるようにと思って……」

「それが、この雨の中あんなところにいたのとの関係があるのか？」

口にしてから、そもそもこんな状況になっている原因に思い至る。エルヴェは部屋を見回して、ミシエールの鞆を探す。勝手に開けて中から乾いた布を取り出し、頭からかけてやった。

「いくつか、力の拠点を作ってやる必要があるから。宿を囲むようにして、それを作っていて——」

ようやく、話が見えてきた。つまりあそこでうずくまっていたのは、その魔術とやらのためだったということか。

「だからといって、あのままでは確実に風邪を引くか、最悪の場合肺炎を起こしていたぞ」

「ええ……」

布の影になって、ミシエールが今どんな顔をしているのかは窺えない。

雨の音が、ますますひどくなっている気がした。

「……とりあえず、温まって着替えろ。私は——」

戻る、と続けようとして。

振り返った瞬間、エルヴェは硬直した。

「お前……！」

両手で、強く口元を抑えて。

ぱたぱたと木の床に染みこんでいく、滴に隠れて。

紛れもなく落ちていく、涙を見つけてしまったから。

「ごめん……なさい……」

喘ぐような囁きが、必死で謝罪の形をとる。

「ごめんなさい……」

何度も何度もそう繰り返す細い姿が、大きく傾いだ。

慌てて距離を詰め、抱き留める。腕に落ちた衝撃は、予想していたよりずっと軽くて、冷たくて。

——ぞくりとした。

「……る……さま……」

袖を掴む、弱い力。消え入りそうな声。

今朝のことを忘れているわけではないのだと思うのに、どうして彼は、こんなに無防備にすべてを預けてくるのだろうか。

肩の辺りで、同じ囁きが聞こえた。

「フェオドル様……」

心臓を鷲づかみにされたかと、錯覚した。

腹の中が凍るようだ。

どうして、彼はこんなにも。

「……フェオドル……さ、ま」

繰り返す声音が悲しくて、痛々しくて。

エルヴェは、腕に力を込めた。

幕間 二（４）（後書き）

どうしてこうなった。

幕間 二(5)

「さっきは……すみませんでした」

夕方近くなって、風呂から上がったばかりと一目でわかる姿で、ミシエールはエルヴェの部屋を訪ねてきた。

雨は少し小降りになっている。結局昼間はずっと勢いが衰えず、この先の川が増水したという情報も入ってきていた。

「体調は？」

何を言えばいいかわからず、とりあえず無難な質問をする。ミシエールは、少し上気した顔で小さく微笑んだ。

「大丈夫です。ありがとうございました」

その笑みに、既視感を覚える。

何があろうと弱みを見せようとせず、一人で立っていようとする姿。

エルヴェは、目を細めた。

——誰と似ているのか、悟ったのだ。

「少し、話をしてもいいですか？」

だから、そんな申し出をすんなり受け入れてしまった。

ミシエールを招き入れて、一つしかない椅子を勧める。彼は恐縮していたが、エルヴェが寝台に腰を下ろすとおずおずしながら従った。

「……僕の、前の主のことです」

どんな前置きもせずに、彼は切り出した。

一瞬、雨が強く硝子を殴る。

「僕はもともと、母の一族のことを知らず過ごしてきました。この力も、そのころはただ未知で恐ろしいものと思えなくて、ひたすら隠し通そうとしていました。それを、あの方がやってきて、強引に乱暴なやり方で暴いた」

淡々とした言葉とは裏腹の、口調に溢れる温かさ。オーランシュ

公爵を知らないエルヴェですら、なにやら胸にじんわりと染みいるものを感じるほど。

「力を怖がるだけだった僕に、使い方を教えてくれて……何より、受け入れてくれた。あの方と会わなければ、僕はここにいなかった」
エルヴェは、思わず拳を握りしめた。

目の前の青年が、急にぐんと存在を強めたようだ。

彼の心は。彼がいつまでも抱いてきたであろう、想いは。

「あの方は、僕のすべて……でした」

優しく潤んでいた紫の瞳に、陰りが差す。何か言葉をかけたいのに、唇が動いてくれない。

「エルヴェさん」

悲しい眼差しのままで、彼は真っ直ぐエルヴェを見つめてくる。

「あの方を死なせてしまったのは、僕です」

ミシエールの声は、震えていた。それでもなお、彼は話を続けようとする。

「あの方が大事だったから、あの方の願いは何でも叶えたくて、僕は間違えてしまった。あの方の誤りすら肯定して手を貸して、その結果……」

最後の一言は、口に出させるに忍びなくて。

エルヴェは立ち上がり、彼の腕を掴んでいた。

驚いたように見開かれる瞳を覗き込み、首を振る。

「いい、わかっている」

ミシエールは、ゆっくりと瞬いた。激しくたゆとう紫の双玉を、エルヴェはこの時初めて美しいと思った。

そして、理解した。ミシエールが何のために、この話をしてくれたのかも。

「ユーリ様が、お元気になられたら」

ミシエールが、うなづく。励ますようにエルヴェの手を包み込んでくれる掌は、しっとりと温かくて。

「私の答えと決断を、あの方は……受け入れてくださるだろうか」

つい零れてしまった不安は、深まる温もりが掬い上げてくれた。

「あの方は強い方です。あなたが思っているよりも、きっと」

「……そうだな」

自分は、もしかすると見くびっていたのかもしれない。

彼の主を。

信じるに足る人だと、ずっとそばにいたのに。

「それに、あの方は……」

さらに何かを続けようとして、ミシエールは不意に口をつぐむ。

エルヴェが眉をひそめても、もう唇を開こうとはしない。

「何だ？」

「いいえ。いいんです」

手をほどいて、彼は立ち上がった。

「お話しできてよかった。戻りますね」

気にはなったが、この様子ではどうやっても彼は何も言わないだろう。エルヴェは追求をあきらめた。

「……ミシエール」

彼が部屋を出る直前、エルヴェは思い切って呼び止める。

振り返った視線の位置は、エルヴェよりも少し低い。

身がかがめて、それを覗き込み。

「今朝は、すまなかった」

紫の瞳が劇的に変化していく様を、エルヴェは間近ですべて見て取った。

驚きと、うれしさと、それから。

「ありがとうございます」

双眸の輝きと一緒に寄越された、笑顔のまぶしさ。

シャルルがあんなにもミシエールを気遣い大切にしている理由が、エルヴェにもようやく理解できた。

幕間 二(5) (後書き)

やっと終わったエルヴェ編。ようやく次から本編に戻ります。おつきあいくださりありがとうございました。

第十一章 姉妹（1）

目を覚ましたのは、雨音のせいだった。

歪んだ窓ガラスを打って、空からの滴は溶きに弱く時に激しく風に翻弄されている。

身体を起こしてみても、ユーリはその軽さにまず驚いた。

いつも腹から血が落ちるときは、三日は絶対に具合が悪く、痛みをこらえて寝ていることしかできないのに。

まさか三日も意識がなかったのかと一瞬思ったが、まだ血は止まっていないようだったし、部屋の様子も昨日からそう大きく変わってはいない。

昨日から。

「そうだ！」

叫んでから、微かに下腹がうずいてユーリは身体を丸める。しかし動けないほどではなかったので、なるべく振動を与えないよう気をつけて寝台から降りた。

やはり、いつもと比べものにならないくらい身体が楽だ。いったいどうしたことなのだろう。

「まあ……ありがたいか」

呟いてみて、耳に届くのは当然自分本来の声。ずっと眠っていたから、かすれきって聞き苦しい。

チョーカーはどこへやったろう。

腹を抱え込むように不自然な体勢できよろきよろしていると、部屋の扉が静かに開いた。

「――！」

息を呑む。

入ってきたのがイヴェットで、寝起きの乱れきった姿を見られたという衝撃のためばかりではない。

「……お姉様、もういいの？」

入ってきたイヴェットの姿は、あまりに普段の彼女らしくなかった。いつでも髪をきちんと梳かし、服装にも乱れを赦さない少女なのに、目の前にいる彼女の巻き毛はぐちゃぐちゃで、櫛を通していないと一目でわかる。ドレスもしわが寄っていた。

けれど何よりユーリを愕然とさせたのは、明らかに泣いたと見て取れるイヴェットの顔つきだった。

「……何があった？」

いつも感じるわだかまりや嫌悪感が、今は湧いてこなかった。

「エルヴェが……」

啜り泣きのように寄越される名前には、やはり反応してしまったけれど。

「エルヴェがどうした？ 何かあったのか？」

尋ねてから、彼はどこにいたのだろうと考える。

ユーリの体調が悪くなるときは、彼は彼女に会いに来ようとはしない。けれど、やるべきことをきちんと片付けておいてくれて、彼女が体調を戻したときにすぐ中断していたことを再開できるようにしてくれている。

今もきつと、そうしていてくれるはずだが。

いつでも出発できるよう、旅の支度を調べて――。

「あ……」

くらりと目眩がする。暗転した世界の前できつく目を閉じて、ユーリは額を抑えた。

「お姉様？」

頭が痛い。ぐるぐると何かが回っている。

夜の光景。眠っていたら、騒ぎが起きて、何者かが寝室に飛び込んできて、そして。

「っ、イヴェット！」

「きゃっ！」

目上げた時思いの外近くにいた妹の腕を、ユーリは力任せに掴んだ。

「あいつはどうなった？ 私に襲いかかったあの男は！」

「あ、あれはシャルル様達が……」

「エルヴェは！？ エルヴェは何ともなかったのか？ まさか、怪我でもしたんじゃない……！」

「お姉様、落ち着いて」

言いながら、イヴェットが顔を歪める。力を込めすぎていたことによく気づいて、ユーリは慌てて手を離れた。

「大丈夫よ。誰も怪我はしていないから」

両方の二の腕を痛そうにさすりながら、イヴェットの口調はそれでも静かだった。

「……そんな必死なお姉様、初めて見た」

同じ抑揚で呟かれた一言が、ユーリを我に返らせた。

思わず取り乱してしまった自分を恥じる彼女を、イヴェットはじつと見つめていたが。

「お姉様、やっぱりエルヴェのことが好きなのね」

強ばった肩を、引き攣った顔を。

「ごまかしたりなさらないでね、お姉様は（・）」

これまで聞いたことのない、妹の鋭い声がユーリの心までも戒めた。

第十一章 姉妹（1）（後書き）

ユーリが起きました。お待ちかねの姉妹対決（？）です。

第十一章 姉妹（2）

「私、エルヴェが好きよ。お父様やお母様よりも……世界の誰より好きよ」

また涙が出てきたのか、イヴェットは乱暴に目元をこする。

「エルヴェにも、そう思ってたほしかったの。だからお母様が言うような、『殿方に好かれる淑女』になろうとして、いろいろしてきたわ」

それは、当然ユーリも昔よく聞かされてきたことだった。

明るく、愛らしく、殿方に適度に手をかけさせて、控えめでありながらも適当に甘えて困らせる。感情的な振る舞いが最良で、特に相手への好意を原点として行動すること。

母は実際、そうして父を射止めたのだそう。

しかし。

「でも、駄目だった。『殿方』には好かれるかもしれないけれど、エルヴェには好きになってもらえなかったんだもの」

言葉の最後は、震えて消えた。

今度こそ、顔を両手で覆ってイヴェットは本当に泣き出してしまった。

身体のたるさも痛さも忘れて、ユーリは茫然とそんな妹の姿を見つめていることしかできない。

ずっと、イヴェットの言動は気に障るばかりだった。非論理的で非実際の、人の手ばかりを煩わせる。そのくせ、彼女のように容姿が美しければ誰にでも愛されるのだから憎らしいと。

——羨ましいと、思っていた。

いや、今もそうだ。

「……お前は、欲しいものを手に入れているじゃないか」

イヴェットの嗚咽が、止まる。

「エルヴェがあんな目でお前をいつも見ているのを、気づかないと

でも？ それを私が、どんな気持ちで……」

「あんな目って？」

まだ頬を濡らしたまま、イヴェットは首をかしげる。わざとなの
だろうか。わざとでないなら、なおさら腹立たしい。

「何でお前はそう鈍いんだ？ 見ていればわかるだろう？ あんな
顔で、エルヴェは私を見たことなんか一度もない」

「わ……わからないわよ」

「馬鹿かお前は。頭の悪い男はそういうところを『純真』だとか『
無邪気』だとかいって引かかるところが、私に言わせてもらえ
ば周りを気遣えないただの阿呆だぞ」

「そ、そこまで言わなくて……」

目に涙をためて、イヴェットは真っ赤になる。

「私だって、お姉様を見るように彼に見つめてもらったことなんか、
一度もないわよ！」

叩きつけられた言葉の強さに、ユーリは咄嗟に何を言い返すこと
もできなかった。

「私、お姉様が羨ましかった」

続けられた言葉にユーリは目を瞠ったが、イヴェットは姉の変化
には気づかずにまくし立てる。

「信頼してもらえて、大事に思ってもらえて、エルヴェの一番にな
っているお姉様が、すごく羨ましかったのよ。だから、お姉様のこ
とを見る度いらいらして、それで……」

向けてくる敵意も悪意も、すべて。

嫉妬だったのか。

——自分と、同じ。

「……エルヴェが私に向けてくれているのは、信頼と忠誠だ」

目眩がして、立っていられなくなる。

けれど、悪い気持ちではなかった。

「それ以外の何物でもないよ。それだけで……私の望むものじゃな
い」

「お姉様……」

口にしてしまったら。

襲いかかってきた痛みで、頭の中が真っ白になった。

第十一章 姉妹（3）

「お姉様、大丈夫？」

身体がゆっくり傾いて、背中に柔らかなものが当たる。イヴェットが寝台に横たえくれたのだと気づいて、ユーリははっと目を上げた。

「お姉様」

掛布を整えてくれた小さな手が、潜り込んできてユーリの指先を探った。

「エルヴェのこと、好き？」

震えていた。声も、手も。

痛みはまだ続いていたけれど、心はすつと楽になった。

「うん」

そばにいてくれて、いつだって、ユーリのことを大切にしてくれて。

ずっとそれが続けばいいと、思っていた。彼がいなくなったら、一人ぼっちになってしまうから。

怖かった。

今も、それは同じだが。

「私……エルヴェが心から笑った顔を、見たことがない」

気づいてしまった事実は、自分の恐怖などよりずっと重い。

自分のそばにいては、彼はずっとそうなのだろう。

ユーリは、もう一度ゆっくりと妹を見つめた。

先ほどまた泣いたせいで、鼻の頭までが真っ赤になっている、愛らしい小作りの顔立ち。見慣れた媚びを含む表情ではなく、不安と悲しみでいっぱいになった、緑の瞳。

自分と同じ色なのだ。

「イヴェット」

掌から染みてくる高い体温を、ユーリはしっかりと握り返した。

「ありがとう。話してくれて」

イヴェットははっとしたが、何も口にはしなかった。

雨音は、遠ざかる気配がない。

二人の少女達のどちらにも、無音の帳をはねのけようとはせず、ただ黙って互いの手を感じていた。

第十一章 仮説

「これ……」

ミシエールがそう呟いたのは、リアーナの『髪』を調べていたときだった。

エルヴェは買い出しと外の天気の様子を見に行き、イヴェットはユーリに付き添っている。とりあえず三人で現段階までのことを整理しようと、シャルルが提案したのだ。

「どうしたの？」

「いえ、今の部分……」

ミシエールは答えかけたが、自信なさげに口ごもる。

「言ってみろよ。思いついたことは、何でも話し合って検討した方がいい」

フレイがそばで励まして、ようやくミシエールは再び口を開いた。
「もう一度、ここから聞いてください」

ミシエールはリアーナの髪に触れて、封じられた言葉を解き放つ。

『私は南へ参ります。あの地ならば、きっと何かが見つかるはずです。甘くて優しい夢を、探して参ります』

南。彼女の言うように、その足取りは王都から真っ直ぐ南下している。いささかの迷いもないのが多少気になるところだが、行動と言葉に矛盾はない。

「気になるのは、このあとです」

『そしていつの日か、きっと帰ろうと思います。私の大切な故郷に、十分に育った奇跡を連れて。今は私一人で生み育てなければならぬけれど、きっとそれが故郷の地を甘く潤してくれることを、信じています』

ここで、リアーヌの伝言は終わっている。ユーリはこれを聞いた直後、恐らく体調の変化だけでなく心労のために倒れてしまった。

「シャルル様」

今も伏せっているであろう少女に向きかけた心を、ミシエールは静かに呼び戻す。

「リアーヌさんの言う『それ』って、何だと思われますか？」

「何って――」

赤ん坊のことではないか。

そう言おうとして、口をつぐむ。

「まあ確かに、赤ん坊でもできたような言い方してるよな……」

頬杖をつき、フレイはじつと髪を睨んでいる。

そうだ。そう解釈できる『言い方』をしている。けれど。

「断言しているわけでは、ないね」

ミシエールが指摘したかったのは、そういうことだ。

「はい」

うなずいて、ミシエールは髪に触れていた指を引く。時をも描き出す華奢な手は、何かを探すように空を彷徨った。

「赤ん坊だったとしたら」

ミシエールの眼差しが、遠くに据えられる。

「何もかも捨てて、遠くへ逃げてでも子供を産み育てようとするような人が」

やるせない表情が可哀想で、シャルルはそっと彼の肩に触れる。彼は勢いよく振り向いて、悲しげな顔つきの中にふっと笑みを浮かべてくれた。

「自分の子のことを、あんなふうに言うのでしょうか？」

「あんなふう？」

うなずいて、ミシエールは。

静かに続けた。

「『それ』なんて」

シャルルは、目を大きく瞠った。

頭の中で、何かがかちりとはまる音が聞こえた気がする。

「そうか」

フレイも、興奮した様子で腰を浮かせていた。

「言われてみればおかしいな」

そのままフレイはわしゃわしゃとミシエールの髪をかき回したので、彼は小さく悲鳴を上げた。

「フレイ様っ！」

「あ、悪い」

むくれる彼を宥めつつ、フレイは今度は不器用に乱れた水色を整えてやっている。仲のいい従者二人から微笑んで目を逸らし、シャルルは考え込んだ。

ミシエールの指摘はもつともであり、重要な要素だ。ユーリの変事があったとはいえ、今まで見落としていた自分のうかつさに苛立ちすら覚える。

シャルルは、窓の外を見やる。雨は少し小降りになっていて、この女将の見立てでは明日には完全に止むか、降っていても移動に支障がない程度にはなっているだろうということだった。付近の河も増水はしたものの、橋が壊れたりという大事には至らなかったという。

「ねえ、ミシエール」

「は、はい」

心なしか頬を染めて振り返ったミシエールに、シャルルは視線を戻した。

「ユーリは、明日には話ができるようになるかな？」

「おそらくは……。明日もお辛いようなら、治癒をかけますか？」

「お願いするよ」

リアーナの性格をよく知る彼女にしか、この仮説を裏付けてもらうことはできない。
でも。

ただの感情という部分では、シャルルはとくに確信していた。
クロードに限って、いくら恋仲でも正式に妻になっていない女性
に手を出し、孕ませるなどという大それたことなど、できるわけが
ないのだ。

弱々しいほど優しい、あの青年には。

第十二章 友人（1）

これは仮説だけれどと前置きされて説明された事柄を、ユーリは頭の中でじっくり吟味した。

そして、出た結論は。

「……リアーナは、家族思いの優しい娘でした」

彼女は勉強の傍ら、幼い弟妹や老いた両親の世話をおろそかにしなかった。芯が強く働きの者で、優しい娘だったのだ。

自分がいやになる。いくら体調が悪かった時期とはいえ、彼女のことを一番わかっていて、一番最初に気づかなければならなかったのは自分だったろうに。

そうすれば、二日も無駄にすることは、なかっただろうに。

「私の責任です」

そろそろ客がまばらになった食堂の、同じテーブルの向かい側にいるシャルルに、ユーリは頭を下げた。

「何が？」

「私が最初に気づいていたなら、シャルル様達だけでも先行できました」

そうしたら、きっとミシェールの力で今頃リアーナとクロードを発見できていたのではないだろうか。

唇を噛むユーリの耳に、溜息のような音が届く。

「ユーリ」

呆れたような、それでいて穏やかな声は。

「それは、思い上がりだよ」

予想もしなかった辛らつな言葉を紡ぎ出して、一瞬ユーリは何を言われたのか理解できなかった。

「君一人で事態が進んで、片付くなんて馬鹿なことがあるわけがない。責任感が強いのは美德だけれど、一歩間違えれば周りを軽視することになるよ」

「そんな、軽視だなんて」

「そういうことじゃないのかい？ 今の言葉は」

ユーリは茫然とし、次いで赤くなった。

シャルルの指摘は、正しい。

「君はずっと、そうやって何でも一人で背負ってきたんだね」

だからこそ、彼の声の優しさに泣きたくなった。

自分が情けない。

「でも、今こうして旅をしている間だけでもいいから、もう少し私達を頼ってごらん」

おずおずと、ユーリは顔を上げる。

榛色の宝石が、包むように温かく自分を映し込んでいた。

とてもとても、それは綺麗で。

「ユーリ、ほら」

榛色は、不意に背後に向けられる。それを追っていった先に、ユーリは自分の従者の姿を見つけ出す。

エルヴェはなにやらミシエールと話しながら、荷物の準備をしているところだった。熱心に真面目そうな様子はいつもの見慣れたものだったが、何かが違うとすぐに察せられる。

何だろう。何かが。

「あ……」

ミシエールが、目の前の袋の一つに入れていた水筒がふとした拍子に落ちそうになった。ユーリが思わず声を上げたときには、すでにエルヴェが動いている。

「ごめんなさい。ありがとう」

「ずいぶんいっぱいだな。何が入っている？」

「こっちは、着替えとかです」

「なら、水筒はこっちに纏めた方がいい。それから……」

端で見ているだけでも、そんなやりとりから二人がずいぶん親しげなことがわかる。いったいいつの間に仲良くなったのか不思議ではあったが、ユーリは思わず目を伏せた。

あんなエルヴェは、見たことがない。
一度も。

「面倒見のいい人で、こちらも助かっているよ。ミシエールによく
してくれて嬉しい」

にこやかに二人を見つめて、大公は言う。

「今まで友人というものを持ったことがない人だから、できたらこ
れからも仲良くしてくれるといいのだけど」

友人。

ユーリは、シャルルに見えない位置で拳を握る。

ユーリの私塾に入って間もない頃、エルヴェはよく同年くらいの
青年達と一緒にいたように思う。

そんな光景を目にしなくなったのは、いつからだっただろうか。

第十二章 友人（1）（後書き）

シャルルはきついけど優しい人。

第十二章 友人（2）

「おい、シモーヌ！」

入り口が大きく開け放たれ、宿の主人の大声がユーリの思考を吹き飛ばす。

「何だいお前さん、お客さんがまだいるのに」

「ああ、そうか。どうもすまんです」

小太りで人の良さそうな主人は、妻に窘められてぺこりと頭を下げる。素朴な仕草につい笑みが浮かび、ユーリは気にしないでほしいと首を振った。

「買い出しごろうさん、どうだった？」

主人が床に置いた麻袋を、主人よりよほど軽々と持ち上げながら女将は尋ねていた。

「いやあ、駄目だな。また砂糖の値が上がりだしたぜ」

赤ら顔をさらに赤くして、主人はふうふうと息を切らせている。

「北の方じゃもっと上がってるって話だが、困ったもんだよな」

「ほんとにねえ。早いとこ何とかしてほしいもんだよ」

「期待できたもんじゃねえよ。王様がまだ子供だから」

最後の一言で、ユーリははっとシャルルを振り返る。

「事実だよ」

かつてこの国を治め守っていた青年は、静かに微笑んでいた。

「そして、私の責任でもある」

「そんな……」

否定しようとしたユーリだが、結局ナニを口にすることもできなかった。

シャルルの眼差しが、強すぎて。

「あんな幼い子に、すべて押しつけてしまったんだからね。……仕方ないことではあったけれど」

言葉は平静だった。表情も、いつもの穏やかな彼のものだった。

でも。

ユーリは、見てしまった。

「今回のことは、その贖罪の一つでもあるんだよ」

震える指先を、彼がそっと自分の掌で覆い隠す様を。

「クロード達を探すのと一緒に、砂糖の問題も調べて……できれば、解決させたい」

「必ず」

思わず飛び出した言葉に、シャルルだけでなくユーリも驚いた。しかし狼狽えることはなく、彼女はしっかりとうなずく。

「必ず、解決させましょう。どちらの問題も」

見開かれていた榛色が、ゆっくりと瞬きする。そこによぎる感情の色はすぐに消えていったけれど、ユーリにはそれで十分だった。

この人もまた、一人で何かに耐えてきたのだと理解するには。

「ありがとう」

その一言もまた、初めて耳にする響きで。

ユーリはなぜだか、ひどく安心した。

それにしても、と、彼女は頭の片隅で考え始める。

砂糖の産地は、主にバラティエ伯爵領だ。しかも、伯爵家にしか伝わらない精製の魔術を使わなければ、上質の砂糖は作れない。いわば、ほとんどの利益を伯爵家が独占しているようなものだ。

この時期になって急に砂糖が高騰し始めた理由として考えられるのは、伯爵が突然野心を起こして、さらに莫大な利を得ようとしているという可能性だろう。今までだって、そうしようと思えばできたことだ。

それが、『今』であるのはなぜか。

「……どうしたの、ユーリ？」

「え？」

よほど難しい顔をしていたのだろうか、シャルルが心配そうに自分を窺っていて、ユーリは頬を染めた。

「いえ、なんで今砂糖が値上がりしたのか。どうして今なのかを考

えていたのです」

「ああ、なるほど」

「ただでさえ砂糖は、伯爵の利益独占に近いんです。適正価格だったから今までは問題にならなかったようですが、それだって十分潤沢な利があつたはず。不可解です」

「確かにね。どうして今なのかという点は、王の代替わりという不安定な時期に乗じてだと考えることもできるけれど」

「ええ……」

シャルルも、腕を組んで考え込んでしまう。

そもそも値上がりが始まったのは、正確にはいつ頃だったろうか。「私の住んでいる地方で動きが見られたのが確か……二月前」

北では砂糖が貴重品なのだ。少しでもおかしいことがあれば、顕著に表れる。

甘いパンが作れなくて売り上げが落ちたと、領内のパン屋から陳情が来ていた記憶もある。

甘いものはすぐに身体の力になってくれるし、ちょっとした疲労を癒やす薬でもある。ユーリも困っていたのだが……。

「ん？」

何か、引つかかった。

甘いもの。

甘い。

——甘いもの万歳。

自分の後ろで大きな音がして、初めて椅子を蹴って立ち上がって
いたことに気づいた。

「ユーリ様？」

「どうなさったの？」

ちようどやってきたイヴェットが驚いた声を上げていたが、意識を向けてやる余裕もない。

リアーヌ。

彼女が研究していたのは。

そして、突然の半月前の失踪と、不可解な砂糖の高騰。

「砂糖だ……」

「え？」

シャルルが首をかしげる。その彼に、ユーリは詰め寄っていた。

「砂糖なんです！ 中心にあるのは、砂糖なんです！」

第十二章 友人（2）（後書き）

ユーリの灰色の脳細胞が仕事しました。

第十二章 伯爵

リアーヌの残した謎の言葉を、シャルルは吟味してみる。

そして、何より重大なのが、ユーリを襲った謎の男の一言だ。

『おとなしく手を引けば、あの二人にも危害は加えない』

「やはり、バラティエ伯爵の配下の方です」

一度は村の警備隊へつきだした男に、シャルルは面会を求めた。

男をミシエールによく観察させた上で、描かせた（・・・）結果が予想を裏付ける一幅の絵画だ。

「でも、これでは証拠にならないからね」

シャルルは、絵を前に腕を組む。

「証拠にするためには、ミシエールの力と存在を公にしないとならないし」

「それでは将来的によくありません」

間髪入れずにそう言ったのがエルヴェだったので、シャルルはつい嬉しくてにつこりした。ミシエールはほんのり頬を染め、フレイは不思議そうにそんな彼らを見比べている。

しかし、そんな周りの空気には頓着せず、エルヴェはあくまで淡々としていた。

「彼のためだけでなく、政局にも混乱が出るのでは？ バラティエ伯爵と言えば、確か古参の重鎮だったと記憶しております」

「うん、現財務卿だ」

家柄も古く、今代の当主は特に忠誠心の厚さで知られている。シャルルも助けられたことが何度もあるし、信頼を置いてもいた。

「そうだね、強いて欠点というか、困った点を挙げるとすれば……その忠誠心だろうね」

「なぜですか？」

「……過ぎた忠誠は、何かをねじ曲げるから」

尋ねたイヴェットに、答えたのはシャルルではなく。

「そうですね、シャルル様？」

どこまでも静かなエルヴェの眼差しから、シャルルは何か彼を変えたことを悟った。

「ああ。その通りだ」

そうして、こっそり横目で窺った先のユーリが、今の彼を前にしても動揺を見せていないことに心底安堵し、喜んだ。

「私が退位することに、最後まで反対したうちの一人だった。評価してくれたことも、そう言ってくれたことも、嬉しくはあったけれどね」

当時のことを思い出し、シャルルは目を細める。

「直接会って、談判するのが一番いいかもしれないね」

「シャルル様」

「彼なら――腹藏なく話して、穏便に片をつけるのが一番いいと思うんだ。この絵を見せても、彼なら」

オーランシュ公爵家のことも、ブラン一族についてもよく知っている伯爵なら。

「彼なら、わかってくれる」

ミシエールが、ぎくりと身体を強ばらせる。安心させるように頷きかけたものの、彼の青ざめた顔色を元に戻してやるまでには至らない。

シャルルとしてもあまりミシエールの力をおおっぴらにはしたくはないが、他に伯爵を動かせるような切り札を持っていないのも事実だ。

「とにかく、行ってみよう」

シャルルの迷いを断ち切るように、強い口調でフレイが言った。

「それと、こういうのはどうだ？」

「え？」

妙に自信ありげな表情で黒髪の騎士が持ち出した提案に、その場の全員が目を丸くした。

第十三章 背中を、

うまいことに、伯爵の屋敷は林に隣接していた。

素早く馬から下りて、ユーリはまばらな枝の隙間からその向こうを窺う。

思いの外時間がかかって、ここまで来るのに三日もかかってしまった。幸いと言うべきか、あの宿での襲撃のようなことはなかったのだが、それが不安を煽りもする。

伯爵は、二人の男女の命を以てすべてを封印するつもりではないか、と。

「ユーリ様」

エルヴェが、密やかに隣に並ぶ。ふわりと肌を撫でた彼の温度を、こんなに静かな気持ちで受け入れられる日が来るとは思わなかった。それは、先刻近隣の街で一人宿に残してきたイヴェットに対してと同じことだ。

『お姉様』

綺麗な顔と髪を灰汁で汚し、簡素ななりをした妹は、不安を必死で緑の瞳の中に押し隠そうとしながらユーリを見上げてきた。

『どうか気をつけて。危なくなったら逃げてきてね』

彼女は強くユーリの手を握りそう言って、エルヴェには一度無言で頷きかけただけだった。

いったい、自分が伏せていた間に何が彼女を変えたのかはわからないが、その変化は決していやなものではない。

それにむしろ、本来の妹の姿がきつとこうだったのだろうとも思えた。母親の言葉を真に受けて、それが唯一の方法だと必死である風に振る舞っていたのだ。

——恋しい人に、振り向いてもらうために。

「エルヴェ」

本当は、チョーカーを外すべきなのだろう。自分の本来の声で、

伝えるべきなのだろう。

でも、そうしたらきつと、彼を迷わせる気がした。

「これが片付いたら、お前は王都に残れ」

「ユーリ様？」

まったく以て自分は、臆病でずるい。

彼を、直視できない。

「フレイ様も、面倒を見てくれると行ってくださっている。正式に騎士を目指すといい」

「……ですが」

「いつまでも、私の従者などという半端な立場では惜しいからな」
真面目で、頭もよくて、優しいエルヴェ。

彼が真実望む道を、自分はずっと奪ってしまっていた。

弱さのための、わがままで。

「騎士の叙勲を受けたら、好きに生きるといい。私にいつまでも、義理立てすることはない」

「ユーリ様、私は」

「これ以上、私を枷にするな」

強く、遮って。

ようやく、顔を上げることができた。

「一つくらい、主らしいことをさせてくれ」

ずっと彼の重荷になっていた自分の、これは罪滅ぼしだ。

第十三章 対峙

バラティエ伯爵は、遠く東にいますという禿鷲そっくりの容姿をしている。やせぎすで背が高く、眼光が鋭い。

幼い弟が彼を苦手にしていたことを思いだし、シャルルはつい笑いそうになったが何とか堪えた。

「お久しぶりです、伯爵」

「お元氣そうで……大公殿下」

挨拶をした老人の鈍い灰色の瞳が、不意にぎろりとある一点を睨み据える。

彼の座るソファアの、背後に控えていたミシエールを。

「彼をご存じでしたか？」

あえてのんびりした口調で、シャルルは問う。伯爵は視線を戻したが、険しい表情はそのままだった。

「……わしほどの年配であれば、知らぬ者はおりますまい。公然の秘密ではございますが」

膝の上で、老人の骨張った手は強く握りしめられる。

「政敵を屠るための、オーランシュ公爵家の道具。忌まわしき監視者の――最後の末裔でございましょう」

シャルルは直接は答えずに、一枚の紙をテーブルの上に差し出した。

「これは？」

伯爵は、訝しげに紙を手取る。しかし描かれている光景には、僅かに眉を上げただけだった。

その自制心に内心舌を巻き、シャルルは大きく深呼吸する。

腹芸では、自分は伯爵には及ばない。経験が違いすぎる。しかもちろん、初めから承知の上だ。

今、ここで自分がすべきことは。

「この男、ご存じですね？」

ゆったりと足を組み、シャルルは強い眼差しで切り出した。

第十三章 館

「枷だなどと、仰らないでください」

気のせいだろうか。いつも感情の抑揚を見せないエルヴェの声が、怒っているように聞こえる。

「あなたが私にしてくださったことを、そのように仰らないでください」

「事実だ」

彼を振り返らず、ユーリは歩き出す。あまり時間はないのだ、急いすべきことを果たさなければならぬ。

自分たちが遅れるほどに、危険に晒される人がいる。

「……ユーリ様」

エルヴェは、ちゃんと着いてきている。それがわかれば十分だから、ユーリは黙って前に進む。

「この話はまたあとだ」

林が途切れる。強く強く、ユーリは広がる光景の一点を睨みつける。

「行くぞ。リアーヌ達を助ける」

ミシエールが、その『力』で教えてくれたところに依れば、彼女はここにいないはずだ。

バラティエ伯爵の有する広大なフフト畑の、傍らにそびえるこの館に。

「確か、ここで砂糖を精製するのではたね」

エルヴェの声もいつも通りに戻り、それがユーリには何より心強く感じられる。

「代々伝えられた、精製の魔方陣があるそうだ。……確か、右だったか」

「はい」

ミシエールは何十枚も『絵』を描いてくれたが、さすがにそれら

を持つてくることはできなかった。彼の描いた光景、クロード・オリエがリアーナとともに辿ったであろう過去を、ユーリは頭に叩き込んできた記憶から反芻する。

「ユーリ様、ありました。この扉です」

すっかり収穫の終わった畑は見晴らしがよく、人影もない。それでも大きな物音を出すことは憚られ、自然話し声は小さくなる。

「頑丈そうだな」

扉には、当然のことだが鍵がかけられていた。しかも真新しい、頑丈そうな鎖が幾重にも巻かれ、錠が下ろされている。

「壊すのは無理みたいだな」

「無理ですね。鍵を持ってきてもらわなければ」

エルヴェは、ユーリに視線を向けた。

青い瞳は眩しかったが、胸が苦しくなることはなかった。

そのことに少しほっとして、ユーリは彼に小さく頷きかける。

見渡す限り、広大な畑が広がっている。苑向こうにちらほらと見えるのは、ここで働く者達的小屋だろう。そう遠くはない。

「始めるか」

「はい」

ユーリは背負ってきた荷物の中から、藁束を取り出した。

第十三章 奇跡

バラティエ伯爵は、香りを楽しむように半分目を閉じ、紅茶のカップをゆつくりと傾けている。

「では、そのどの馬の骨もしれぬ男が、私に命じられて殿下達を襲ったと、根も葉もない法螺を吹いているというのですな」

受け皿の上でカップがかちゃんと音を立てたときには、伯爵は至って鷹揚に笑っていた。

「まさか殿下、そんなことでこの私の長年の忠誠を、お疑いになったわけではごさいますまいな？」

自信満々の態度は、どこを突いても崩れそうにない。絶対に証拠など出てこない、確信があるのだろう。

それでも、シャルルは食い下がった。

「この男が確かにあなたと接触したのだと、証言してくれる者もいます」

「馬鹿な」

伯爵は、鼻で笑う。そして、傲慢な眼差しをテーブルの上の絵に向ける。

「こんな訳のわからない素描で、私を告発するというのですか？殿下だから耳を傾けもいたしましたが、このように馬鹿な話は聞いたこともない」

まったくとりつく島も、つけいる隙もない。

正面からぶつかったのはやはり愚策だったと、シャルルは臍をかくむ。

だが、こちらにはミシエールがいる。

シャルルは、ちらりと傍らを振り返った。ミシエールも張り詰めた面持ちをしていたが、視線に答えて小さくうなずいてくれる。

そろそろ、頃合いか。

「ところで、今年のフフトの収穫はいかがでしたか？」

突然話題を変えたのを、敗北宣言とでも受け止めたのか、伯爵は軽く眉を上げた。

「ご心配をおかけしておりますが、やはり駄目なようです。氣候に問題はないので、土壌に何か異変があったのか……。こちらで調査は進めております」

「あまり長いこと、このような状況が続くのはよろしくない。ローヌからも専門家を派遣致しましょうか？」

無数の皺の刻まれた伯爵の顔が、ほんの僅かに揺らいだ気がした。あるいはそれは、ただの願望だったろうか。

「それには及びません。この土地のことは、ここで暮らしてきた者の方がよくわかっておりますからな。もうすぐ聖マイヨン祭、何とかそれまでには、問題を解決したいものですが」

「ええ、私もそれを願っています。ですが――」

無意識のうちに、シャルルは拳を握りしめていた。

リアーヌの残していった言葉。

祈るような気持ちで、彼はそれをゆっくりと唇から紡ぎ出す。

「私は信じていますよ。『奇跡^{ミラティ}』を」

その瞬間は、信じられないほどのろろと訪れて、過ぎていった。これまでどんなことをしても変化らしい変化を見せなかった老人の、老獪な表情が初めて明らかな動揺で崩れる。

彼の視線の先を追いかけて、シャルルは自分の口にした光女神の言語が、まさにその通りの事象を導いてくれたことを知り、心から女神に感謝した。

窓の向こう、茂った木々を隔ててぽつんと見える高い塔の屋根をも越えて、黒い煙が勢いよく蒼穹を突いて立ち上っていた。

第十四章 鍵

小作人達が駆けつけてくるまで、そう時間はかからなかった。

「早く水を！」

「ちくしょう！ どこが燃えてるんだ！」

こざっぱりとした服を煤で汚しながら、彼らは懸命にバケツを運び、火元を探して走り回っている。

必要なことだったとは言え、彼らにそんなことをさせなければならぬことには罪悪感を覚えた。

「ユーリ様」

そんな慌ただしい様子を観察していたエルヴェが、喧噪を巧みに縫う囁き声でユーリを呼んだ。

「小作人達の服装、おかしいですね」

「……そうだな」

走り回る人々は、年齢や性別を問わずほとんどが新しい綺麗な服を着ていた。遠目でははっきりしないが、仕立ててから一年も経っていないだろう。

今年是不作ならば、その影響を一番に受けるのは彼らだろうに。

「やはり、伯爵は砂糖の収穫量を偽っていたのか」

「そうでしょう。そしてどこかで、秘密裏に売買があった」

「きちんと下で働く者達へ、報いてはいるようだな」

あるいは、口止めのためなのかもしれないが。

だが、まだこれは推測に過ぎない。ユーリは注意深く、小作人達の動きを目で追いかける。

ミシエールが見通したとおりならば。

きっと彼らのうちの一人二人は、こちらの期待通りに行動するはずなのだ。

火がどんどん勢いを増していく。本格的に館に引火するまで時間がかかるよう計算して藁を撒いたつもりだが、消すのに手間取れば

全焼は免れない。

背中を、汗が伝った。

まだか。

まだ、気づかないのか。

じりじりと、腹の中が熱くなる。

「ユーリ様、あれを」

それを見つけたのは、エルヴェの方だった。

「！ あっちか」

ユーリは立ち上がり、隠れていた茂みから静かに飛び出す。

男が一人、転がるように走っていくところだった。その手に何か硬いものがあるのが、ユーリのいる場所からも辛うじて見える。

「私が」

「頼む」

短いやりとりの直後に。

エルヴェが、風のように走り出す。

「う、うわあっ！」

ユーリがそれに追いつくより早く、彼は男を取り押さえていた。

男の上げた悲鳴は、それ以上に大きく必死なたくさんの叫びに紛れてかき消される。

「手荒なまねをしてすまない」

驚愕と恐怖に顔を引き攣らせる男のそばに駆け寄って、ユーリは早口でまくし立てた。

「手に持っているものを渡せ。館の鍵だろう？」

早く。

早く、しなければ。

「おとなしく渡せば、見逃してやる。お前は虜囚を気遣ってくれたのだからな」

男の目が、大きく見開かれる。日に焼けた頬を、汗が流れ落ちた。揺らぎかけている。

ユーリは確信し、さらに言葉が続ける。

「もう何もかもわかってる。少しでも罪を軽くしてほしいから、
従え」

突き出した手とユーリの顔を、どんどん青ざめていく男は交互に
見つめて。

がくりと力の抜けた身体をエルヴェが解放するのと同時に、男は
ユーリの要求に従った。

第十四章 糾弾

「行かなくてよろしいのですか？」

努めてのんびりした声で問うてやると、伯爵はすごい目つきで振り返った。

「火事は延焼が恐ろしい。あの辺りは、林が広がっていましたね」

「……あなたの差し金か？」

唸るような声音は紛れもない殺気を纏っていて、つい足と心が逃げ出しそうになる。

けれどシャルルは、そんな己を気力で押し止めた。

「早く行きましょう。何でしたら、お手伝いもできます」

ますます表情を憎悪で染めていく老人に、シャルルは奮い立たせた心のままに、微笑んでみせる。

「ミシエール、馬の用意を」

「はい」

伯爵とシャルルを心配そうに窺いながらも、ミシエールは主の指示にうなずいた。

彼が部屋を出て行くのを物音と気配の揺らぎだけで確かめて、シャルルは顔から笑みを消す。

「火事が私の意図なのかと、お尋ねでしたね？」

質問として言葉を投げつけるが、もはや伯爵が答えを必要としていないことは彼にもわかっていた。

「そんなことは望んではいませんよ。私はただ、助けたいだけです」
懸命に何かを守ろうとしている少女と、彼女を手助けしたであろう青年と。

そして。

「あなたのことも、伯爵」

「何を馬鹿な」

老人は鼻を鳴らしたが、彼がシャルルの胃を察していることはそ

の様子から見て取れた。

すべて不問に処する用意があるのだと、伝わっていないはずはないのに。

「なぜですか？」

シャルルは、老人に向かって一歩踏み出す。

「あなたほどの方が、なぜこんなことを？」

フフトの収穫量をごまかし、不正に売りさばき利益を独占した。

その証拠が確実に出ることは、ミシエールがすでに見通している。これが表沙汰になれば、伯爵は何らかの罪に問われ二度と公の世界には戻ってこられない。

それがわからない人ではないのに。

「なぜ、と問われるか」

老伯爵は、泰然とした態度を取り戻していた。そうして、真っ直ぐシャルルを見返す。

あからさまな侮蔑を、彼はその中に見出して息を吞んだ。

「私こそ問いたい。なぜ、あなたはあの者をそばへ置くのか」

抑えられた声だったが、名状しがたい暗い感情がそこから今にも溢れそうだ。

「最後のオーランシュ公爵——あのフェオドールのしたことを、あなたは知っていたはずだ。それにあの者が荷担していたことも」

反駁は、赦されなかった。伯爵は、じわじわと距離を詰めてくる。

「あなたを、この国の唯一無二の方に害をなそうとした不届き者を、いかに死んだとはいえ不問に処した挙げ句その片棒を担いだ者を従者になどと！ 許されない、赦していいはずがない！」

扉の外から、騒がしい音が聞こえてくる。

「だがなぜかこの国は動かない。だから、この私がやるしかないでしょう」

身体が、腹の内が、頭が熱くなる。爆発してしまいそうな衝動を、シャルルは歯を食いしばって抑え込む。

この、男は。

「……そのために、国を混乱させたのですか」

「むろん、そう大きな波風は立てたくなかった。塩ならばともかく、砂糖なら多少流通が滞ったとしてそれほど大事には至らない。しかしそれで、他ならぬあなたが直々に足を向けてくださるとは」

口の中に、鈍い味が広がる。

大事ではない、などと。

「国を乱した事実には、大小など関係ない！」

もう、抑えられなかった。

「二年だけとはいえ私が守ってきた国を、そして今も幼い王が守る国を、不当に掻き回して何を言うか！」

「ならばなぜフェオドールの罪は見過ごされた！」

伯爵もまた、激しい声を上げる。

「奴の罪の方が何倍も重い！ 私を罰するというのであれば、奴と奴に荷担したあの者も相応に裁かれるがよろしかろう！」

シャルルは、未だ収まらない怒りを抱えたまま口を閉ざした。

伯爵の言い分は正しい。本来ならば、フェオドールのことが公にされないわけがなかったのだ。

——本来ならば。

「失礼いたします」

緊迫が、扉の外から破られる。

「捕らえて参りました」

その言葉に、シャルルははっと振り返り。

「ミシエール！」

伯爵の部下であろう数人の男達に抑えつけられた、従者の姿を目の当たりにした。

第十五章

このときを想定して、火は館よりだいぶ離れたところで準備した。煙は派手に上がっているが、実際は大した規模ではない。

真っ暗な塔の中を走りながら、ユーリはミシエールの絵を思い出す。

確か、一つ目の階段だった。そこを上がって扉を三つ過ぎ、左側の。

「ユーリ様！」

カンテラを持って先導していたエルヴェが、鋭く叫んだ。

「えっ、ユーリ様！？」

そして上がる、もう一つの声は。

「リアーヌか？」

「ユーリ様！ ああ、ユーリ様っ！」

鉄の扉を激しく叩く音と、記憶にあるとおりの少女の口調。

「今開ける。ああ、そこにクロード・オラニエ殿はいるか？」

「はい、一緒です。クロード様、起きて！ 逃げますよ！」

鍵を開ける間に鈍い音が聞こえたが、ユーリは無視した。それどころではない。

「申し訳ない。助かりました」

リアーヌに引きずられるようにして現れた青年が、礼を述べながら痛そうに片腕をさすっていたのも、気にしないことにする。

「出口は向こうです。急ぎましょう」

「ええ」

クロード・オラニエは黒い髪に青い目の、ひよろりとした優しい人物だった。リアーヌをかばうようにその肩を抱いて走る彼を真ん中に、エルヴェが再び先頭に立ちユーリは殿を務める。

喧噪と、光が近づいてくる。目を灼かれるのを覚悟して、ユーリは目を細めてそこへ飛び込んでいく。

風が、迫ってきた。煙の匂いに軽くむせ、ユーリは辺りを素早く見回した。

エルヴェはすでに、カンテラを片付けている。手は剣の鞘を握り、油断なく周囲に気を配っている。

リアーヌは少し薄汚れていたが、健康にはまったく問題なさそうだった。だがかなりの時間監禁され、その前には長く逃亡生活を続けていたせいでやはりやつれていた。

そして。

「ありがとうございます。すぐにここから移動しますか？」

しっかりと彼女を支えて、物怖じしない眼差しでユーリを見つめてくる青年は。

「……」

ユーリは、まじまじと彼を観察した。

もの柔らかな仕草と、聡明そうな瞳。ゆっくりと話す、その声。初めて目にする気が、しない。

「どうかしましたか？」

「え？」

怪訝な表情で首をかしげるクロードに、ユーリは我に返る。

「ああ……失礼。すぐに動けますか？　もう一つ、行かなければならない場所があります」

「わかりました」

クロードは一瞬煙と小作人達の騒ぎに目をやったが、リアーヌを抱きかかえてうなずいた。

ユーリはとにかく頭を切り換え、エルヴェとともに再び彼らを連れ、走り出した。

第十五章 秘密

もがくミシエールの唇が動きかけるのを、シャルルは素早く目配せを送って制する。

伯爵はそれをどう受け止めたのか、もとの泰然とした態度を取り戻していた。

「フフトの方は、すでにお仲間が見つけ出しているでしょう。オラニエの小せがれも一緒に」

鋭い憎悪の眼差しは、ミシエールに一瞬だけ向けられる。

「私を告発するのなら、むしろ本望です。ですがその場で、私もやはり公言いたしましょう。フェオドル・オーランシュの罪を」

低い、しわがれた笑い声。ミシエールが蒼白になり、訴えるような眼差しがシャルルの心を驚づかみにする。

悲しみと、恐怖とで。

シャルルは、硬く目を閉じた。高ぶっていた感情はすでに落ち着きを取り戻していたが、伯爵の意思を変えさせるための、有効な方法を教えてはくれなかった。

たった一つしか。

「――あなたの忠誠には、本当に頭が下がります」

ゆっくりと、シャルルは瞼を上げる。紛れもない本心ではあったが、滲み出す苦渋を隠すことはできなかった。

「ならば、私もまた明らかにしなければならぬ秘密が、一つある」
これは、賭だ。

鼓動が騒ぐ。ミシエールの力を以てしても、今の自分の行動がもたらす未来は見通せない。彼の力は、三日以上先のことやあまりに多くの人間に影響を及ぼす事象は予期できないのだ。

だから、信じるしかない。

自分を、伯爵を、そしてこの国を。

「なぜフェオドルを不問に処したか。答えは簡単ですよ。彼は、

本当は王家へ何一つ危害を及ぼさなかったから」

「何を馬鹿な！」

伯爵の声が、再びうわずった。

「いかに未遂とはいえ、そんなことを企むこと自体が罪だと私は言っているのです！ 我らが仕えるべき唯一無二の血統、絶対の主に対して、弑逆など赦されることでは……！」

「もし、その血統とやらに連なっていない王ならば？」

シャルルの言葉は、決して大きくはなかった。なのに伯爵は、石のように固まって何もかもを止める。

大きく息を吸い込み、シャルルは続けた。ここから先は一気に口にしてしまわなければ、とても耐えられそうにない。

心が、挫けてしまう。

第十五章　そして

「昔第一王子が生まれて間もない頃、大病を患って生死の境をさまよった。誰もが一時期絶望したのに、奇跡は起きて国は歓喜に包まれた。その後まったく、王子は健康に何の問題もなく元気に育っていったけれど、そんな恩恵をもたらしたであろう者が誰だったのか、どんな方法を使ったのか、ついに明らかにされることはありませんでした」

石像と化していた伯爵の顔が、人としての色を取り戻す。そこに浮かんでは消えていく感情を、シャルルは痛ましく見守った。

「そんなことがあったから、誰も疑問に思わなかったのでしょうか。至って健康だったその王子が、即位して二年で大病を患い退いて、また嘘のように快復したという話を」

「何を……」

疑念から、驚愕へ。そうして今は。

伯爵が、一歩後ずさった。

「クロード・オラニエに会っているのでしょうか？」

シャルルは、数回しか彼と言葉を交わしたことはない。それでも、気かけなかったことはない。

父親の男爵が息子を見つめる様が、好きだったから。

男爵の榛色の瞳が、愛情を湛えて柔らかく細められる様が、いつも喻えようもなく優しかったから。

「あるいは今回動いていたのが、クロードではなく兄の方だったら、あなたも気づいていたかもしれませんね」

がくりと、伯爵が膝をついた。ミシエールを未だ捕らえたままの男達も、心なしか青ざめて互いに顔を見合わせている。

これ以上、続ける必要はない。

シャルルは、男達に向き直った。

「彼を離してくれないかな？」

彼らは狼狽えて一様に視線を彷徨わせていたが、やがて一人が動いた。そうするとあとは容易く、自由になったミシエールは乱れた髪もそのままにシャルルに駆け寄ってきた。

「怪我はない？」

「僕は平気です。でも……」

紫の瞳が潤み、頬を紅潮させているのはいったいどんな想いのためなのか。

シャルルは優しく頷きかけ、彼の肩を軽く押しやった。

「いいんだよ。大丈夫だ。早くみんなと合流しよう」

シャルルは、振り返らなかった。

「……なぜ、そんなことを」

呪詛のような伯爵の言葉が、追いつがってきてても。

「なぜ……なぜ、私には知らせてくださらなかった。ロイス三世陛下も、あなたも」

彼の声が、やるせない湿り気を帯びても。

「――あなたが、そのような方だからですよ。三世陛下も私も、口に出せなかった」

ついに呻きは、嗚咽めいた唸りに変わる。氣遣わしげなミシエールを押し留めて、シャルルは静かに背後の扉を閉めた。

第十六章 リアース

フフトが山のように積み上げられている。リアースとクロードに案内されて倉庫に入ったユーリは、まずその膨大な量に圧倒された。

「こんなに……」

「魔術で保存していますから、質には問題ありません。恐らく二年近く前から備蓄してきたのではないかと」

「それにしたって、こんなにか？」

「ええ」

信じられずに聞き返したユーリに、クロードはあっさりうなずいた。

「収穫量自体、元々かなり多いんです。王都で消費される上質な砂糖の九割方は、ここで産出されますから」

さすがにそんなことまでは知らなかった。ユーリは啞然としたまま、フフトの山に向き直る。

これだけの量が流通を止めていたのだから、影響が出るのは当たり前だった。まして聖マイヨン祭での砂糖消費量は相当なものだから、供給が滞れば神殿行事とはいえ取りやめは免れなかっただろう。

「ユーリ様」

リアースが、後ろに立った気配がした。

「一カ所だけが供給を賄うから、こんなことになったんだと思います」

「そうだな」

ある予感を胸に、ユーリはゆっくりとリアースを見やる。

少し髪が短くなって、覚えているより痩せたようだ。けれど、笑顔の輝かしさに胸を突かれて、ユーリはほうと溜息をつく。

もともと美しい少女だった。だが、今零れんばかりの喜びを隠さず顕して立っている様はどうだろう。

「私、昔からずっとそう思っていました。それと一緒に、農業がほ

とんど出来ない私の故郷が、新たな砂糖の産地になればどれだけ豊かになるだろうって、ずっと夢見てきたんです」

リアーナは、そっと胸元に手を当てた。何かとても神聖な存在を見るようで、ユーリは目を細める。

「何より、私に力を貸してくださって、夢を叶えるためにいろいろしてくださったユーリ様に、恩返しをしたかった」

「リアーナ……」

エルヴェが、彼女の名を呟く。その表情がとても複雑な色を浮かべていて、ユーリは少し驚いた。

彼はユーリに視線を寄越し、次いでリアーナに目を移す。彼女はそれを、真っ直ぐに受け止めていた。

「『奇跡』を」

魔法のようなその言葉が、場を満たす。

「見せてやってくれ。ユーリ様に。持っているな？」

「もちろん」

強くうなずいて、リアーナは服の胸元に手を入れる。ごそごそと引っ張り出されたのは、ひもで首から提げた小さな袋だ。

「苗は取られてしまいましたけど、これだけは守れました。クロード様が『隠行』という術をかけてくれたおかげです」

クロードの名を口にした一瞬、リアーナは彼を振り向いた。クロードは優しい笑みを浮かべ、彼女の様子を見守っているようだ。

はっとした。

何か、信じられないことが起きている気がする。

鼓動が高鳴る理由が驚きなのか恐れなのか、それとももっと違う何かのせいなのか、ユーリには判断できなかったけれど。

第十六章 もう、二度と

「これを、ユーリ様に」

いつの間にかリアーナがすぐ目の前に立っていて、ユーリは我に返る。

「私達の故郷でも、育てられます。どうか、ユーリ様の手で広めて、根付かせてください」

ユーリは、掌にのせられた袋の口をゆっくりと開いた。中からこぼれ落ちたのは、本当に小さく細かな黒い粒がいくつか。

——そしていつの日か、きっと帰ろうと思います。私の大切な故郷に、十分に育った奇跡を連れて。——

そろそろと、視線を持ち上げる。エルヴェ、クロード、そしてリアーナへと移動させていく。

——今は私一人で生み育てなければならぬけれど、きっとそれが故郷の地を甘く潤してくれることを、信じています。——

これが何なのか、わかった気がした。

「……新しい砂糖の原料の、種なんだな？」

「はい！」

何の番狂わせも、間違いもなく。

リアーナはいつそう明るく美しく微笑んで、涙ぐんだ眼差しでユーリを見返した。

「ユーリ！」

シャルルの声と、複数の足音が飛び込んでくる。

伯爵の方は、どうなったのだろうか。

気にはなっただけで、まずは言わなければと思った。

「シャルル様……」

種を握りしめて、ユーリは駆けてくるシャルルを振り向いた。
今更のように、胸も喉も熱くなった。足が震えて、立っているのも難しい。

「なぜ殿下がここに？」

クロードが驚いたような声を上げた。シャルルはそれに応えて、ひどく柔らかな表情をする。

「砂糖のことを調べていたのと、君達を探してね」

「そんな、殿下御自ら……」

「オラニエ男爵に、息子を失う悲しみを味わせたくなかったからね」

クロードは恐縮した様子で膝を折り、シャルルのことを知らないはずのリアーヌも、彼に倣って頭を下げている。

そんな二人には、聞こえなかったかもしれない。

「……もう（・・）、（・・）二度と（・・）ね」

シャルルが、小さくそう呟いたのは。

第十六章 風

「とにかく、戻ろうか。ミシエール、フフトを少し持っておいで」
「はい」

積み上げられたフフトの山から、ミシエールは一握りほどをつかみ取りハンカチに包む。これを持って帰って、宰相に見せた上で事後のことを決めようと思う。

なるべく、穏便に。

リアーヌの悲鳴が聞こえたのは、そのときだった。

「シャルル様！」

ミシエールが警告を飛ばし、シャルルの前に立ちはだかった。

「ここもばれてしまっておりましたか。それとも、その穢れた血族の末裔が見抜いたのですか？」

しわがれた、感情の抑揚に乏しい声音。

外からの白い光を背負い、黒い影の集団が一糸の乱れもない動きでばらばらと散開する。

「伯爵……」

人影の中から現れた老人を、シャルルはやるせない思いで呼んだ。

「その小娘は、ほとぼりが冷めた頃解放してやるつもりでしたが、こうなれば致し方ありませんな」

「口封じ、ですか？」

前に出ようとしたシャルルを、ミシエールの腕が止める。その肩に軽く触れてやり、シャルルは続けた。

「私達がここへ向かったこと、その理由も含めて、国王陛下や宰相閣下はご存じです。もしこの伯爵領で我々の消息が途絶えたら、直ちに調査の手が伸びるでしょう。砂糖のことも含めて、あなたのしたことは確実に明るみになる」

「それがどうしましたか？」

せせら笑う響きに、シャルルは思わず肩を震わせる。

光と闇に慣れてきた目が、ようやくそれを教えてくれた。

自分を睨む伯爵の、異様な眼光。

「これまで、お前などに尽くし仕えてきたのかと思うと、腹立たしいばかりだ。国を、我らをたぶらかしてきた偽王が」

周りの気配が、硬直するのを感じた。ミシエールが飛び出そうとするのを、腕を掴んで引き寄せる。

「シャルル様……」

「いいんだ。事実だから」

自分でも驚くくらい、心は凧いでいた。

伯爵の言葉もその憤りも、正しい。その裏にどんな事情があったにせよ、自分は伯爵を――国のすべてをだまして生きてきたのだから。

シャルルは、足に力を入れ直す。伯爵の視線は、ただ自分にのみ注がれていた。

ゆっくりと息を吸い込んで、彼は再び口を開いた。

「全員をどうにかする必要があるでしょう。彼らが何を申し立てても、身分があなたを守ってくれるのだから」

「シャルル様！」

意図を察したのか、ミシエールがすがりついてきた。彼を見ないままその背中に手を当てて、シャルルは首を振る。

「いいんだ」

「でも……！」

「いいと言っている。放せ」

努めて冷たく命じる。ミシエールの身体がびくりと痙攣し、触れる腕が小刻みに震えだす。

胸が締め付けられるのを覚えたが、シャルルは意を決して細い身体を突き放した。

「あなたの恨みを、正当に晴らせばいい」

そのまま、前に進み出る。

振り返らずに、老人の姿だけを視界に収めて。

「殊勝な心がけだな」

嘲笑を、間近から浴びせられた。

「いいだろう。確かにその馬の骨どもが何を喚こうと、まともに聞く者などいはいないだろうからな」

嘘は感じられなかったが、容易に信じ切るほどシャルルはおめでたくない。

だから、言った。振り返らないままで。

「ミシエール。みんなを頼むよ」

彼が、持ちこたえてくれさえすれば。

自分以外の皆は、助けられる。

「シャルル様、駄目です！」

独特の響きを持った、ユーリの声が悲鳴を上げている。

できることなら、彼女自身の声を、言葉を、聞いてみたかった。

影達が動く。伯爵が、ぎらぎらと目を光らせて小さく手を上げる。

振り下ろされたときが、きっと最期だ。

何も考えないように心を抑えつけて、シャルルは静かに目を閉じる。

闇。

風が、頬を撫でた。

第十七章 惑い

影達が、次々と吹き飛ばされ、あるいは地に打ち倒されていく。何が起きたのかユーリにも理解できていたわけではなかったが、身体は先に動いていた。

「こちらへ！」

エルヴェが促すのに従って、リアーナを抱え込みフフトの脇へ移動する。

何にも邪魔されることなく。

だから、信じられなかった。

煽られ叫ぶ男達を翻弄する、あり得ないほどの強風が。

「ぐぬ……貴様！」

ただ一人、バラティエ伯爵だけが風に向かい立っている。服の裾や白い髪がやはり大きくはためているが、他の男達のように吹き飛ばされないのは、自身の周りをなにがしかの方法で守っているからか。

「僕の主に危害を加えるおつもりであれば、これ以上黙っているわけにはいきません」

風を中心に、凜と言い放ったのは。

「ミシエール……！」

やはり風に侵されない場所から、シャルルが茫然とその名を呼んだ。

「な……にを、君は」

「お叱りは後でいくらでも受けます。ここは抑えておきますから、ユーリ様達を連れて外へ出てください」

ミシエールの視線が、ユーリの方へ向けられる。はっとしたが、彼は黙ってうなずいただけだった。

「大丈夫ですから。ここから出てください」

いつの間にか、影の男達は姿が見えなくなっている。ミシエール

の力に屈したのか、恐れをなして逃げたのか。

いずれにせよ、今が好機だ。

懐に入れていた絵の一枚に、ユーリは服の上から触れた。

もう一つ、迎えなければならぬ未来がある。

だからこそ、ここにフレイはいないのだから。

「行こう」

ユーリは、その場の全員に聞こえる声で言った。

「シャルル様、早く！」

ことさら強く呼びかけると、シャルルの背中に震えが走った。

「だけど、ユーリ……」

「大丈夫です。任せましょう」

それでも彼は、まだ迷いを拭い切れていなかった。意を決して、ユーリは彼に駆け寄る。

「迷うことなんか少しもない。あなたは何も悪くない」

本当は、何が彼を惑わせているのかを理解していたわけではなかった。

それでも、そのとき口にできたのはそんな言葉だけで。

「あなたという人を否定する要素が、身体の中の赤い水だけなんて理屈に、屈しなければならぬいわれは少しもない！」

高ぶる感情のせいで、頬が火照っている。

何も考えていなかった。理性で判断できなくなっていた。

「ユーリ？」

伸ばした手がシャルルの腕を掴んでいても、その事実が持つ意味すらも、ユーリはわかっていなかった。

第十七章 榛色

「早く！」

そのまま走り出す。エルヴェとリアーナ、クロードも着いてきているのを、目の端で確かめた。

「ま、待て！」

伯爵のそばを通り抜けようとしたとき、呻くような声が追いつてきた。腕が伸ばされてはつとしたが、ミシエールの反応の方が早い。

「う、が……あ！」

押しつぶされた悲鳴が、ユーリの胸を抉っていく。足が止まりそうになったが、最後の最後で踏みとどまった。

「ミシエール、駄目だ！ そんなことをしたら——！」

「手加減しています。大丈夫です」

蒼白なシャルルに応えたミシエールは、いつも通りの穏やかで優しい様子を少しも乱してはいなかった。

「何も心配いりません。クロード様の『隠行』を解けなかった人が、僕に勝てるわけがない」

だから、なおのこと。

淡々と言い放たれた言葉が、ぞっと背筋を撫でていった。

「……シャルル様、一刻も早く離れましょう」

心なしに狼狽えて、エルヴェが素早く囁いてくる。

「ここでぐずぐずしている分だけ、伯爵閣下の負担が増すかと」

「……わかった」

シャルルは力なくうなずいて、這いつくばる老人に一瞥を投げかける。そして踵を返して走り出し、今度はユーリが彼に引きずられる格好になった。

外に出るまであっという間だったはずなのに、ずいぶん長い時間がかかった気がした。

「ああ、びっくりした」

大きく息を吐き出すリアーヌの声は、言葉と裏腹にどこか暢気だった。

それで少し、ユーリも落ち着きを取り戻す。

「しかし、これからどうしましょう？」

真っ先に頭を切り換えたのは、クロードだった。

「フフトは見つけたし、証拠にもなるでしょうが、王都から調査隊が来る前に処分されたりしたら不利です」

王都は遠い。しかも伯爵に地の利がある以上、ここにいる全員がいくら気を配っても隙を突かれる可能性は十分にあった。

「わかつている」

ユーリは、シャルルに向き直った。彼はまだ幾分青ざめていたが、落ち着きを取り戻しているようだった。

「まだ火事は治まっていないようだね」

やや離れたところに上がる黒煙に目をやり、彼は懐を探る。ユーリは足下の枯れ枝を拾い上げ、湿っていないことを確かめた。

「原始的だけど、やっぱり一番有効な合図方法だろうね」

差し出した枝の先に、シャルルは火打ち石を近づけて勢いよく打ち合わせる。たちまち燃え始めた枝を、高く掲げて振り回す。

「リアーヌ、クロード殿。枯れ草を探して集めてくれ」

火が消えないうちにと、ユーリは立ち尽くしたままの二人に指示を出す。彼らははっとして、すぐに動いてくれた。

懐にしまつてある絵の光景を、ユーリは脳裏に思い浮かべる。

空を目指す煙と、その下に広がる林。伯爵の館とフフト畑につながる小道を、馬が連なって疾駆している。

ミシエールの視た未来が本物なら、もうすぐそれは形となってここへ現れるはずだった。

「ユーリ様」

祈るような想いを、エルヴェが控えめに中断する。彼の指さす先を見やり、ユーリの膝は砕けそうになった。

「大丈夫か!？」

大きな馬の背に、危なげなく跨がり手を振る人影がある。黒い髪に黒い衣装の。

フレイだ。

「お姉様!」

彼にしっかりとしがみついて馬の前に乗っているのは、イヴェット。馬が苦手なのに、絵に示されていたとおりここまで着いてきたらしい。

そして。その後に続くのは。

「怪我はないか? 悪い、少し遅れたな」

「問題ないよ。すべて予定通りだ」

騎士に鷹揚な笑みを見せるシャルルの傍らに、素早く駆け寄って膝を折る二人の新たな人物を、ユーリが目にするのは初めてだった。「殿下、遅参いたしましたして誠に申し訳ございません」

黒い髪に少し白い色が混ざってはいるが、まだ老いた印象のない壮年の男と。

「バラティエ伯爵の不正、確かに書面により承りましてございます」息を切らしながらも、辛うじてそう述べる小太りの老人。

黒髪の男を凝視していたクロードが、目を大きく見開いて茫然と呟いた。

「父上……?」

それを耳にしてぎろりと彼を睨みつける男こそ、ジェルマン・オラニエ男爵なのだ。

「殿下、失礼いたします」

かつては凄腕の騎士として勇名を馳せたという男爵は、すらりと立ち上がったかと思うと一足飛びに息子との距離を詰めた。

次の瞬間。

乾いた高い音が林に響き渡り、それに驚いたらしい小鳥達が一斉に飛び立ちさわさわと木々を動揺させた。

「この、馬鹿者が!」

頬を打たれて倒れたクロードを、男爵はさらに怒鳴りつける。

「どれだけ、迷惑と心配をかけたと思っている！」

拳も肩も、身体中をわなわなと震わせて。

顔を歪めて、腹の底から想いを吐き出す彼の肩に。

「……男爵」

ひどく弱々しい表情で、シャルルが手を置いた。

呼吸を整えてから、男爵はゆっくりと肩越しにシャルルを振り返る。乱れた前髪の影響からのぞく瞳が、ユーリの位置からもしっかりと見えた。

榛色。

木々が、騒ぐのをやめる。静寂が戻ってくる。

「……感謝いたします。シャルル殿下」

身体の向きを直し、再び男爵は臣従の礼をとる。その後ろで、クロードも同じく膝をついた。

シャルルは、小さく笑みを浮かべる。

「そんなに改まる必要はありません。……当たり前のことを、しただけですから」

気のせいでも錯覚でも、なかったはずだ。

彼が、泣き出しそうだと思ったのは。

第十七章 言葉

バラティエ伯爵は拘束され、今はオラニエ男爵の監視下にある。
フレイとエルヴェもそれを補佐しに行っていた。

シャルル達は、近隣の別な貴族の館に泊めてもらえることになり、今はそこが臨時の会議室のようになっていた。

「……まったく、殿下は無茶をなさる」

まるまるとした顔に汗を浮かべて、苦々しく自分を睨んでくる老人に、シャルルは返す言葉もなかった。

「ご足労いただいて申し訳ない。陛下は大丈夫ですか？」

「ええ。信頼できる者に護衛を任せて参りました。……殿下のご心配が、わからぬ訳ではないのですよ」

溜息をつく老人を、ミシエールが心配そうに見ていた。

「けれど、あなたが来てくれたからこそ、此度のことは隠蔽されずにすみます。アラゴン伯爵」

老人――アラゴン伯爵は、再び深く嘆息する。

シャルルは、にっこり微笑んだ。

「誰も信じないわけにはいかないでしょうからね。宰相の証言なのだから」

実質的に今この国を守っている老伯爵は、もはや苦笑するしかできないようだった。

「……しかし、バラティエ伯爵のしたことは許せないけれど」

組んだ手の上に顔をのせて、シャルルはうつむいた。

「退位するときに、彼には打ち明けておくべきだったのでしょうか」
王位を退いたのは、もちろん血筋のことを考えたからだ。

この国の第一王子は、生まれたときすでに息をしていなかった。
懸命の処置で一時は弱々しいながら産声を上げたものの、数日後には儚く身罷ってしまったという。

当時国勢は不安定だった。隣国から嫁いだ王妃は長く子を産めず、

やっと授かった王子が死んだとなれば、王妃の生国との関係すら危うくなりかねない状況だった。そこで王と近臣達がとった方法が、身代わりを立てることだった。

王子の乳母になるはずだったオラニエ男爵夫人が、無事に産み落とした双子のうち、両親の特徴をあまり色濃く持っていなかった方を、彼らは王宮へ引き取ったのだ。

王子として育てられた子供が成人し、即位するまで、国王をはじめとして守り通してきた秘密だった。シャルル自身、物事の分別がつく年頃になるまで、そんなことは知らずにいた。

だがフェオドルがミシエールの力で秘密を暴いたとき、潮時だと思ったのだ。

憎々しげなバラティエ伯爵の言葉が、耳に蘇る。

——偽王。自分は確かに、偽りの存在なのだ。

「シャルル様」

ふわりと、傍らで風が動いた。頬に触れる優しい感触が、ミシエールの髪だと気づく。

「シャルル様がこの国のためにしてくださったこと、僕にくださったものを、僕達はちゃんとわかっています。僕達が感謝して大切に思っているのは、何よりその事実です」

シャルルは、ゆっくりと顔を上げた。好々爺然とした宰相の、慈愛に満ちた眼差しが彼を見つめて、しっかりと頷きかけてくれる。

——迷うことなんか少しもない。あなたは何も悪くない。——

心の奥から、響いてくる声がある。

——あなたという人を否定する要素が、身体の中の赤い水だけなんて理屈に、屈しなければならぬいいわれは少しもない！——

強く輝いていた緑の瞳、何の迷いもなく自分を連れ出してくれた、

あの手。

不意に、思った。

彼女の言葉を、彼女自身の声で聞いてみたいと。

第十八章 聖マイヨン祭

花火が上がる。楽しい喧噪がひっきりなしに、硝子を通り抜けて部屋の中にまで躍り込んできて、ユーリを落ち着かない気持ちにさせた。

「ほら、お姉様」

早めの夕食が終わってからずっと、ユーリの部屋に入り浸ってリアーヌ共々ともないことを目論んだ妹が、後ろに立って鏡越しにユーリを見ている。とても得意げだが、あんなに髪も服もぼさばさで大丈夫なのだろうか。

そろそろ、時間のはずなのに。

「お姉様は醜くなんかなくてよ。ちゃんと綺麗に見せてないだけだわ」

「そうですよ、ユーリ様」

同じくかなりぼろぼろのリアーヌが、こちらはちゃっかりと自分の支度も調べて胸を張っている。ほんのり頬を染めているのはなぜなのだろうか。

「ちゃんと見て、お姉様」

ぼんやりしていたら、イヴェットが無理矢理ユーリの顔を鏡の方へ向けた。目を閉じてしまいたかったが、それすら計算ずくなのか彼女の指が瞼の縁にかかっている果たせない。

そうして向き合った自分の鏡像に、泣きたくなった。

短い髪を隠すためにかつらが被せられ、それが華美で下品というわけではないが、派手派手しく結い上げられている。目の周りや唇も華やかに彩られて、何かの冗談としか思えない姿がそこにあった。「せっかくの聖マイヨン祭ですもの、これくらいしないと」

「そうですわ。とてもお可愛らしいですよ、ユーリ様」

少女達は口々に言ってくれるが、とてもユーリにはそうは思えない。いつもの男装の方が、よほど似合っているような気がするのだ。

けれど、これからしようとするこのためには、この姿の方がふさわしいかもしれない。

「じゃあ、私自分の支度をしてくるわ。あとでね、お姉様。リアーヌ」

「神殿前広場でお待ちしておりますわ」

せかせかと手を振って出て行く二人を見送って、ユーリは立ち上がった。着慣れないドレスは裾が長いし足に纏い付くしで邪魔くさかったが、歩くのに支障はなさそうだ。

部屋を出る。長い廊下にすら、浮き足だった雰囲気が充満していた。

今宵は、聖マイヨン祭。大切な相手に、甘い甘い贈り物を捧げる日。

ユーリの手の中にも一つ、リアーヌに教わりながら作った焼き菓子に密やかに抱え込まれている。

第十八章 夜闇

すでにもう夜は更けているはずなのに、大通りに配置された松明と露店の明かり、立ち並ぶ家々の灯で辺りはまばゆく輝いている。そこを歩く恋人達は特に、各々の手に贈り物を大切に抱いて幸せそうだ。

そんな街の雰囲気気圧されそうになり、うつむきかけた顔をユーリは思いきり上に向けた。

吞まれてはいけない。

人混みを縫っていく。時折視線が寄越されるが、気にしている余裕はなかった。

ドレスでこんなに長い距離を歩くのは初めてで。

早く行かないと、彼は帰ってしまうかもしれないと思えてしまつて。

自分がどれだけ滑稽で、人の目におかしく映っていたとしても、今はどうでもよかったのだ。

言わなければならぬから。彼に。

きちんと、伝えなければならぬから。

人の波が消えていく。夜の眠りを邪魔されて眠たげな木々の間を通り抜けて、途切れた視界の先に巨大な建物が現れる。

閼女神の神殿だ。

ここの前を通り過ぎた、あの日がすでに夢のようだ。

今ここにいる自分が、女の装いをして立っていることも嘘のようだ。

心が震えだす。逃げ出したくて、足が勝手に後ろを振り返ろうとする。

逃げてはいけないのに。

怖い。

彼はいったい、自分の姿を見てどんな顔をするだろう。

誰のどんな嘲笑よりも、彼の失笑の方がよほど怖い。喩え彼がどんなにそれを各層としても、自分はきつと気づいてしまうから。

「お待たせしてしまったでしょうか？」

後ろから声をかけられて、緊張で舞い上がっていた心臓がそのまま口から飛び出しそうになった。

「遅くなりまして、申し訳ございません」

来てしまった。

この瞬間が。

彼が。

胸に抱いた包みを強く抱え込む。顔れてしまいそうな足で、必死で身体を支えて後ろへ向き直る。

「ユーリ様？」

無数の炎に照らされたエルヴェは、常と変わらない静かな様子で真っ直ぐユーリを見つめていた。

第十八章 最初で、最後

「……エルヴェ」

泣きたくなる。

炎と闇とエルヴェが、目の前でじわりと輪郭を溶かす。

けれどユーリは、しっかりと言葉を胸の内から送り出す。

「エルヴェ、これを」

半ば押しつけるようにして、持ってきた包みを彼に渡す。ふわりと漂う温かく甘い匂いは、しかしますますユーリを緊張させた。

「これは……」

「今日は聖マイヨン祭だ。だから」

二人で迎えた聖マイヨン祭は何度もある。だが、ともに過ごしたことも祝ったことも一度もない。

そしてこれが、最初で最後だ。

「あのとき言ったな。これ以上私を枷にするなど」

「枷ではないと申し上げたはずです」

「お前がどう思おうと、事実だ」

ユーリが彼を従者に行っている限り、彼の未来はそれ以上どこへも行けない。何者にも、なれない。

何を得ることも、叶わない。

「私は、お前が好きだった」

決して口にすまいと思っていた気持ちだが、思いの外容易に飛び出したことに、ユーリは驚いた。静かな心で、彼女は目の前の成年をつくづくと見つめる。

綺麗な黒い髪、誠実な青い瞳、整った顔立ち。そして何より、それらの奥にある彼のすべてが、いつからか無上の宝物だった。

「お前に嫌われるのが怖くて、離れていってしまったらと考えただけで恐ろしくて、今まで言えなかった……」

うつむいてしまいそうになるのを、堪える。掌に爪が食い込んで

痛い。

エルヴェは、滲む視界の中でただ揺れていた。何も言わない。言えないのだろう。

優しい人だから。

優しくて、ずるい人だから。

だからユーリも、口をつぐむ。

「ユーリ様！」

踵を返した背中に、今更彼の声がぶつかってくる。踏み出した足を止めることなく、ユーリはそれを振り払う。

これで、いいのだ。

夜露に濡れた草が、靴の下でさくさくと音を立てる。

せっかく妹たちが化粧をしてくれた顔がぐしゃぐしゃになってしまったことに気づいたのは、神殿のほとりにある川縁に行き着いたときだった。

第十八章 泣いているから

聖マイヨン祭では、家族や友人へも贈り物をする。今年もミシエールが作ってくれたお菓子を、シャルルはありがたく受け取った。

「おいしそうだね。今年は飴なのかい？」

「はい。去年は焼き菓子だったから」

一人で暮らしていた年月が長かったせいもあるだろうが、ミシエールは料理がうまい。手作りのものをもらったことがなかったシャルルは、去年彼から贈られた菓子を見て驚いたものだった。

当然形は不揃いで、シャルルがこれまでの生活の中で見てきた菓子とは比べものにならない。けれどその素朴さ又何よりも込められた想いが嬉しくて、今年も楽しみにしていたのだ。

「ありがとう」

大切に包みを胸に抱える。ミシエールははにかんだように微笑んだ。「ところで、お前はそろそろ行かなくていいのか？」

すでに飴を口に入れているフレイが、もごもごしながら声をかけてきた。

「せっかくイヴェット達が密告してくれたんだから、逃す手はないぜ？」

「密告って……」

つい先刻の、華やかに着飾った少女達の来訪を思い出して、シャルルは複雑な顔をする。

「馬車も空いてるし、馬で行くならもっと早く着けるぞ」

焚きつけようとしているフレイに、どう答えていいのかわからない。

イヴェット達は、突然やってくるなりこう言ったのだ。

——ユーリは闇の神殿に行くはずだ、と。

しかし、彼女はエルヴェに会うためにそこへ向かったのだ。

「着いてみたら野暮だった、ということはごめんだからね」

言っではみるものの、もやもやとしたおかしい気持ちは少しも晴れない。

「シャルル様」

くす、とミシエールが笑う。

「ご心配なら、僕が保証をあげます」

「え？」

綺麗な紫の瞳が、いたずらっぽく光っていた。

「あの方はマドレーヌがお好きだそうです。神殿へ向かうまでの露店で売っていますから、忘れずお買いになってくださいね」

「ミシエール、何を」

「神殿の奥の、小さな川が流れている場所です。ちょっと暗がりになっっている」

唐突な言葉達は何を意味するか、思い至ってシャルルはぐつと詰まった。

「……視たんだね？」

「ごめんなさい。でも、気になってしまっただけ」

「ミシエールだけを怒るな。俺達みんなで頼んだことなんだから」

割って入ってきたフレイに、シャルルは目を瞠る。年上の友人は、ひどく気遣わしげな顔をしていた。

「あいつはすぐ、一人になろうとする」

黒い目は、幼なじみの少女を想ってなのか憂いで曇っていた。

「きつと泣いてるだろうから、一緒にいてやってくれ」

「フレイ……」

「お前にしか頼めないし、できない」

緑の瞳が、悲しく伏せられていく様がまず印象に残っている。見つめる先には、いつでも彼女の大切な従者がいて。

叶わないことを、届かないことをすでに知っている眼差しだった。シャルルは、静かに立ち上がる。その肩に、ミシエールが黙って外套をかけてくれる。

「留守を頼むよ」

「はい、いってらっしゃいませ」

「しっかりな」

見送ってくれる二人に、シャルルは振り返らないまま手を上げた。

第十八章 露店

夜が踊っている。

幸せそうな笑い声が、風に紛れてゆるりと彼を通り過ぎていく。神殿へ行くには表通りが一番近道だが、露店が建ち並びそれを見て歩くゆっくりした人の流れを進むには馬では無理だ。

シャルルは迷った挙げ句、近い道を急ぐことを選んだ。ミシエールの助言が頭にあったせいもある。

「マドレーヌを」

一番最初に見つけた露店の、おいしそうな匂いを漂わせるマドレーヌを、シャルルは店主に指し示した。赤ら顔の店主は汗ばんだ顔を嬉しそうににこにこさせながら、手際よく袋に包んでくれる。

「盛況なようだね？」

ほとんど残り少なくなった店の菓子を眺めながら、シャルルは話しかけてみる。

「ええ、おかげさんでね。砂糖の値が上がったときはどうしようかと思っただが、祭りの前に安定してなによりだったよ」

そのために、どれだけアラゴン伯爵やオラニエ男爵、他の貴族達が尽力してくれたかをシャルルはよく知っている。

「あんな小さい王様で大丈夫なのかと思ってたが、前の王様と同じでちゃんとわしらを見てくださっているんだねえ」

だから、店主が菓子の包みと一緒にくれたその言葉が、何より嬉しかった。

包みと一緒にその想いを抱いて、彼は夜の中を走る。

こんもりと茂る森が見えてくる。松明の明かりの下をくぐり、シャルルは不意に足を止めた。

こちらへ歩いてくる人影。すらりと背の高い、闇に溶ける髪色と青い瞳。

エルヴェ。

「シャルル様」

膝を折ろうとする彼を目で制して、シャルルはその脇をすり抜ける。

彼の手に綺麗な包みがあったのも気づいていたが、あえて視線と意識を逸らした。

第十八章 もう少し

泣いているだろうから、というフレイの言葉を思い出す。

エルヴェがここに一人でいるのなら、やはりそれは正しい。

切なさ、胸をひたひたと満たす。

どんな想いで、彼女はあの包みを彼に渡したのだろうか。

今、どんな気持ちでいることだろう。

暗がりになっている川のそば、とミシエールは言っていた。シャルルは何度も闇の神殿を訪れているから、心当たりはあった。

真っ直ぐ神殿までを貫く大きな道を逸れて、左へと。

明かりはない。松明の炎では、ここまで届かない。

シャルルは、用心深く歩いて行つた。明かりを点す魔術もあるが、ユーリに見つけられたら逃げられてしまうかもしれないと思つたのだ。

泣き顔を他人に見せられるほど、あの娘は強くない。まして、自分が相手では。

「誰!？」

暗闇から鋭い誰何が飛んでくる。不意のことで驚いたのも束の間、すぐにそれが誰の声なのか、シャルルは気がついた。

「ユーリ」

足を止めたまま、呼びかけてみる。さらさらという水の流れが、静寂を密やかに乱している。

「……シャルル様？」

弱々しく震えているのが、魔道具を通さない彼女本来の声だとわかり、嬉しくなった。同時に、微かな嫉妬も感じたけれど。

誰のために、何のために今夜、それを外していたのか。

しかし今は、もっとしなければならぬことがある。

「エルヴェを、行かせたんだね」

視界が利かない分鮮明に、彼女の感情が伝わってくる。怯えてで

もいるような気配の動揺に、シャルルの方も心細くなった。

「……エルヴェが、大事だったんです」

それでも彼女は、気丈に答えようとする。

「私にとって大切な人が、私のせいで想いが叶わずに苦しんでいるのなら、障害になってはいけないですね？」

悲しくなった。エルヴェの忠誠を、その真実を、シャルルは知っていたから。

同時にそれは、残酷でもあったけれど。

「そんな風に考え、行動できることはとても立派だと思います」
だから、そう答えた。今更語って聞かせたとしても、詮ないことだ。

彼女の行動と想いを、無にすることだ。

闇の帳の向こうにいる少女は、まだ心をたゆとわせている。

「私は」

長い間封じていた真実を、初めて形にするために全身全霊を使っている。

「私は、私自身の価値を、エルヴェが認めてくれることでしか確かめられなかった。だから彼がいなくなることが怖かった」

これまでの数年間、本当に彼女にはエルヴェしかいなかったのだろう。エルヴェが、すべてだったのだ。

でも、今は？

いつの間にか強く抱えていた包みに、シャルルははっとした。これ以上力を入れていたら、台無しになるところだった。

少しずつ暗さに慣れてきた目を、凝らしてみる。ぼんやりとした輪郭しか捕らえられないが、確かに彼女はそこにいる。

もう少し、近づいてみてもいいだろうか。

第十八章　そうして、彼女は

夜露を、布越しの脛にじわりと感じた。一步ずつ、シャルルは彼女との距離を縮めていく。

「シャルル様？」

立ち止まったのは、彼女の声に胸を突かれたから。

少し怯えて、警戒を露わにした、彼女の。

まだ、なのだ。

まだ、ここまでだ。

ほんの三步か、二歩。まだ自分達にはそれだけの隔たりがある。埋められるだろうか。

鼓動が、不安と期待と恐れで跳ねている。

「ユーリ、これを」

おずおずと、差し出す。

今日のこの夜は、特別な意味を持つ包みを。

「え……？」

「君が好きだと聞いたから」

闇の中に、ふわりと甘い香りが漂った。

ユーリにも意味がわかったのだろう。息を呑む音が聞こえた。

自分は、こんなに臆病だったろうか。

暗闇の帳を隔てた少女の、次の反応が恐ろしくて掲げた腕が震えている。

こんなに、怖いものだったのか。

想いを寄せる相手からの、決定的な言葉を聞くのは。

沈黙。

ユーリは動かない。

何も、言わない。

腕だけでなく、足も震え出す。

掌が、重い。

心が萎えて、腕が下がっていく。

「私は……」

けれどそれに負けず劣らず、ユーリもまた怖いのだとその声音で知った。

濡れている。

怯えと、涙で。

「私……シャルル様……、そんな……」

意識せず、彼は動いていた。

数歩の距離を一気に縮めて。

微かな輪郭を頼りに、持っていた包みを柔らかく突きつける。

受け入れられたことを、指先に伝わる感覚で知った。

「ユーリ」

手を下ろし、彼は間近にいるであろう少女に呼びかける。

「君が好きだ」

悲鳴のような、呼気が耳朶を打つ。

先ほどまでが嘘のように、シャルルの中から恐ろしさは消えていた。

静かな気持ちで、彼はただ待つ。

ユーリが、答えてくれるのを。

「……シャルル様」

そうして、彼女は。

懸命に、言葉を紡いだ。

終章

光の神殿の鐘楼から、祝福の鐘の音が響き渡る。

真っ白なドレスに赤い薔薇、そして幸福な笑みをたたえてリアーヌははっとするほど美しかった。

「おめでとう！」

光女神の半月に婚儀をあげる者達には、参列者から黄色の花びらを浴びせられるしきたりだ。リアーヌとクロードがそばを通るとき、ひとときわはしゃいだ様子のイヴェットが、手にした籠いっぱいの花びらを撒いたため、よく晴れた空が光で塗りつぶされたように見えた。

あの事件から、半年近くが過ぎていた。いろいろなものが変わったが、その中で顕著だったのはやはり自分だろうとユーリは思う。胸を締め付けるコルセットが、苦痛ではなくなった。顔を上げて、人の目を見られるようになった。化粧がべたついて不快だと、今は思うことはない。

そして、なによりも。

「イヴェットは楽しそうだね」

くすくすと笑う声に、振り返らずに彼女はうなずいた。屈託なくはしゃぐ妹はこの頃ますます愛らしく、母親を喜ばせている。

何がそうさせるのか、ユーリにはわかる気がした。

「エルヴェはなかなか頑張っているようだね」

「ええ。次の入団試験を受けるつもりだと言っていました。フレイ様も、そろそろやってみるべき時期だと」

答えている自分の、少女と表現するにはやや低い声を卑下することも、今はなくなった。肌身離さず身につけていたチョーカーは、今は鏡台の引き出しに眠っている。

そうなるまでにかかった時間は、決して短くはないけれど。

「それでかわいい弟子が離れていったら、きっと彼は寂しがるだろ

うけれどね」

言葉に釣られて、ユーリは人の輪の中に視線を彷徨させた。

今日の結婚式に正式に客として呼ばれた黒髪の騎士は、祝福しつつもすっかり上質の葡萄酒を堪能しているようだった。その傍らには、ミシエールが控えめに佇んでいる。

「フレイ様のおかげです。それに、お口添えくださったシャルル様の」

ユーリはゆっくりと、隣に立つ人を見上げた。

榛色の瞳は、初めて会ったときと少しも変わらない、優しく思慮深い光を満たしている。

いや、一つだけ変わったのだろうか。

「君が勇気を出した結果だよ」

穏やかな眼差しが、温かい想いでいっぱいになる様に、ユーリは頬を染めてうつむいた。

未だに、戸惑ってしまう瞬間がある。

「さ、そろそろ戻ろう」

本当に自然な仕草で、シャルルの手がユーリの指を攫っていく。

「花嫁が腕輪を投げる頃合いだよ。ほら、ご令嬢方がそわそわし始めている」

式の終わり頃、花嫁が空高く放り投げた腕輪を一番に受け止めた者には、伴侶との幸せな生活が約束されるのだという。

昔のユーリなら、馬鹿げた迷信と一蹴していたところだ。

「ああ、間に合わないかな。ユーリ、急いで」

その遊びに参加できるのは未婚の娘だけなのに、シャルルの方がよほど急いでいる。それがおかしくて笑ってしまい、ユーリはつい走るのがおろそかになる。

「あっ！」

立ち止まったシャルルに釣られて、ユーリもたたらを踏む。

ブレスレットが、太陽の光を踊らせて蒼穹に舞っていた。

その下で少女達が一斉に手を伸ばして、待ち構えていたのに。

「ああ……」

溜息とも笑いともつかない声は、どちらのものだったろう。腕輪を掴もうと動いていた手の一つにぶつかって、腕輪が跳ね上がる。

金の軌跡は、軽く弧を描いて。

たまたまそこにいた、水色の髪の手画家の手にすっと落ちたのだ。それからもう、大騒ぎだった。

落胆に呻いたり、花嫁やミシェールに詰め寄る少女もいたり、もう一度やり直せという声も上がっている。

その中には、当然のようにイヴェットの姿もあって。

彼女を宥めにかかっているエルヴェの背中に同情の視線を送って、ユーリはシャルルと目を見交わした。

そして。

ほとんど同時に、笑い出していたのだった。

終章（後書き）

今回で最終回となります。二ヶ月あまり、おつきあいくださってありがとうございました。感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7047t/>

奇跡の歌は南を目指す

2011年8月31日03時16分発行